

独立行政法人福祉医療機構
(子育て支援基金)助成事業

平成 18 年度

親と子の生活行動と健康に関する調査事業

報告書

平成 19 年 3 月

財団 法人 健康・体力づくり事業財団

はじめに

近年、共稼ぎや核家族の増加など、親の子育てをする環境は変化してきています。親が子どもを健やかに育てていくということは、子ども自身の人間形成にもまたその子どもたちが活躍する将来の我が国にとっても大切なことは言うまでもありません。しかしながら、子どもの朝食欠食や体力の減少、肥満率の増加等、子どもの生活習慣の現状は好ましいとはいえない。その原因の一つと考えられるのは親の生活行動のあり方です。

そこで、子どもの健康づくりは、親の生活行動に大きく関係し、その行動を把握し、見直すことで、今後の子育て支援に活かせるのではないかと考え、親と子の生活行動、具体的には「朝食のとり方」「運動習慣」「近隣との関係」等の実態を調査することにいたしました。本報告書は今回の調査結果をまとめたものです。

本報告書が、子育て支援に取り組んでおられる自治体の皆様や関係団体の皆様に参考にしていただければ幸いです。

最後に、本調査の企画から分析、本書作成のご協力、ご尽力をいただいた研究企画検討委員会並びに調査研究小委員会の委員の方々をはじめ関係の皆様に深く感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 健康・体力づくり事業財団
理 事 長 小澤 壮六

目 次

第1部 調査事業の概要	1
第2部 インターネット調査	9
1. 調査結果	11
1. 1 回答者の属性	11
1. 2 日記形式を用いた親と子の朝ごはん(朝食)摂取状況	15
1. 3 運動習慣	23
1. 4 健康状態	27
1. 5 食生活	33
1. 6 地域ネットワークと情報	37
1. 7 子育てに関する意見	44
1. 8 自由記述に見る特徴	45
2. まとめ	49
第3部 聞き取り調査	51
1. 聞き取り調査の概要	53
2. 調査結果	54
2. 1 回答者の属性	54
2. 2 健康のためにしていること	56
2. 3 食生活に対する考え方	59
2. 4 生活習慣に対する考え方	60
2. 5 子育てで大事にしていること	61
3. まとめ	63
4. 資料	65
4. 1 調査結果データ	67
4. 2 聞き取り調査ガイドと記録票	82
第4部 調査事業のまとめ	93
第5部 インターネット調査による調査計画の概要	97
第6部 資料編	129
1. 調査票	131
1. 1 スクリーニング調査(TSR版)	131
1. 2 スクリーニング調査(NEC版)	139
1. 3 インターネット調査(TSR版)	143
1. 4 インターネット調査(NEC版)	169
2. 基本集計表	181

第1部 調査事業の概要

第1部 調査事業の概要

斎藤 進(日本子ども家庭総合研究所)

1. 目的

健康づくりは、WHOの健康戦略としての「プライマリ・ヘルス・ケア」、その後ヨーロッパ地域を考慮した「ヘルス・フォー・オール」が示され、そして現在は「ヘルスプロモーション」のコンセプトで展開されている([1][2])。わが国でも、ヘルスプロモーションにもとづく健康文化都市の推進、より具体的な目標を定めた「健康日本21」や「健やか親子21」として展開されている([3][4])。しかし、近年の医療財政の改善を視野に、糖尿病、メタボリックシンドロームなど生活習慣と関係が深い健康阻害要因へのアプローチは、非常に大きな課題となっており([5])、小児期から健康な生活習慣づくりが一層重要となっている。

また、平成17年「食育基本法」が施行、食育推進基本計画が作成され、健全な心身を培い、豊かな人間性をはぐくむための食に関する施策が推進されている。また、文部科学省は「よく体を動かし、よく食べ、よく眠る」という成長期の子どもに必要不可欠な基本的生活習慣が大きく乱れており、この問題に取り組む「早寝早起き朝ごはん」国民運動を推進している([6])。

子育ての視点からみると、近年、核家族化や小家族化、地域関係が希薄化などにより、相談者や頼れる友人の減少などから子育ての孤立化がすすみ、子育て不安を感じる親が増加している。これらの対応が子育て支援の大きな柱となり、つどいの広場や子育てサロンが期待されている([7][8])。子どもの生活行動や保健行動は、親を中心とした家族、次いで友人を含めた学校等の影響を受けて社会化されることから、親の生活行動や子育て観について注目した。

そこで、本調査は、①親の子育て観、②親と子の生活行動、③親と子の健康についての実態とその関係を検討し、今後の家庭における健康づくりや子育て支援サービスのあり方を考える基礎資料を得ることを目的とした。なお、生活行動については、朝食（朝ごはん）の摂取と運動習慣に絞り、その他についても調査実施上の制約から、後述する内容に限定して実施した。

2. 実施方法と内容

2. 1 実施組織

調査は、小児保健学、社会教育学、調査・統計学、地域看護学、健康教育学の研究者で構成した調査企画委員会を設置し、調査内容の企画、実施方法、分析、報告書作成などの方針を審議した。この委員会で、調査対象者の検討、調査票の検討、聞き取り調査の検討、分析方法の検討、調査結果の解析、報告書の内容検討などを審議決定し、調査研究小委員会が実際の作業にあたった。調査研究小委員は、栄養学、地域保健学、地域看護学、地域組織活動リーダー等の研究者と地域健康づくりの実務者で構成した（調査企画委員、調査研究小委員は別項参照）。

調査は、親と子の生活行動と健康に関する実態について、小中学生とその親を対象に調査の実施を検討したが、親子ペアの確認やサンプリングの困難性から、今回の調査では、小中学生の母親を対象とした。また、調査方法については、インターネット調査、聞き取り調査、郵送調査の3方式を予定していたが、予算や時間等の関係でインターネット調査と聞き取り調査の2種類で実施した。

2. 2 インターネット調査

インターネット調査においては、インターネット利用者集団とパネル登録集団の不確実性やパネル集団の偏りなど、考慮すべき事項があり、今回の調査の実施において重要な課題であった。配慮した内容については、別項の「インターネット調査による調査設計の概要」（大隅）に詳細な報告があるので参考されたい。なお、調査実施機関とその調査サンプルを抽出

したパネル等については、別項の実施機関に記載した。

調査対象については、親子のパターンを考慮し、調査することにした。なぜなら、親の就業等の条件や子どもの性別のみならず、子どもの年齢、つまり学校の学年による生活行動の制約が影響していると考えられたからである。そこで、今回は、①共働きの有無、②子ども数（単複）、③子どもの性別、④子どもの年齢（学年）により、32のパターン（表1）を設定して調査を計画した。この32のパターンに基づき、比較検討が可能なサンプリングを実施した。

調査項目については、①基本的な属性および住居環境、②食生活について、③運動習慣、④地域での友人関係（地域ネットワーク）、⑤健康行動、⑥健康情報源、⑦子育て観、⑧子育ての悩み、⑨生活習慣に対する考え方等（表2）について行った。

表1 親子の32パターン

就業状況	子ども数	性別	年齢	就業状況	子ども数	性別	年齢
共働き	単	男	小学1、2年生	非共働き	単	男	小学1、2年生
			小学3、4年生				小学3、4年生
			小学5、6年生				小学5、6年生
			中学生				中学生
		女	小学1、2年生		単	女	小学1、2年生
			小学3、4年生				小学3、4年生
			小学5、6年生				小学5、6年生
			中学生				中学生
	複数	男	小学1、2年生		複数	男	小学1、2年生
			小学3、4年生				小学3、4年生
			小学5、6年生				小学5、6年生
			中学生				中学生
		女	小学1、2年生		複数	女	小学1、2年生
			小学3、4年生				小学3、4年生
			小学5、6年生				小学5、6年生
			中学生				中学生

2. 3聞き取り調査

聞き取り調査については、東京近郊に居住する小中学生を持つ母親で、調査協力に同意した20ケースについて調査研究小委員5名が、出向いて聞き取りを実施した。対象者への協力は、インターネット調査と同様32の親子パターンを考慮して選定し、依頼した。

調査は、聞き取り調査ガイドを準備し、属性項目や聞き取り項目の柱による調査票形式の記録用紙を使用し、インタビュー方式で実施した。1名1時間程度を予定して行った。

その内容は、①健康のためにしていること、②朝食と食生活に対する考え方、③生活習慣に対する考え方、④子育てで大事にしていること等への意見を中心とした（表3）。詳細は、別項の聞き取り調査報告（山口・松本）を参照いただきたい。

表2 親と子の生活行動と健康に関する調査内容

①基本的な属性および住居環境
性・年齢
職業
通勤・通学時間
家族構成
住居環境
②食生活について
朝食の摂取状況（欠食頻度、時間と時間帯、品数、主食、親子同一の食品数）
家族そろってとる朝食の回数
朝食におけるコンビニやファーストフードなど外食の利用状況
③運動習慣
1週間の運動回数
スポーツクラブやサークル等への入会状況
子どもの放課後の遊び
自転車操作
④地域での友人関係（地域ネットワーク）
友人数
相談できる人の数
地域での活動参加状況
⑤健康行動
健康状態
健康上の不安や心配事の有無
健康のためにしていること
⑥健康情報源
健康についての情報入手先
携帯電話の使用状況
⑦子育て観
子育てで大事にしていること
⑧子育ての悩み
子育てでの悩みや気がかり
⑨生活習慣に対する考え方
食生活に対する考え方
規則正しい生活習慣に対する考え方

表3 聞き取り調査の内容

(現状について選択肢があるのと同等の質問)
①属性（家族構成、年齢、職業、住居形態、通勤時間）
②健康状態と健康上の不安心配の有無
③週間の朝食摂取頻度と家族そろっての朝食頻度
（インタビュー形式の内容）
④母親が家族の健康のために実施していること（自分自身、配偶者、第一子）
⑤子どもの食生活に対する考え方
⑥規則正しい生活習慣を身につけさせることへの意見
⑦子育てで大事にしていること

3. 実施機関

調査事業は、調査企画委員（表4）と調査研究小委員（表5）の各委員会により、実施した。基本骨子の検討は、両委員合同の合同委員会を開催して協議し、実際の作業は研究小委員会を開いて行った。この会合の他、電子メールを使用したメール会議を多数開催してすすめた。

インターネット調査については、同時に2社の調査実施機関（東京サーベイ・リサーチ、NECネクサソリューションズ）とも打合せながら、スクリーニング調査、本調査を実施した。その詳細は、別項（大隅）の報告を参照いただきたい。

聞き取り調査は、山口委員を中心に松本、大久保、田所、森田、斎藤の6名でインターネット調査と同時期に実施した。聞き取り調査実施後、小委員会で結果を分析し、報告書の作成を行った。

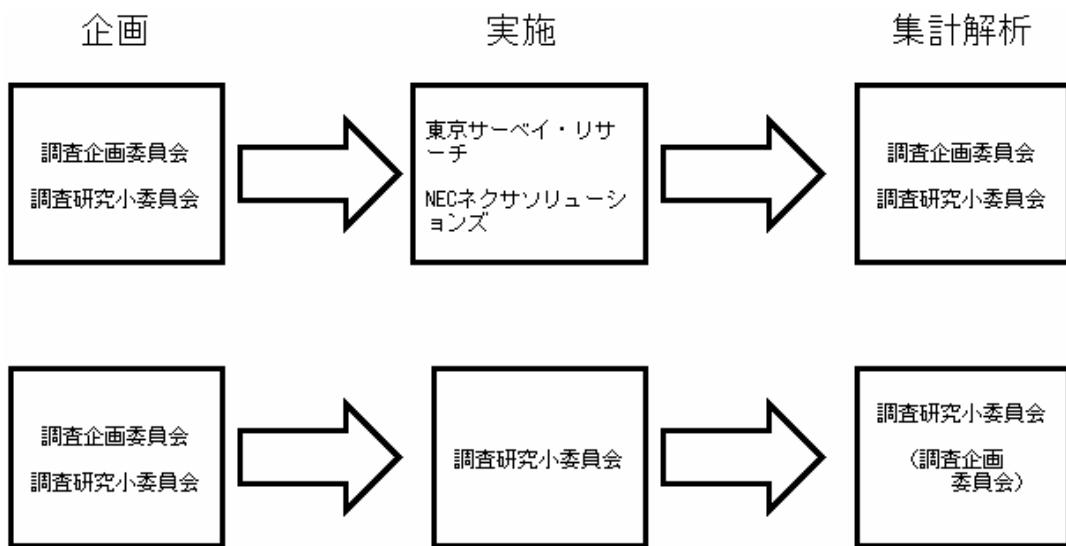


図1 調査実施の流れ

表4 「親と子の生活行動と健康に関する調査事業」調査企画委員

- | |
|-----------------------------|
| 1. 大隅 昇（統計数理研究所名誉教授） |
| ○2. 斎藤 進（日本子ども家庭総合研究所主任研究員） |
| 3. 蛭田 道春（大正大学人間学部教授） |
| 4. 柳澤 正義（日本子ども家庭総合研究所所長） |
| 5. 山口 忍（順天堂大学医療看護学部講師） |

(○委員長) 五十音順

表5 「親と子の生活行動と健康に関する調査事業」調査研究小委員

- | |
|-------------------------------|
| 1. 池田 康幸（埼玉県三芳町役場管理栄養士） |
| 2. 小山 修（日本子ども家庭総合研究所地域保健担当部長） |
| 3. 大久保 美恵（千葉県習志野市役所保健師） |
| 4. 斎藤 進（日本子ども家庭総合研究所主任研究員） |
| 5. 田所 裕子（ASAKA いくじネットワーク代表） |
| 6. 松本 弘子（武藏野大学看護学部看護学科助教授） |
| 7. 森田 圭子（わこう子育てネットワーク代表） |
| 8. 山口 忍（順天堂大学医療看護学部講師） |
| 9. 和田 耕太郎（ヘルス・マネジメント・コンサルタント） |

/日本子ども家庭総合研究所嘱託研究員)

五十音順

表 6 調査実施機関

調査実施機関	用いた調査パネル	備考
株式会社 東京サーベイ・リサーチ	Hi-panel (ハイパネル) 企画：株式会社 博報堂 管理運営：株式会社 東京サーベイ・リサーチ内 Hi-panel 事務局	パネルA (TSRと表記された集計表あり)
NEC ネクサソリューションズ 株式会社	BIGLOBE カフェ(ビッグローブカフェ) NEC ビッグローブ 株式会社	パネルB (NECと表記された集計表あり)

【文献】

- [1] 山本幹夫監訳、ヘルス・フォード・オール、垣内出版、1990
- [2] 島内憲夫訳、ヘルスプロモーション、垣内出版、1990
- [3] 「健康日本21」企画検討会報告書、健康・体力づくり事業財団、2000
- [4] 厚生労働省「健やか親子21」の推進について
 (http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken.html)
 (http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/)
- [5] 藤井紀男、「健康フロンティア戦略の推進～これからの生活習慣病対策について～」、
 日本公衆衛生雑誌 52(8) ; p. 122、2005
- [6] 文部科学省「早寝早起き朝ごはん」国民運動の推進について
 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/asagohan/index.htm)
- [7] 乳幼児健康度調査報告書、日本小児保険協会、2001
- [8] 「今後の家庭教育支援の充実についての懇談会」報告、「社会の宝として子どもを
 育てよう！」、2002

第2部 インターネット調査

1. 調査結果

1. 1 回答者の属性

山口 忍(順天堂大学医療看護学部)

インターネット調査に回答したのは833名であった。その内訳は、パネルAは38.7%（322名）、パネルBは73.3%（511名）で、パネルBがパネルAのほぼ2倍であった。以下に全回答者と、パネルA、Bの状況を示す。

1. 母親の年齢

回答した母親の年齢は、「35歳～39歳」39.9%（332名）が最も多く、次いで「40～44歳」36.7%（306名）であった。パネルAの母親の年齢は、「35歳～39歳」41.0%（132名）が最も多く、次いで「40～44歳」34.8%（112名）であった。パネルBの母親の年齢は、「35歳～39歳」39.1%（200名）が最も多く、次いで「40～44歳」38.0%（194名）であり、パネルAと同じような傾向を示していた。

2. 父親の年齢

父親の年齢は「40歳～44歳」40.2%（335名）が最も多く、次いで「35歳～39歳」27.3%（227名）であった。パネルA、Bともに同じ傾向であった。

3. 子どもに関すること

3.1 子どもの人数

子どもの人数は、「2人」56.5%（471名）が一番高く、次いで「1人」25.5%（212名）であった。平均子ども人数は「1.95人」であった。パネルA、Bとともに同様の傾向であった。平均子ども人数はパネルA「2.04人」パネルB「1.89人」であった。

3.2 第1子の性別と学年

第1子の性別は、「男子」51.9%（432名）、「女子」48.1%（401名）とほぼ半数ずつであった。パネルA、Bともに同様の傾向を示していた。第1子の学年は、「小学1年生」から「中学3年生」であり、最も多い学年は「小学4年生」12.4%（103名）、次いで「小学3年生」12.0%（100名）であった。一番少ない学年は「中学3年生」9.7%（81名）、次いで「小学1年生」10.1%（84名）であった。パネルAは、第1子の学年は、「小学1年生」から「中学3年生」であり、最も多い学年は「中学2年生」13.7%（44名）、次いで「小学3年生」「小学4年生」がおのおの12.4%（40名）であった。一番少ない学年は「中学3年生」8.4%（27名）、次いで「小学5年生」9.6%（31名）であった。パネルBは、第1子の学年は、最も多い学年は「小学5年生」13.1%（67名）、次いで「小学4年生」「小学3年生」が12.4%（60名）であった。一番少ない学年は「小学1年生」10.2%（52名）、次いで「中学3年生」10.6%（54名）であった。

3.3 第2子以降の学年

第2子の学年は、「未就学児・乳幼児」24.6%(205名)から「中学2年生」0.7%(6名)であった。第3子の学年は、「未就学児・乳幼児」12.2%（102名）から「小学6年生」0.2%(2名)であった。第4子の学年は「未就学児・乳幼児」2.0%(17名)と「小学4年生」0.2%(2名)、第5子の学年は「未就学児・乳幼児」0.1%(1名)、「小学2年生」0.1%（1名）であった。

4. 同居の有無

子どもの同居状況は、ほぼ全員が「同居」であった。第2子のみ「同居していない」0.3%（2名）あり、パネルA、Bともに1名ずつであった。

父親の同居状況は、「同居している」97.4%(811名)で、「不明」0.2%(2名)であった。パネルA、Bともに同様の傾向であった。

5. 住居形態

住居形態は、「集合住宅（マンション・アパートなど）」50.7%(422名)、「一戸建て」49.3%（411名）とほぼ半数ずつであった。パネルAでは「集合住宅（マンション・アパートなど）」49.4%(159名)より「一戸建て」50.6%（163名）が若干高く、パネルBでは「集合住宅（マンション・アパートなど）」が若干高かった。

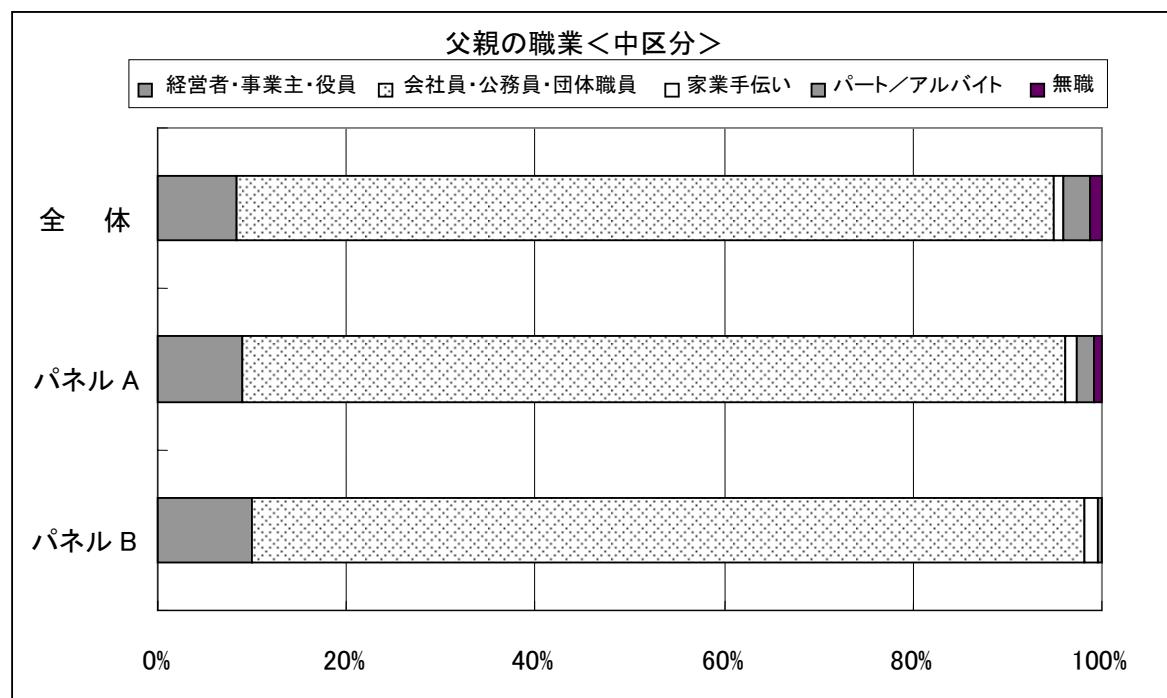
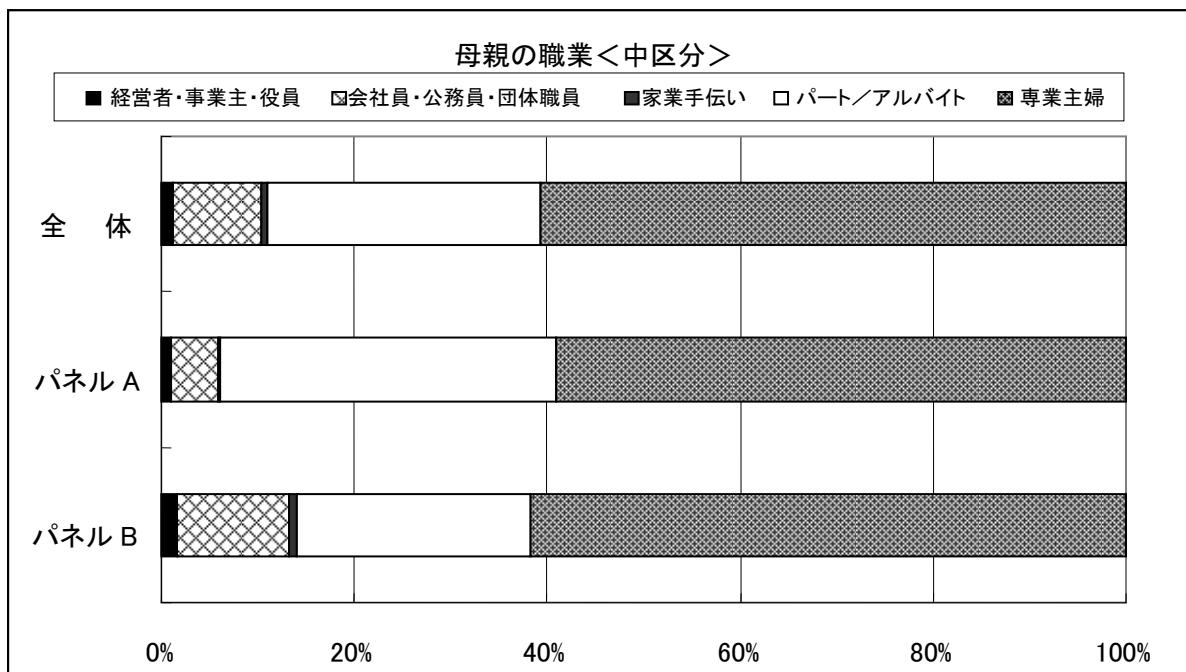
6. 職業

職業については小区分で見ていった。

就業状況は、「共働きではない」61.3%（511名）が「共働き」38.7%（322名）より高かった。パネルAは、「共働きではない」59.0%（190名）が「共働き」41.0%（132名）より高く、パネルBも同様で、「共働きではない」62.8%（321名）が「共働き」37.2%（190名）より高かった。

母親の職業は「専業主婦」が最も高く60.6%（505名）を占めていた。次いで「パート／アルバイト」28.2%（236名）であり、中でも「パート／アルバイト：事務職」が9.7%（81名）が最も高かった。パネルAも同様の傾向で「専業主婦」59.0%（190名）、次いで「パート／アルバイト：事務職」13.4%（43名）であった。パネルBも同様で、「専業主婦」61.6%（315名）、次いで「パート／アルバイト：事務職」7.4%（38名）であった。

父親の職業は「会社員・公務員・団体職員：管理職」22.2%（185名）が最も高く、次いで「会社員・公務員・団体職員：技術職／研究職」21.5%（179名）であり、「無職」0.7%（6名）もあった。パネルAは、同様に「会社員・公務員・団体職員：管理職」27.6%（89名）が最も高く、次いで「会社員・公務員・団体職員：技術職／研究職」20.2%（65名）であった。パネルBは、「会社員・公務員・団体職員：技術職／研究職」22.3%（114名）、「会社員・公務員・団体職員：管理職」18.8%（96名）とパネルAとは逆の傾向であり、「無職」は全て含まれていた。



7. 世帯収入

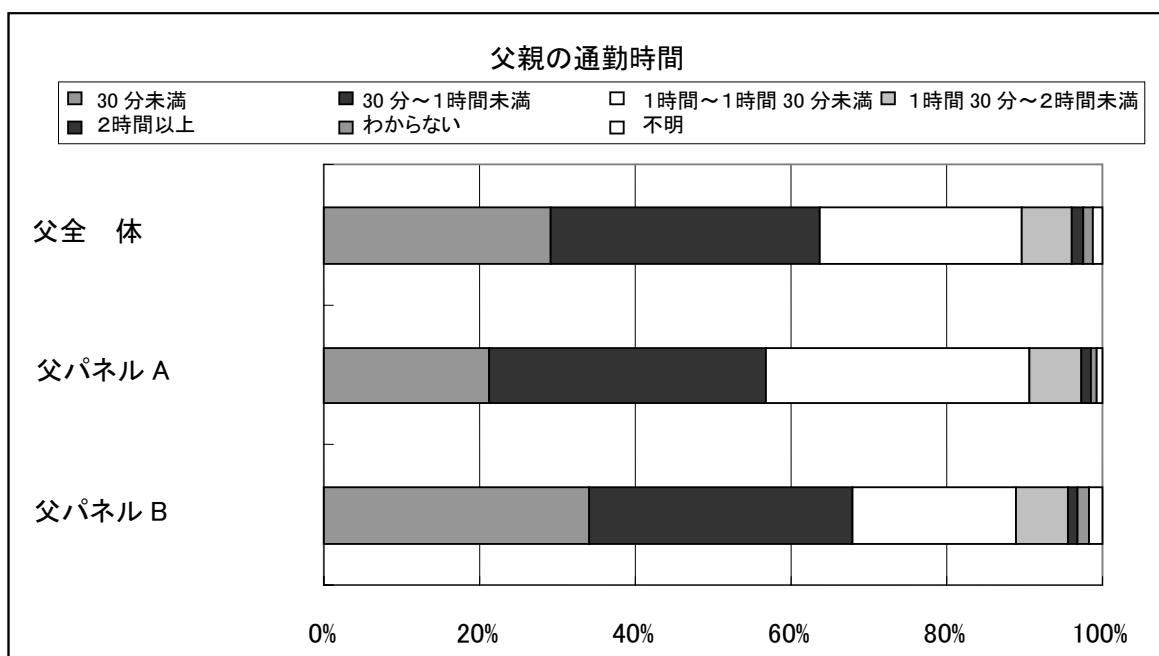
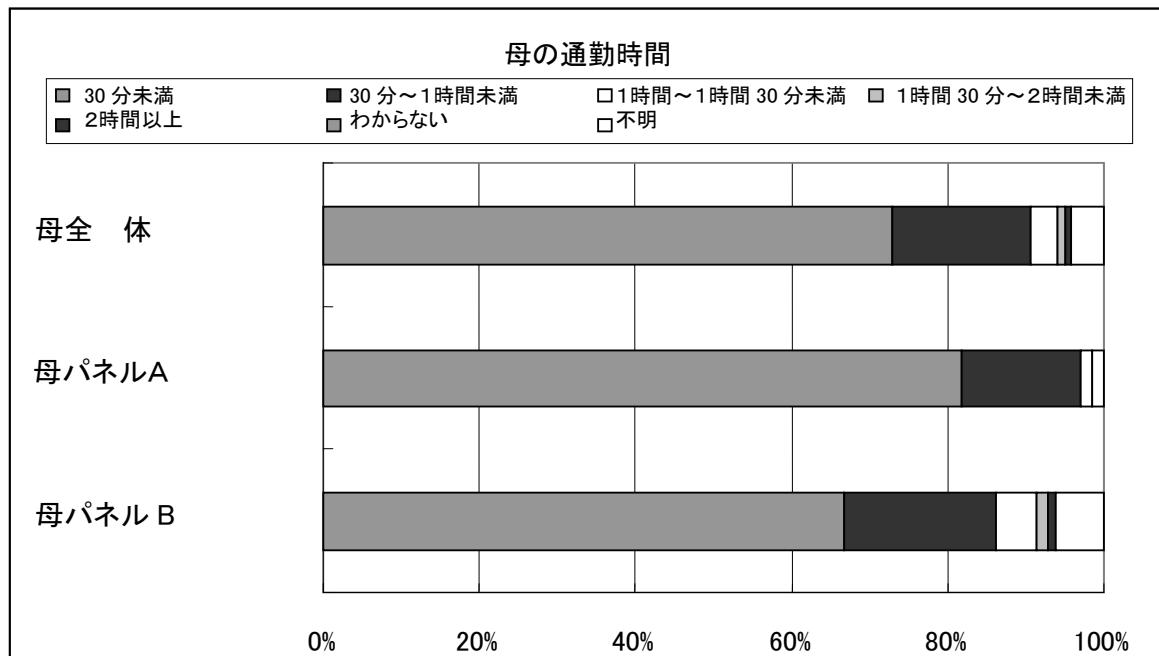
世帯収入は、「500万～600万円未満」16.0%（133名）が最も高く、次いで「700万～800万円未満」13.1%（109名）であった。「わからない／答えたくない／不明」は13.2%（115名）であった。パネルAは、「700万～800万円未満」14.6%（47名）、「500万～600万円未満」14.3%（46名）であり、パネルBは、「500万～600万円未満」17.0%（87名）、「700万～800万円未満」12.1%（62名）であった。

8. 通勤、通学時間

母親の通勤時間は「30分未満」72.9%（239名）が圧倒的に高く、次いで「30分～1時

間未満」17.7% (58名)であった。パネルA、Bともに同様の傾向であるが、パネルAがパネルBより「30分未満」の割合が15ポイント高かった。

父親の通勤時間は「30分～1時間未満」34.6% (286名)、「30分未満」29.0% (240名)の順で高かった。パネルAは、「30分～1時間未満」35.7% (115名)、「1時間～1時間30分未満」33.9% (109名)、パネルBは「30分未満」34.1% (172名)、「30分～1時間未満」33.9% (171名)であり、パネルBがパネルAより通勤時間が短かった。



第1子の通学時間は、「5～10分以内」24.8% (207名)が最も高く、次いで「10分～15分以内」20.9% (174名)であった。約6割が「20分以内」で通学しており平均通学時間は「17.7分」であった。パネルA、Bともに同様の傾向であり、平均通学時間はパネルA「17.0分」、パネルB「18.2分」であった。

1.2 日記形式を用いた、親と子の朝ごはん(朝食)摂食状況

池田 康幸(埼玉県三芳町保健センター)

生活リズムを整えるうえで、規則正しい食生活が重要な役割を担っているのは周知の事実であり、朝ごはん（以下「朝食」とする）を欠食することによる影響が報告されている（[1]）。内閣府が公表した食育白書（平成17年度食育推進施策）によると、いまや日本人の食生活は多くの問題が深刻化し、生活のリズムとしての規則正しい食事、家族が食卓を囲んだ楽しい食事、等の望ましい姿の「健全な食生活」が失われつつあると述べている（[2]）。

ここでは、親と子の朝食の摂食状況を、インターネット調査を用い日記形式で連続した7日間調査することを試みた。なおこの調査での欠食とは「果物」「乳製品（牛乳、チーズ、ヨーグルトなど）」はそれらだけでも「摂食」とし、「コーヒー・紅茶・お茶・清涼飲料水などの嗜好品だけ」の場合とし、厚生労働省が行う国民健康・栄養調査（平成16年度）とは異なる。

1. 朝食の摂食パターン

1.1 朝食の摂食状況

1.1.1 朝食の摂食状況（全体（7日間））

7日間全体集計の摂食状況では、父親の欠食率が18.3%と高い傾向であった。また、母親が摂食状況を確認できていない「わからない」では、父親が7.5%、第一子が0.4%であった。

1.1.2 平日（月曜～金曜）、週末（土曜、日曜）別の摂食状況

平日と週末に分けた摂食状況では、母親と第一子の欠食率が平日より週末が高い傾向であったのに対し、父親は週末より平日が高い傾向を示していた。この調査では、第一子の平日の欠食率が1.8%であり、厚生労働省が行なった「国民健康・栄養調査」（平成16年）（[2]）より低い傾向が見られた。（図1）

1.1.3 朝食の摂食日数（7日間）

7日間の摂食日数、すなわち一週間「毎日」朝食を食べた母親、父親、第一子は、それぞれ78.5%、51.7%、85.4%であり、「6日間」朝食を食べた母親、父親、第一子は、それぞれ9.5%、8.2%、8.9%であった。また全く朝食を食べなかつた母親、父親、第一子は、それぞれ1.2%、3.7%、0.1%であった。日記形式を用いたことによりこの調査では、父親の約5割が母親の約3割が第一子の1割強が、毎日朝食を食べていないという傾向であった。（図2）

1.1.4 曜日別の摂食状況

曜日別摂食状況では、平日の5日間においてもっとも摂食率が高い曜日と低い曜日の差は母親で1.1%、父親で1.9%、第一子で1.1%であった。曜日別の傾向に大きな変化は見られなかった。同様に週末の2日間では、母親で0.7%、父親で4.4%、第一子で0.7%であり、この調査では、父親の週末（土曜日と日曜日）は、他に比べ差が大きかった。

1.2 朝食の時間帯

この項目は、朝食を食べたものをベースとした。

1.2.1 朝食の時間帯（全体（7日間））

7日間全体集計の時間帯は、母親、父親、第一子とも「7時台」がもっとも多く、それぞれ、44.9%、41.6%、57.7%であり、次いで、母親は「8時台」の25.2%、「父親」と「第一子」は6時台の26.1%、19.7%であった。

2.2.2 平日（月曜～金曜）、週末（土曜、日曜）別の時間帯

平日と週末に分けた時間帯において、平日は母親、父親、第一子とも「7時台」がもっと

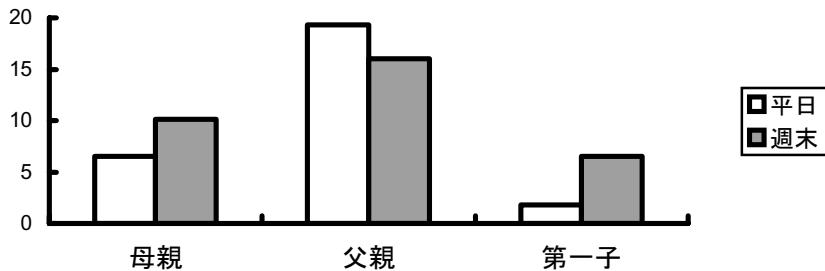


図1 平日、休日の摂食状況(欠食率%)

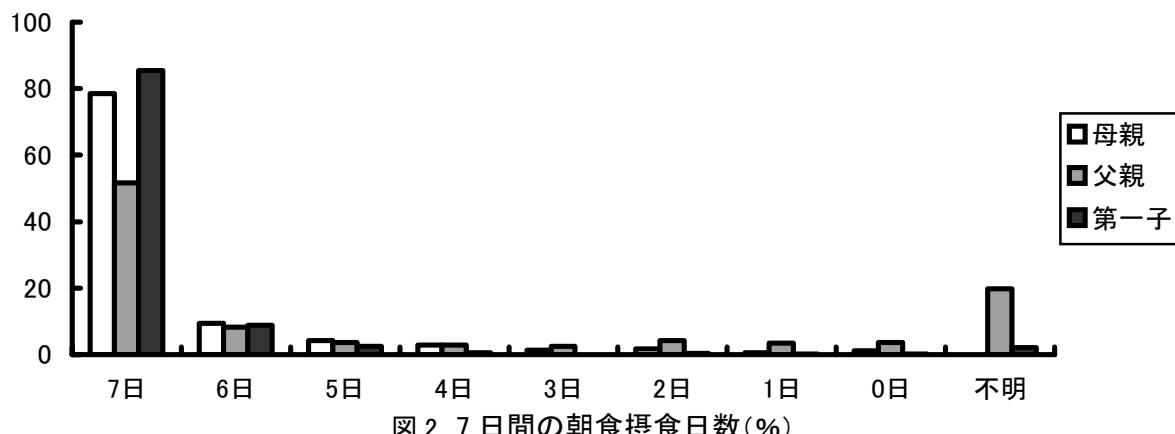


図2 7日間の朝食摂食日数(%)

も多く、それぞれ、52.2%、47.8%、70.1%であり、次いで母親は「8時台」の21.6%、父親と第一子は「6時台」の33.1%、24.7%であった。週末は母親、父親、第一子とも「8時台」がもっとも多く、それぞれ、34.5%、30.3%、34.0%であり、次いで母親、父親、第一子とも「7時台」「9時台」であった（図3）。

1.3 朝食にかけた時間

この項目は、朝食を食べたものをベースとした。

1.3.1 朝食にかけた時間(全体(7日間))

7日間全体集計の朝食にかけた時間は、母親、父親は「10分」がもっと多く、それぞれ38.1%、37.2%であり、次いで「15分」の29.2%、29.3%であった。第一子は「15分」の32.9%がもっと多く、次いで「10分」の26.4%、20分の24.1%の順であった。母親と父親の約7割が、第一子の約6割が15分以内に朝食を済ませている。

1.3.2 平日(月曜～金曜)、週末(土曜、日曜)別の朝食にかけた時間

平日と週末に分けた朝食にかけた時間において、平日は母親、父親とも「10分」がもっと多く、それぞれ41.4%、40.5%であり、次いで「15分」の29.4%、30.0%であった。第一子は「15分」の34.1%がもっと多く、次いで「10分」の27.9%、「20分」の23.7%であった。週末は母親、父親とも「10分」が多く、それぞれ29.5%、29.4%であり、次いで「15分」の28.6%、27.5%、「20分」の21.4%、22.2%の順であった。第一子は「15分」の29.8%が多く、次いで「20分」の25.0%、「10分」の22.4%の順であった（図4）。この調査では、平日より週末に朝食にかける時間が長くなる傾向が見られた。

1.4 朝食の品数

この項目は、朝食を食べたものをベースとした。

[ここでの品数]

- 「ごはん、みそ汁、牛乳、ウインナー、果物」で5品。
- 「パン、サラダ、牛乳」で3品

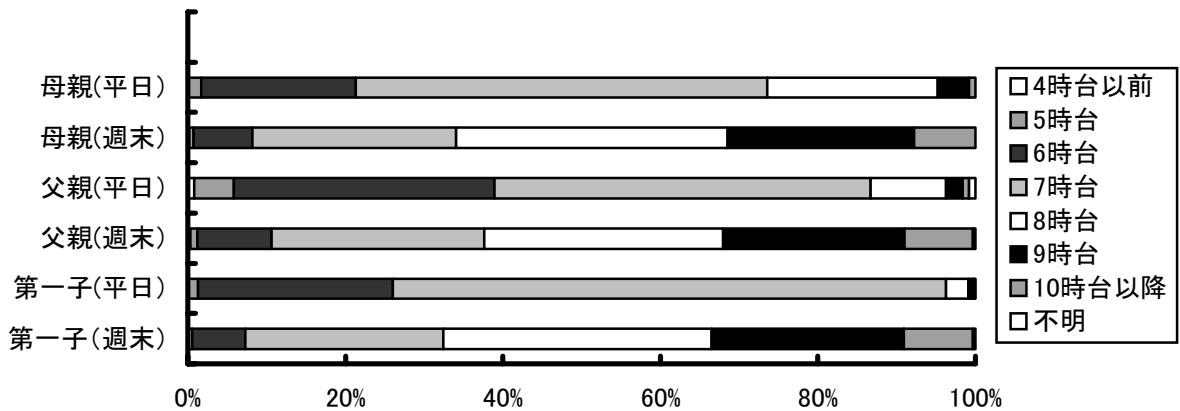


図3 平日、週末別の朝食の時間帯(%)

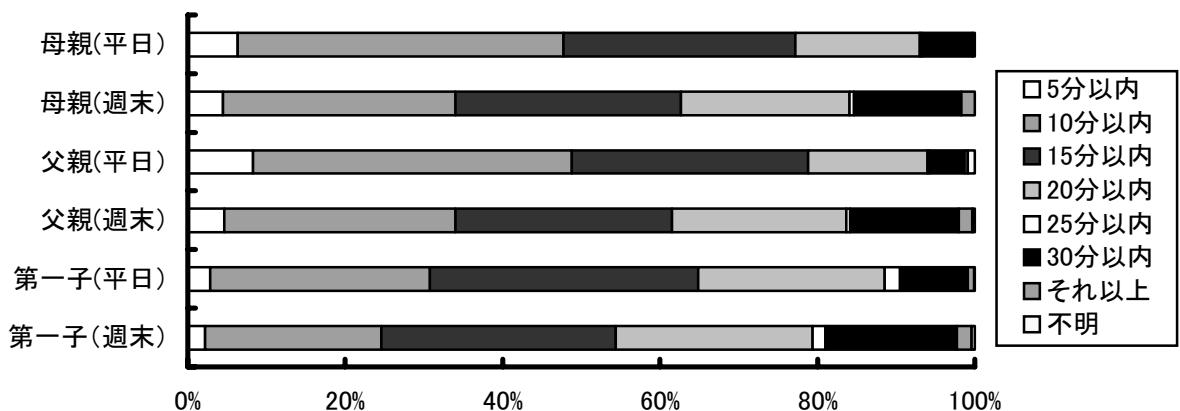


図4 平日、週末別の朝食にかけた時間(%)

次いで「2品」の27.5%、28.2%であった。また三者とも「1品」はほぼ1割であり、「5品以上」は2割に満たなかった（図5）。

1.5 朝食の主食

この項目は、朝食を食べたものをベースとした。

[ここでの主食]

- ・ ごはん（おにぎり、焼きおにぎり、もち、茶漬け含む）
- ・ パン（ドーナツ、ピザ、ホットケーキ、ハンバーガー含む）
- ・ 麺類（そば、うどん、ラーメン、スペグティ、焼きそばなど）
- ・ シリアル食品（コーンフレーク、オートミールなど）

1.5.1 朝食の主食（全体（7日間））

7日間全体集計の朝食の主食は「パン」と「ごはん」で9割を超えており。母親、父親、第一子とも同じ傾向を示しており、「パン」がもっとも多く、それぞれ、55.7%、48.5%、49.0%であり、次いで「ごはん」の、36.3%、43.8%、43.9%であった。母親は「パン」が「ごはん」より約2割多かった。「麺類」は三者とも約2%であった。「シリアル」は母親と第一子が約2%なのにに対し、父親は1%であった。また、「特に主食といえるものは食べていない」は、母親が2.4%、父親が2.5%に対し、第一子は0.8%であった。

1.5.2 平日（月曜～金曜）、週末（土曜、日曜）別の朝食の主食

平日と週末に分けた朝食の主食において、平日の母親は「パン」がもっと多く53.5%に対し、父親、第一子は、「パン」がそれぞれ、45.9%、46.9%、「ごはん」がそれぞれ、46.5%、46.3%とほぼ同じであった。また、「特に主食といえるものは食べていない」は、母親が2.5%、

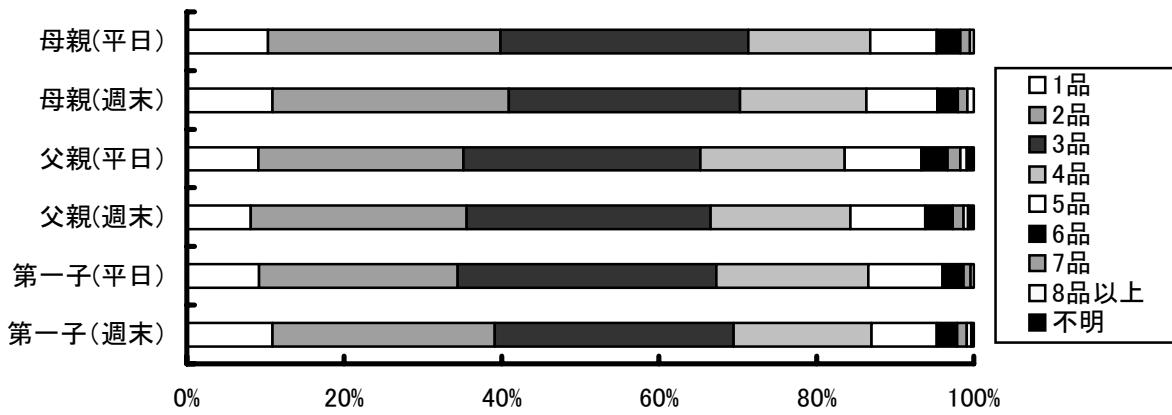


図 5 平日、週末別の朝食の品数(%)

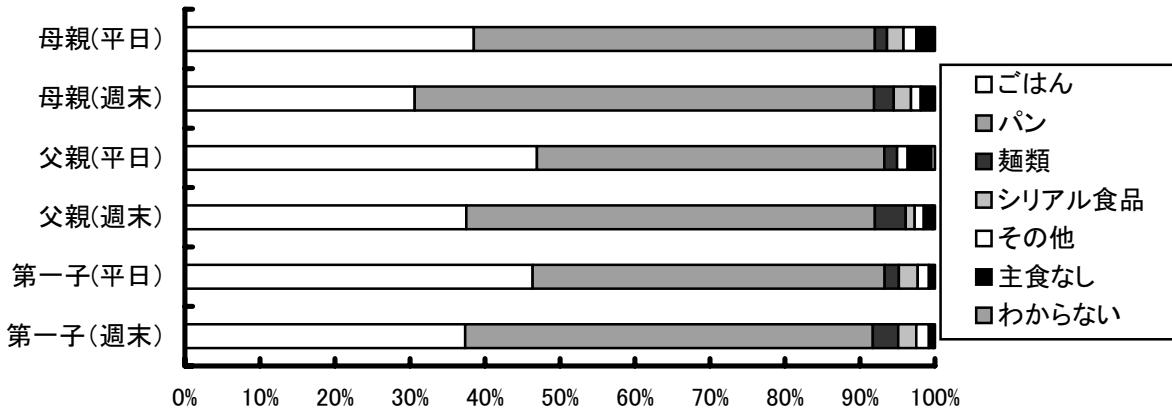


図 6 平日、週末別の朝食の主食(%)

父親が 3.1%、第一子が 0.8% であった。週末は母親、父親、第一子とも同じ傾向を示しており、「パン」がもっと多く、それぞれ、61.2%、54.5%、54.4% であり、次いで「ごはん」の、30.6%、37.5%、37.4% であった。週末はごはんよりパンが多く、母親では約 2 倍であった。また「特に主食といえるものは食べていない」は、母親が 1.9%、父親が 1.2%、第一子が 0.6% であり、週末より平日が高い傾向であった（図 6）。

1.6 三者共通の朝食の品数

この項目は、母親、父親、第一子とともに朝食を食べたものをベースとした。

[ここでの品数]

- ・ 「ごはん、みそ汁、牛乳、ウインナー、果物」で 5 品。
- ・ 「パン、サラダ、牛乳」で 3 品
- ・ 「野菜炒め、目玉焼き（付け合わせも含む）、フルーツポンチ」で 3 品。

1.6.1 三者共通の朝食の品数(全体(7 日間))

7 日間全体集計での三者共通の朝食の品数は「1 品」がもっと多く 25.4% であり、次いで「同じものは 1 品もない」の 21.9%、「2 品」の 20.0% の順であった。この調査において、三者共通の朝食の品数は少ない傾向であった。また「同じものは 1 品もない」が約 2 割であり、5 家族のうち 1 家族は、家族が全く違う朝食の内容であることが伺える。

1.6.2 三者共通の朝食の品数(全体(7 日間))

平日と週末に分けた三者共通の朝食の品数は、「1 品」と「同じものは 1 品もない」がほぼ同じで、それぞれ 25.1%、24.1% であり、ついで「2 品」「3 品」の順であった。週末は「1 品」がもっと多く 26.3% であり、次いで「2 品」の 20.7%、「3 品」の 17.9% の順であった。平

日ではもっとも高い傾向を示していた「同じものは1品もない」は16.4%であった。この調査において、三者共通の朝食の品数は週末より平日が少ない傾向であった。また「同じものは1品もない」が約2割であり、5家族のうち1家族は、家族が全く違う朝食の内容であることが伺える。

2. 共働きの状況と朝食の摂食の関連

ここでは7日間の全体集計をもとにした。

2.1 朝食の品数

母親では、「共働き」は「2品」がもっとも多く32.0%、次いで「3品」の26.8%、「4品」の11.9%に対し、「共働きでない」は「3品」がもっと多く29.7%、次いで「2品」の29.2%、「4品」の13.0%であった。「4品」ではその差が約4%であった。また「1品」は「共働き」が11.7%、「共働きでない」が9.8%であり、この調査ではほぼ同様の傾向であった。父親では、「共働き」「共働きでない」の双方が同様の傾向であり、それぞれ「3品」がもっと多く30.0%、30.5%次いで「2品」の27.4%、26.0%、「4品」の16.2%、19.4%であった。また「1品」は「共働き」が9.5%、「共働きでない」が8.3%であり、この調査ではほぼ同様の傾向であった。第一子では、「共働き」「共働きでない」の双方が同様の傾向であり、それぞれ「3品」がもっと多く32.9%、31.7%次いで「2品」の26.3%、25.8%、「4品」の15.9%、20.7%であった。「4品」はその差が約5%であった。また「1品」は「共働き」が11.0%、「共働きでない」が8.8%であった。この調査では、「共働きの状況」での品数に大きな差が見られなかつたが、母親と第一子の「4品」では、「共働きでない」が約5%高い傾向が見られた。

2.2 朝食の主食

母親では、「共働き」「共働きでない」の双方が同様の傾向であり「パン」がもっと多く55.5%、55.8%、次いで「ごはん」の35.9%、36.5%であった。また「特に主食といえるものは食べていない」は「共働き」で2.9%、「共働きでない」で2.0%であった。父親でも、「共働き」「共働きでない」の双方が同様の傾向であり、それぞれ「パン」が47.8%、48.9%、次いでごはんの、44.8、43.2であった。また「特に主食といえるものは食べていない」は「共働き」で2.3%、「共働きでない」で2.7%であった。第一子でも、「共働き」「共働きでない」の双方が同様の傾向であり、それぞれ「パン」がもっと多く49.0%、48.9%次いで「ごはん」の43.4%、44.1%であった。また「特に主食といえるものは食べていない」は「共働き」で0.7%、「共働きでない」で0.8%であった。この調査では、「共働きの状況」での主食に大きな差が見られなかつた。

3. 朝食の主食内容と朝食の品数の関連

ここでは7日間の全サンプリング集計をもとに、主食種類別に品数の変化をみた(表1)。

3.1 主食が「ごはん」

ごはんを選択した母親、父親、第一子は、順に36.3%、43.8%、43.9%であり、このうち母親は「3品」がもっと多く30.1%であり、次いで「2品」、「4品」であった。父親も、「3品」がもっと多く30.8%であり、次いで「4品」、「2品」であった。第一子も、「3品」がもっと多く31.2%であり、次いで「4品」、「2品」であった。

3.2 主食が「パン」

パンを選択した母親、父親、第一子は、順に55.7%、48.5%、49.0%であり、このうち母親は「2品」がもっと多く33.8%であり、次いで「3品」、「4品」であった。父親も「2品」がもっと多く33.2%であり、次いで「3品」、「4品」であった。第一子は「3品」がもっと多く34.5%であり、次いで「2品」、「4品」であった。

表1 朝食の主食内容と朝食の品数の関連(7日間全サンプル)
(母親)

	合計	1品	2品	3品	4品	5品	6品	7品	8品以上	不明
サンプル数	5,394	566	1,601	1,667	845	467	154	64	30	-
ごはん	1,958 36.3	161 8.2	459 23.4	589 30.1	369 18.8	237 12.1	88 4.5	35 1.8	20 1.0	-
パン	5,394 55.7	256 8.5	1015 33.8	974 32.4	453 15.1	217 7.2	64 2.1	16 0.5	7 0.2	-
麺類	102 1.9	33 32.4	34 33.3	25 24.5	6 5.9	1 1.0	2 2.0	1 1.0	0 0	-
シリアル食品	119 2.2	23 19.3	33 27.7	35 29.4	10 8.4	10 8.4	0 0	8 6.7	0 0	-
その他	85 1.6	36 42.4	27 31.8	10 11.8	4 4.7	1 1.2	0 0	4 4.7	3 3.5	-
主食なし	128 2.4	57 44.5	33 25.8	34 26.6	3 2.3	1 0.8	0 0	0 0	0 0	-

(父親)

	合計	1品	2品	3品	4品	5品	6品	7品	8品以上	不明
サンプル数	4,318	379	1,146	1,310	786	418	148	65	31	35
ごはん	1,891 43.8	121 6.4	342 18.1	582 30.8	410 21.7	259 13.7	98 5.2	43 2.3	27 1.4	9 0.5
パン	2,093 48.5	149 7.1	695 33.2	669 32.0	359 17.2	148 7.1	48 2.3	16 0.8	4 0.2	5 0.2
麺類	103 2.4	21 20.4	39 37.9	30 29.1	8 7.8	2 1.9	1 1.0	0 0	0 0	2 1.9
シリアル食品	45 1.0	3 6.7	10 22.2	14 31.1	7 15.6	5 11.1	0 0	6 13.3	0 0	0 0
その他	57 1.3	19 33.3	27 47.4	9 15.8	1 1.8	1 1.8	0 0	0 0	0 0	0 0
主食なし	110 2.5	66 60.0	33 30.0	6 5.5	1 0.9	3 2.7	1 0.9	0 0	0 0	0 0
わからない	19 0.4	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	19 100

(第一子)

【第一子】	合計	1品	2品	3品	4品	5品	6品	7品	8品以上	不明
サンプル数	5,622	542	1,462	1,810	1,059	512	150	54	27	6
ごはん	2,466 43.9	198 8.0	517 21.0	770 31.2	535 21.7	302 12.2	88 3.6	34 1.4	21 0.9	1 0.04
パン	2,752 49.0	238 8.6	796 28.9	949 34.5	485 17.6	199 7.2	61 2.2	18 0.7	6 0.2	0 0
麺類	130 2.3	30 23.1	56 43.1	26 20.0	11 8.5	3 2.3	0 0	2 1.5	0 0	2 1.5
シリアル食品	140 2.5	20 14.3	44 31.4	46 32.9	23 16.4	6 4.3	1 0.7	0 0	0 0	0 0
その他	87 1.5	27 31.0	37 42.5	16 18.4	5 5.7	2 2.3	0 0	0 0	0 0	0 0
主食なし	43 0.8	29 67.4	12 27.9	2 4.7	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
わからない	4 0.1	0 0	0 0	1 25.0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	3 75.0

3. 3 主食が「麺類」

麺類を選択した母親、父親、第一子は順に 1.9%、2.4%、2.3%と少数だった。このうち母親は「2品」がもっとも多く 33.3%であり、次いで「1品」、「3品」であった。父親も「2品」がもっとも多く 37.9%であり、次いで「3品」、「2品」であった。第一子も「2品」がもっとも多く 43.1%であり、次いで「1品」、「3品」であった。麺類は三者とも「3品以内」で約 9 割であった。

3. 4 主食が「シリアル食品」

シリアル食品を選択した母親、父親、第一子は順に 2.2%、1.0%、2.5%と少数だった。このうち母親は「3品」がもっと多く 29.4%であり、次いで「2品」、「1品」であった。父親も「3品」がもっと多く 31.1%であり、次いで「2品」、「4品」であった。第一子も「3品」がもっと多く 32.9%であり、次いで「2品」、「4品」であった。

3. 5 「特に主食といえるものは食べていない」

特に主食といえるものは食べていないは、母親、父親、第一子の順に 2.4%、2.5%、0.8%と少数だった。このうち母親は「1品」がもっと多く 44.5%であり、次いで「3品」、「2品」であった。父親も「1品」がもっと多く 60.0%であり、次いで「2品」、「3品」であった。第一子も「1品」がもっと多く 67.4%であり、次いで「2品」、「3品」であった。

この調査では、主食を食べていないものは朝食の品数が減る傾向が見られた。朝食に主食を摂食することは、品数の増加につながる。また麺類では他の主食にくらべ品数は少ない傾向が見られた。

4. まとめ

100 年前の日本人の食生活は、囲炉裏を中心に家族がそろってそれを囲み、同じ家庭料理を食べている時代であった ([3])。高度経済成長期の 1960 年代から 1970 年代には、カップ麺や冷凍食品、電子レンジの大衆化により家庭料理の概念が変わり、家族そろって食卓を囲み、同じ家庭料理を食べる時代から、個人の生活スタイルにあわせて、食べたいときに食べたいものを食べる「個食」の時代へと大きく変動した ([4])。厚生労働省「児童環境調査」(平成 13 年度以前)、「全国家庭児童調査」(平成 16 年)によると「家族そろって夕食をとる頻度」は減少の傾向を示しており、これは生活時間の多様化、「単独世帯」の増加等とも相まって、家族等と楽しく食卓を囲む機会が少なくなりつつあると考えられている ([2])。家族そろって食べる貴重な機会をどういかすか、その質のあり方がいっそう重要になる ([5])。前橋は子どもたちが抱えるさまざまな問題の実態の改善は大人たちが真剣に子どもの本来の生活を大切にしていくことが重要である ([6]) と述べている。大人たちが容易に取り組めるのは、毎日の食事時間を通して、コミュニケーションを強めることではないか。そして食のあるべき姿や「食文化」を子どもに伝えていくことが大切である。この調査において朝食にかけた時間は母親と父親で約 7 割が 10~15 分、第一子では約 8 割が 10~20 分であった。朝に余裕のある時間を持つことは容易ではないが、今の生活時間の多様化を考えると、この時間を使うことが、食を通じた家族のコミュニケーションを高めるきっかけになると考えられる。

栄養バランスを考えた食事は、健康的なライフスタイルの確立に重要であり、朝食にこれを行うことは、1 日の生活リズムを整えるのに重要であり、文部科学省からも食生活学習教材が配付されている ([7])。しかし綾部ら ([8]) の報告では、幼児を持つ保護者の食事意識調査で、「朝食で重視している点は「食べやすさ」「用意のしやすさ」が上位にあげられている。この調査でも手軽で用意しやすい「パン」が「ごはん」上回る結果となったが、「パン」は「ごはん」に比べ品数が少ない傾向が見られた。ごはんを推奨することが、必ずしも品数を増やすことにつながるとは言い切れないが、朝食の品数を増やす具体的な情報発信の一助として必要ではないかと考える。

この調査結果を受け、関係機関と連携の上、更なる安心・安全な食情報発信の重要性が浮き彫りになり、食育推進の必要性を認識させられる結果となった。

【参考文献】

- [1] 健康・体力づくり事業財団,子どもの体力・食生活事情,健康づくりNo.344 1-5,社会保険研究所,東京
- [2] 内閣府,食育白書(平成 18 年度)
- [3] 窪田愛子,日本人の 20 世紀 くらしのうつりかわり「食生活」,宮田利幸 監, (2000) 小峰書房,東京
- [4] 長瀬荘一,「食育」という学校と家庭の新しい教育課題,子どもの「生きる力」を育てる食育ガイド (2006) 明治図書出版,東京
- [5] 「食を通じた子どもの健全育成（－いわゆる「食育」の視点から－）のあり方に関する検討会」報告書 (厚生労働省),子どもの食をめぐる現状,楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～, 財団法人日本児童福祉協会 (2004) 東京
- [6] 前橋明, (8) 生活調査からみえてくる子どものからだの問題とその対策,チャイルドヘルス,9 (11) 806-808,診断と治療社 (2006)
- [7] 文部科学省,食生活学習教材（小学校高学年用）食生活を考えよう一体も心も元気な毎日のために -
- [8] 綾部園子,小西史子,大塚英美子,朝食から見た幼児の食生活と保護者の食事意識,栄養学雑誌,63 (5) ,273-283,2005

1.3 運動習慣

和田 耕太郎(ヘルス・マネジメント・コンサルタント)

はじめに

本調査では、回答者を「母親」に限定したため（パネルA及びパネルB両者共に）、従って各設問についての「父親」やその「子」に関しての回答は回答者である「母親」が回答していることになる。

この章では、インターネット調査で実施したパネルAとパネルBの結果を併合した集計について取り上げた。また、「子」に関しては「第一子」の結果のみを取り上げた。

1. 1週間のうち30分以上運動する日数

1週間のうち30分以上運動する日数について「母親」「父親」「第一子」別で図1に示した。

「母親」と「父親」は共に1週間のうち30分以上運動する日数が「0日、ほとんどしない」と「1～2日」を合わせると、それぞれ86.8%、82.8%とおよそ9割、8割という結果であった。一方、「第一子」では1週間のうち30分以上運動する日数は全体的に分かれており、「3～4日」が一番多く28.3%とおよそ3割であった。「1～2日」と「5～6日」がほぼ同じで2割、「0日、ほとんどしない」は10.3%であり、「7日」は13.0%であった。

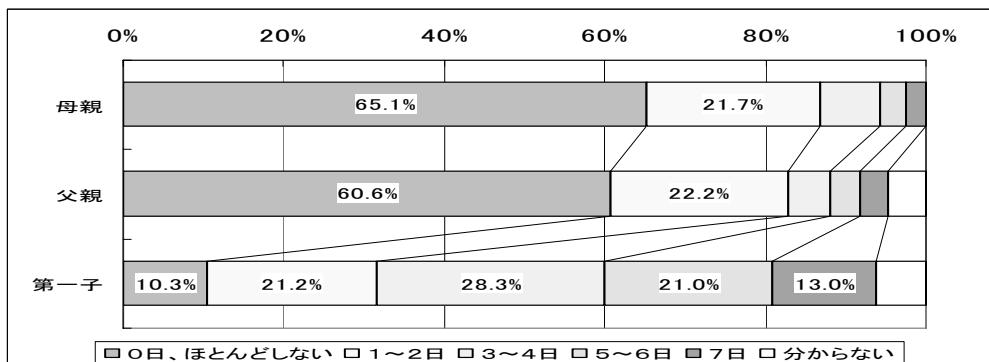


図1 1週間のうち30分以上運動する日数

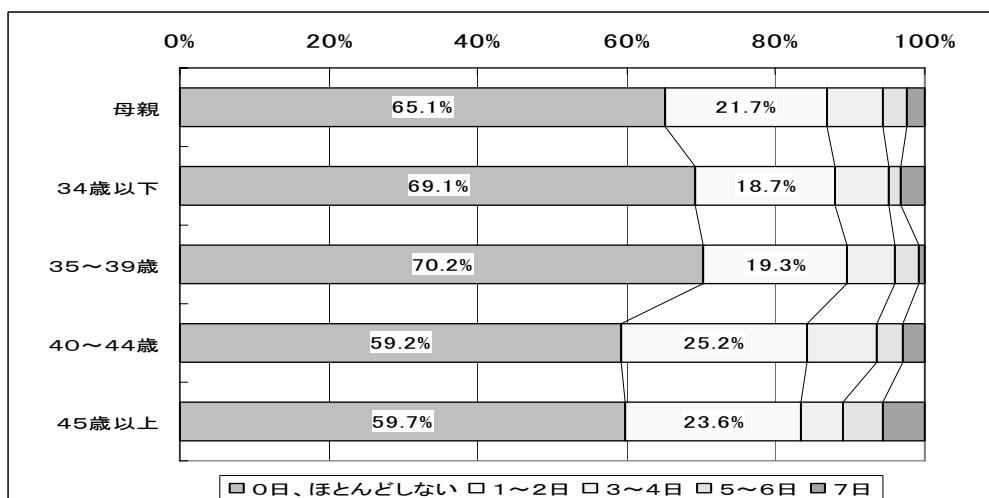


図2 1週間のうち30分以上運動する日数(母親:年代別)

「母親」の1週間のうち30分以上運動する日数を年代別で図2に示した。

1週間のうち30分以上運動する日数が「0日、ほとんどしない」の割合が一番多いのは「35～39歳」で70.2%であったが、割合の少ない「40～44歳」並びに「45歳以上」でもほぼ6

割であった。母親の年代別ではほぼ同じような傾向であった。

「父親」の1週間のうち30分以上運動する日数を年代別で図3に示した。

1週間のうち30分以上運動する日数が「0日、ほとんどしない」の割合が一番多いのは「45歳以上」で64.9%であったが、割合の少ない「40~44歳」でもほぼ6割であった。父親の年代別でもほぼ同じような傾向であった。

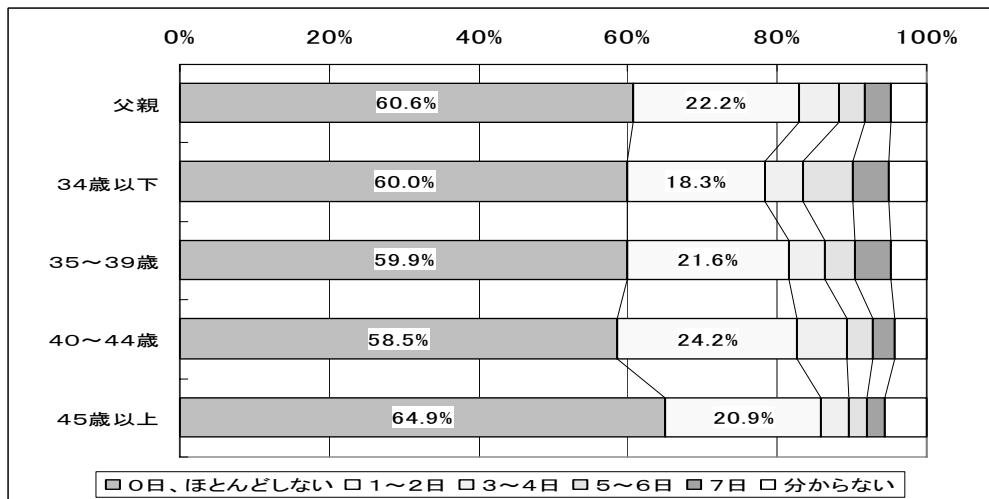


図3 1週間のうち30分以上運動する日数(父親:年代別)

「第一子」の1週間のうち30分以上運動する日数をさらに性別・学年別で図4に示した。

1週間のうち30分以上運動する日数でほとんど毎日している「7日」とび「5~6日」の割合が多い性別・学年は、「中学生男」が49.2%で一番多く、次いで「小学1・2年生男」が43.0%であった。一方、「0日、ほとんどしない」と「1~2日」とを合わせた割合が一番多い性別・学年は、「小学5・6年生女」で48.3%、次いで「小学5・6年生男」で35.2%であった。共に小学校の高学年であった。

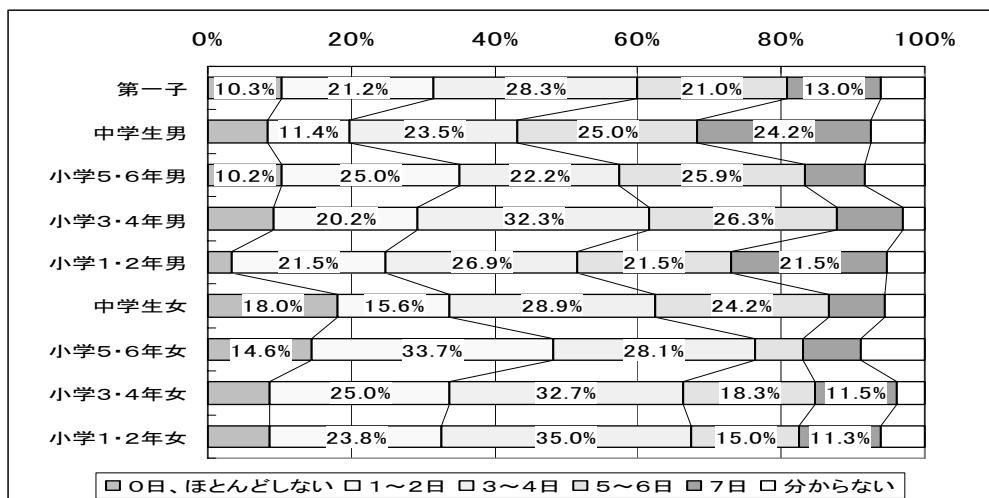


図4 1週間のうち30分以上運動する日数(第一子:性別・学年別)

2. スポーツのサークルやクラブへの入会状況

スポーツのサークルやクラブへの入会状況について、「母親」「父親」「第一子」別で図5に示した。入会状況は、「母親」20.2%、「父親」13.9%、「第一子」51.9%であった。

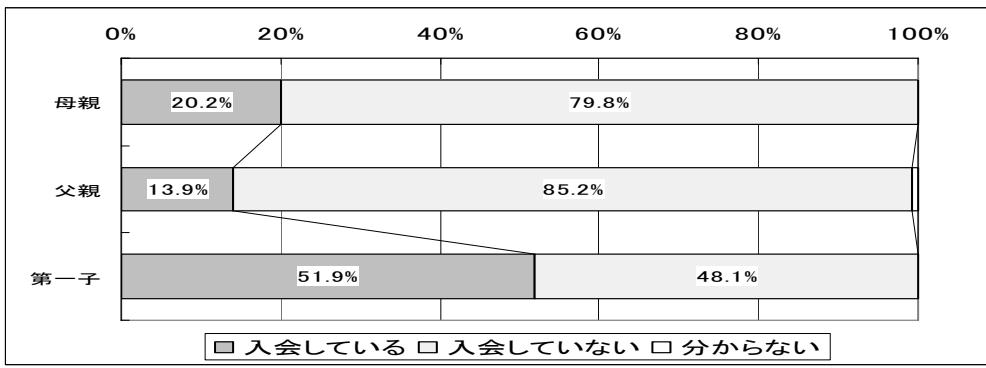


図5 スポーツのサークルやクラブへの入会状況

「母親」のスポーツのサークルやクラブへの入会状況について、年代別で図6に示した。スポーツのサークルやクラブへの入会状況は、「40~44歳」で24.8%と一番多く、次いで「45歳以上」で22.2%であり、逆に「34歳以下」が10.6%と一番低かった。

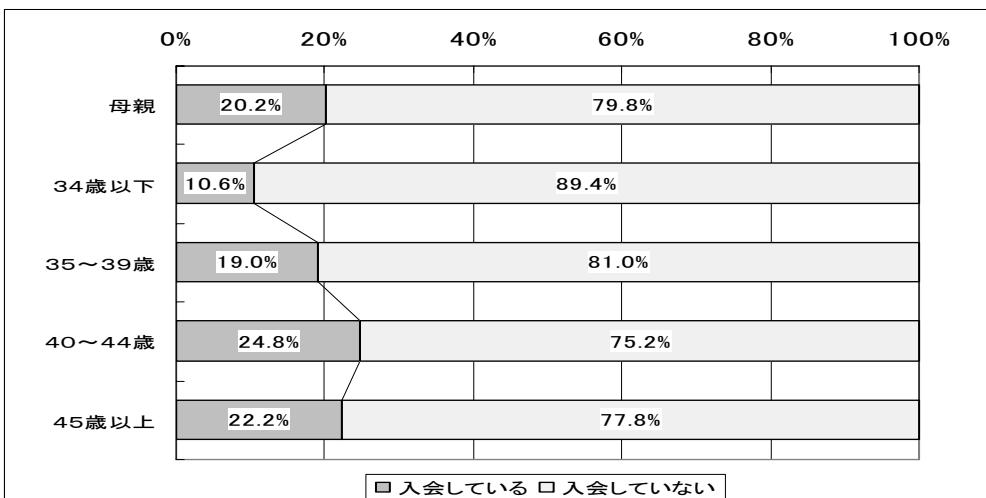


図6 スポーツのサークルやクラブへの入会状況(母親: 年代別)

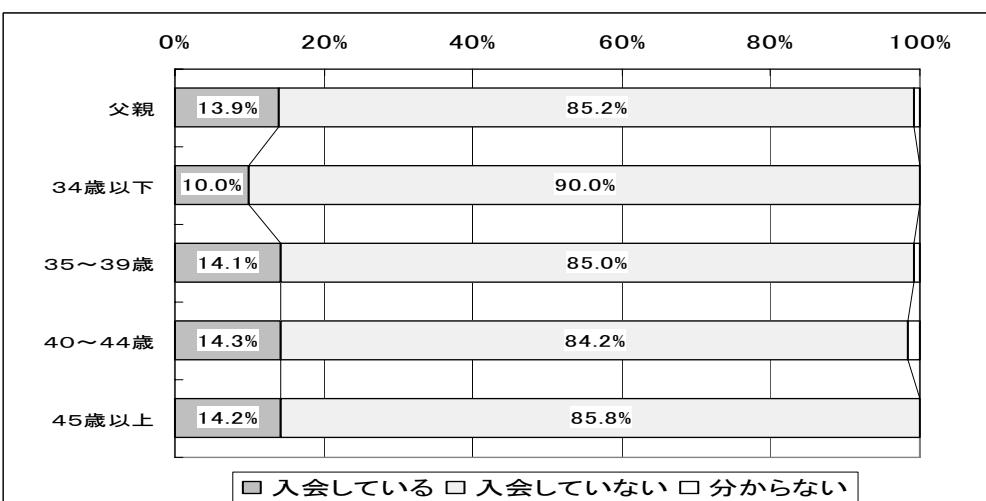


図7 スポーツのサークルやクラブへの入会状況(父親: 年代別)

「父親」のスポーツのサークルやクラブへの入会状況について、年代別で図7に示した。「父親」の入会状況は全体的に「母親」よりも低い傾向にあり、「34歳以下」が10.0%で一

番低く、その他の年代でも 14%台であった。

「第一子」のスポーツのサークルやクラブへの入会状況について、性別・学年別で図 8 に示した。

「第一子」の入会状況は全体的に「男子」のほうが女子よりも入会している割合が高い傾向にあった。「第一子」全体で入会している割合は 51.9%であったが、「男子」の学年別の割合はそれよりも高く、「女子」ではどの学年でも全体の入会している割合よりも低かった。

「小学 1・2 年生男」の入会している割合が 74.2%と一番高く、次いで「小学 3・4 年生男」の 60.6%であった。「女子」では「小学 1・2 年生女」が 51.3%と一番高かったが、「小学 5・6 年生女」38.2%並びに「中学生女」38.3%が「第一子」全体の中でも低かった。

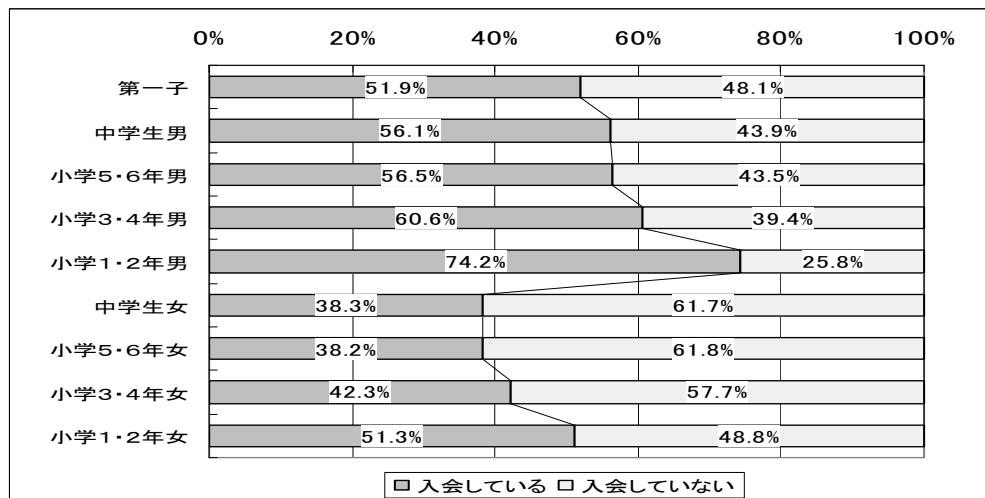


図8 スポーツのサークルやクラブへの入会状況(第一子:性別・学年別)

3. 第一子が放課後によく遊ぶ場所

第一子が放課後によく遊ぶ場所について、性別・学年別で図 9 に示した。

全体では「屋内で遊ぶことの方が多い」が一番多く 40%であり、「屋外で遊ぶことの方が多い」は 25%であった。また、「放課後も遊ぶ時間が無い」が 22.8%であった。

性別・学年別にみると、「屋外」で遊ぶのは「小学生男」であり、「小学生女」は「屋内」で遊ぶ傾向にあり、「中学生」になると男子も女子も半数以上が「放課後も遊ぶ時間が無い」傾向であった。

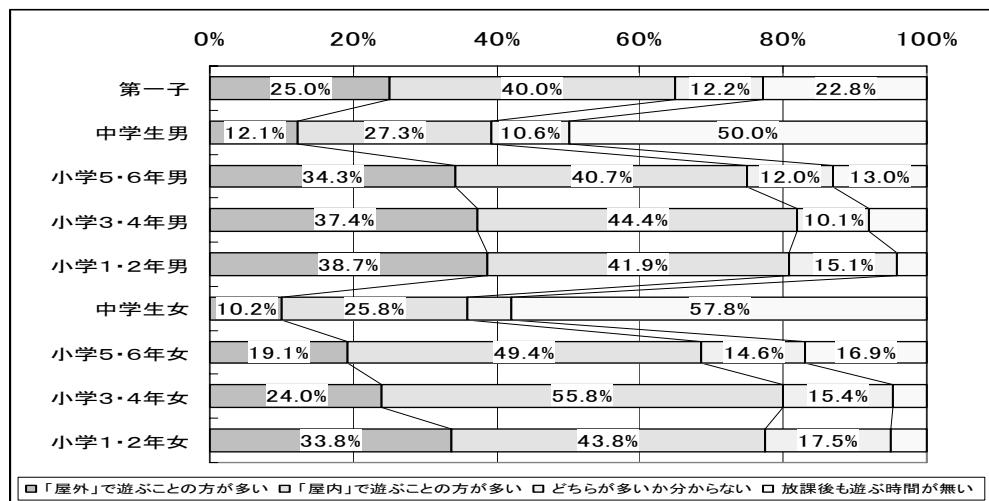


図9 第一子が放課後によく遊ぶ場所

1.4 健康状態

和田 耕太郎(ヘルス・マネジメント・コンサルタント)

はじめに

本調査では、回答者を「母親」に限定したため（パネルA及びパネルB両者共に）、従って各設問についての「父親」やその「子」に関しての回答は回答者である「母親」が回答していることになる。

この章では、インターネット調査で実施したパネルAとパネルBの結果を併合した集計について取り上げた。また、「子」に関しては「第一子」の結果のみを取り上げた。

1. 家族の健康状態

家族の健康状態について、「母親」「父親」「第一子」別で図1に示した。

「健康である」は「母親」では55.8%、「父親」では52.6%、「第一子」では81.9%であった。「健康である」と「どちらかといえば健康である」を合わせると、その割合は「母親」と「父親」とではどちらも9割近くを占め、「第一子」ではほぼすべてであった。

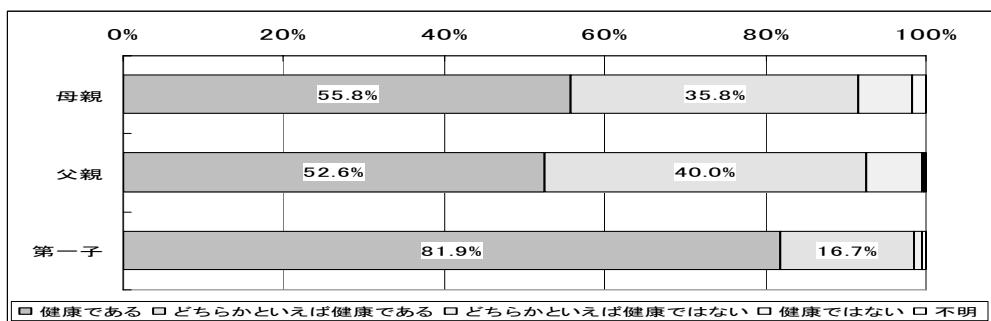


図1 家族の健康状態

「母親」の健康状態について、年代別で図2に示した。

「母親」の「35～39歳」で「健康である」とする割合が一番多く59.3%であった。

「健康である」と「どちらかといえば健康である」とを合わせた割合で「45歳以上」が一番多く95.9%であった。

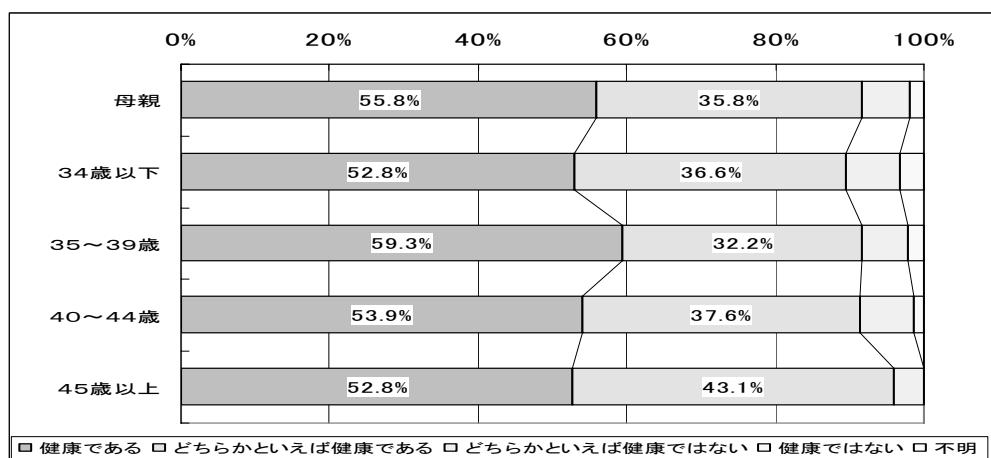


図2 「母親」の健康状態(年代別)

「父親」の健康状態について、年代別で図3に示した。

「父親」の「34歳以下」の「健康である」が一番多く7割であった。また、「健康である」と「どちらかといえば健康である」を合わせた割合で「34歳以下」が96.7%であった。

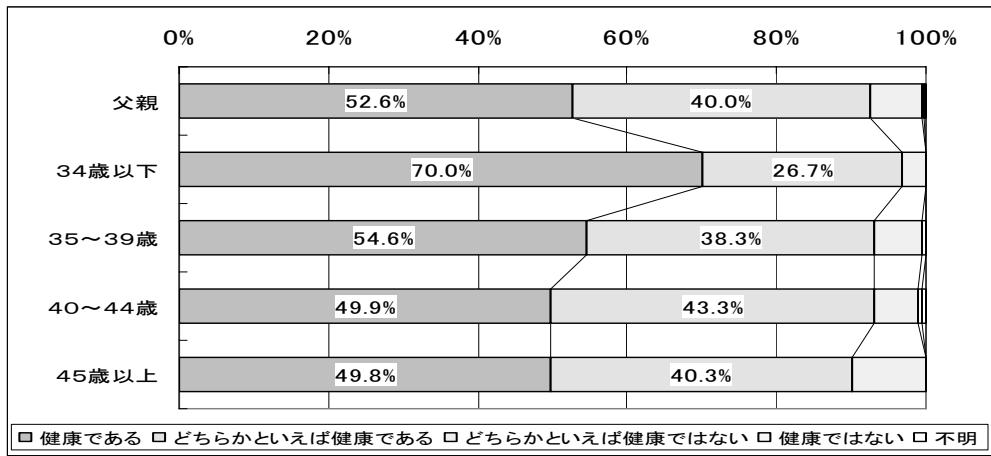


図3 「父親」の健康状態(年代別)

「第一子」の健康状態について、性別・学年別で図4に示した。
 「第一子」の「小学3・4年生男」で「健康である」とする割合が一番多く86.9%であり、「中学生男」が一番少なく78.8%であった。

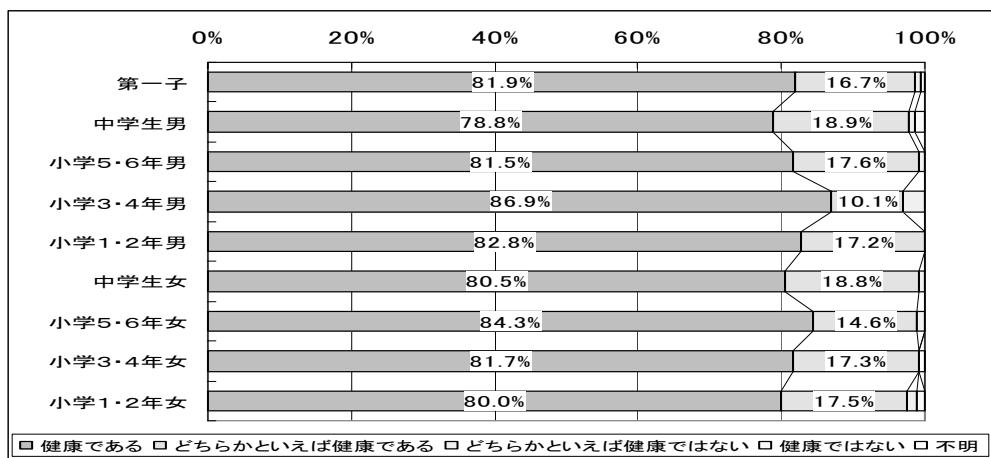


図4 「第一子」の健康状態(性別・学年別)

2. 健康状態に不安がある家族

健康状態に不安がある家族について、「母親」「父親」「第一子」別で図5に示した。
 健康状態に「不安がある」のは、「母親」の29.1%、「父親」の29.1%、「第一子」の13.3%であった。(先の設問「家族の健康状態」で「健康である」と「どちらかといえば健康である」を合わせた結果は、「母親」は91.6%、「父親」は92.6%、「第一子」は98.6%であった。)

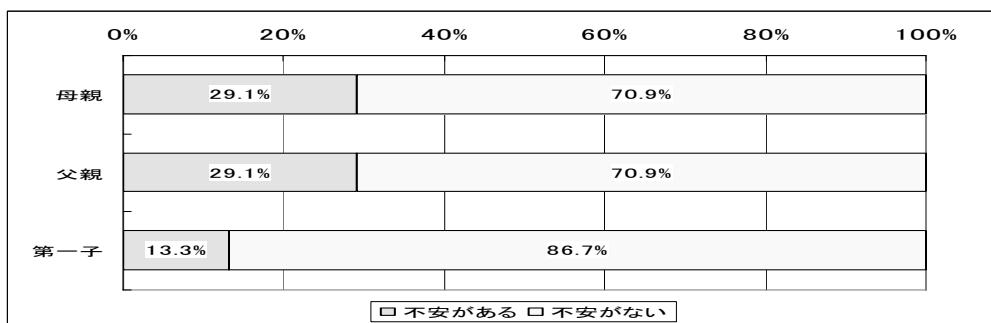


図5 健康状態に不安がある家族

健康状態に不安がある「母親」について、年代別で図6に示した。
 「母親」の年代別では、「45歳以上」の34.7%が健康状態に「不安がある」としており、「35～39歳」ではその割合が一番少なく24.4%であった。

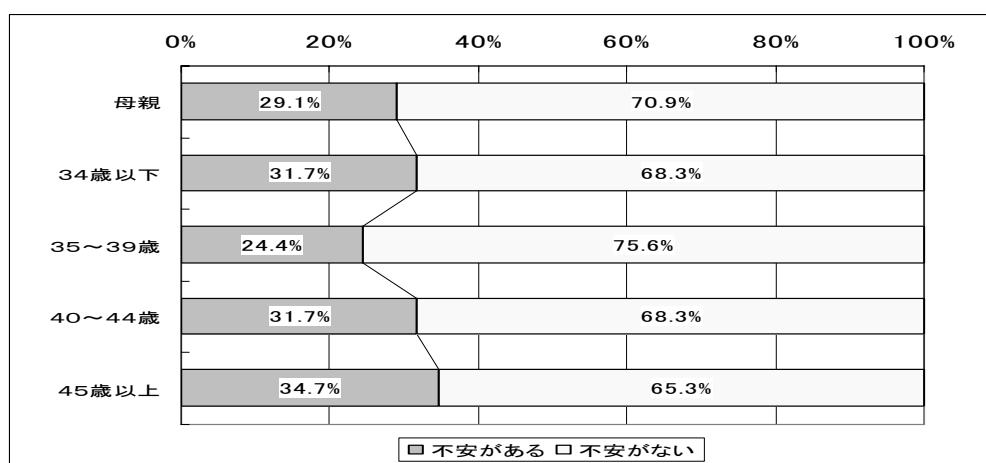


図6 健康状態に不安がある「母親」(年代別)

健康状態に不安がある「父親」について、年代別で図7に示した。
 「父親」の年代別では、「45歳以上」の35.5%が健康状態に「不安がある」としており、次いで「34歳以下」が35.0%であった。「40～44歳」では一番少なく24.2%であった。

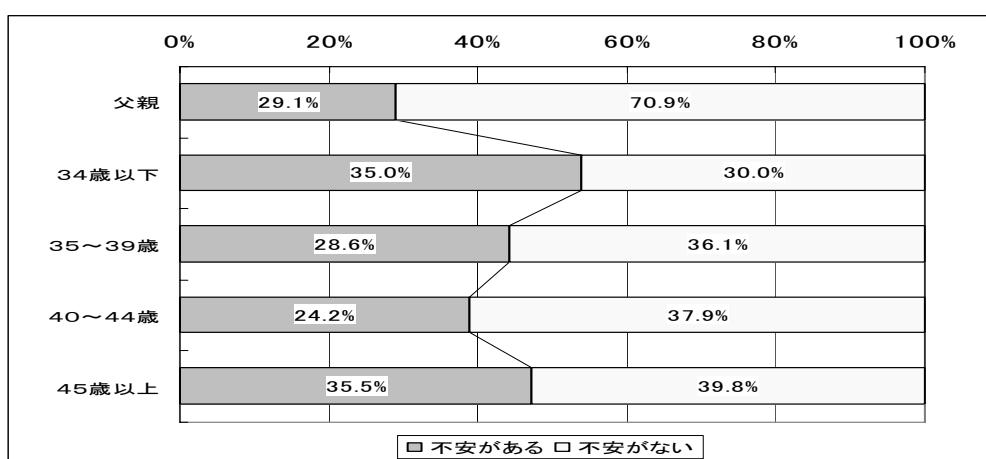


図7 健康状態に不安がある「父親」(年代別)

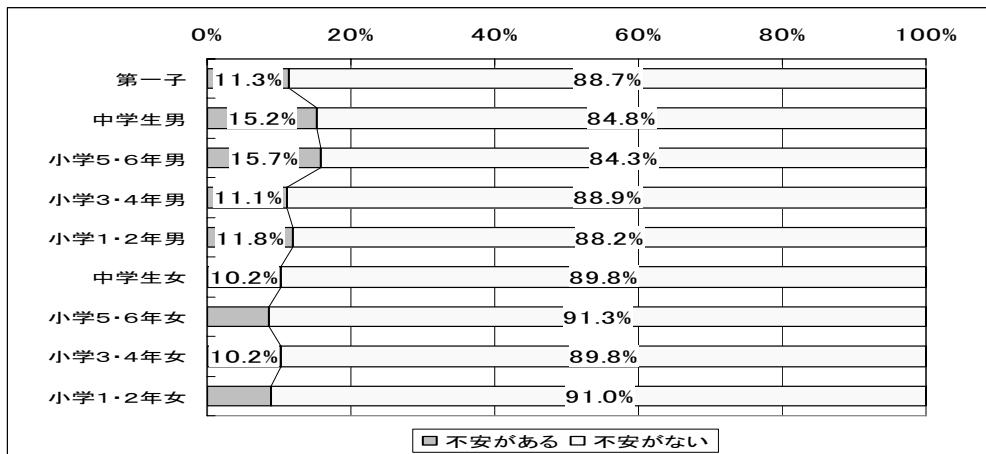


図8 健康状態に不安がある「第一子」(性別・学年別)

健康状態に不安がある「第一子」について、性別・学年別で図8に示した。

「第一子」では、男子のほうが女子よりも健康状態に「不安がある」としていた。

「小学5・6年生男」の15.7%、次いで「中学生男」の15.2%で「不安がある」としており、一方、「小学5・6年生女」が8.7%、次いで「小学1・2年生女」が9.0%と少なかった。

3. 家族の健康状態と運動頻度

「母親」の健康状態と運動頻度との関係を、図9に示した。

「健康である」「母親」は、「1週間のうち30分以上運動する日数」が「7日」と「5～6日」を合わせた「ほぼ毎日」運動するのは6.1%であり、「どちらかといえば健康である」「母親」も6.4%であった。「どちらかといえば健康でない」「母親」と「健康ではない」「母親」のどちらも「ほぼ毎日」運動するのはいなかつた。

「どちらかといえば健康でない」「母親」は、「1週間のうち30分以上運動する日数」が「0日、ほとんどしない」と「1～2日」を合わせた「ほぼしない」は98.1%であり、「健康ではない」「母親」は93.3%であった。

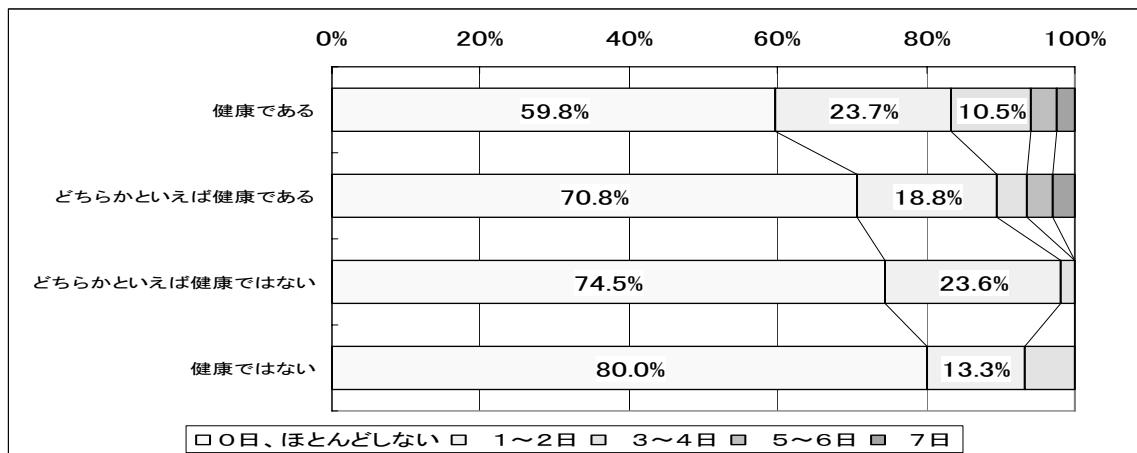


図9 「母親」の健康状態と運動頻度

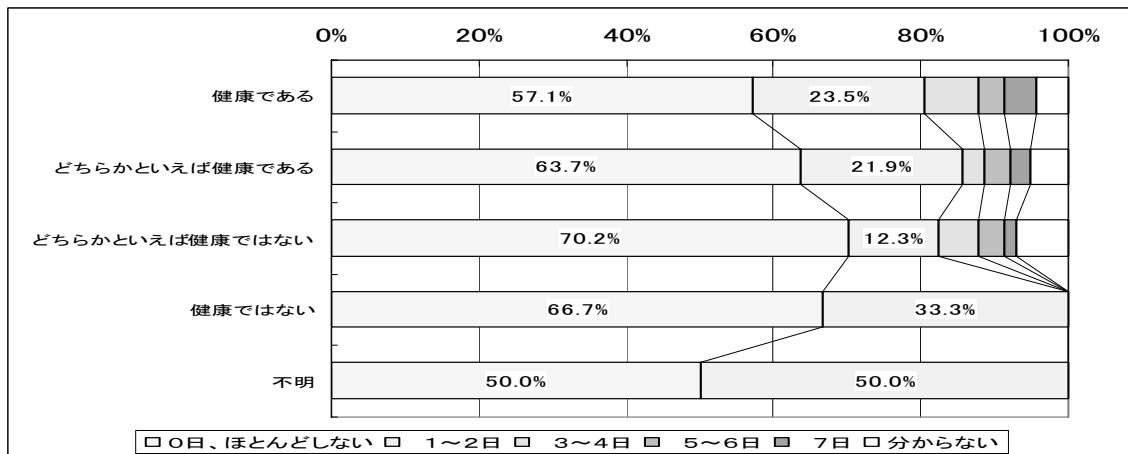


図10 「父親」の健康状態と運動頻度

「父親」の健康状態と運動頻度との関係を、図10に示した。

「健康である」「父親」は、「1週間のうち30分以上運動する日数」が「7日」と「5～6日」を合わせた「ほぼ毎日」運動するのは8.0%であり、「どちらかといえば健康である」「父親」も6.3%であった。「健康ではない」「父親」は「ほぼ毎日」運動するのはいなかつた。

「どちらかといえば健康である」「父親」は、「1週間のうち30分以上運動する日数」が「0日、ほとんどしない」と「1～2日」を合わせた「ほぼしない」は85.6%であり「どちらかと

いえば健康でない」「父親」は82.5%であった。「健康ではない」「父親」はすべて「ほぼしない」であった。

「第一子」の健康状態と運動頻度との関係を、図11に示した。

「健康である」「第一子」は、「1週間のうち30分以上運動する日数」が「7日」と「5~6日」を合わせた「ほぼ毎日」運動するのは36.5%であり、「どちらかといえば健康である」「第一子」も24.5%であった。「健康ではない」「第一子」は「ほぼ毎日」運動はいなかった。

「どちらかといえば健康ではない」「第一子」は、「1週間のうち30分以上運動する日数」が「0日、ほとんどしない」と「1~2日」を合わせた「ほぼしない」は75.0%であり、「健康ではない」「第一子」はすべて「ほぼしない」であった。

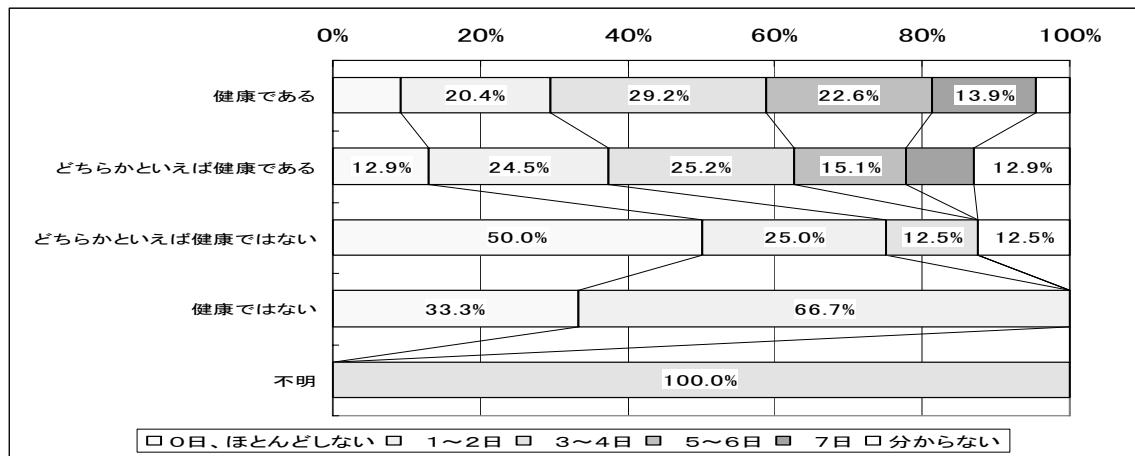


図11 「第一子」の健康状態と運動頻度

4. 家族の健康状態とスポーツのサークルやクラブへの入会状況

「母親」の健康状態とスポーツのサークルやクラブへの入会状況との関係を、図12に示した。

「健康である」「母親」は24.1%が「入会しており」、その割合は段階的に減って「健康ではない」「母親」の「入会している」は6.7%であった。

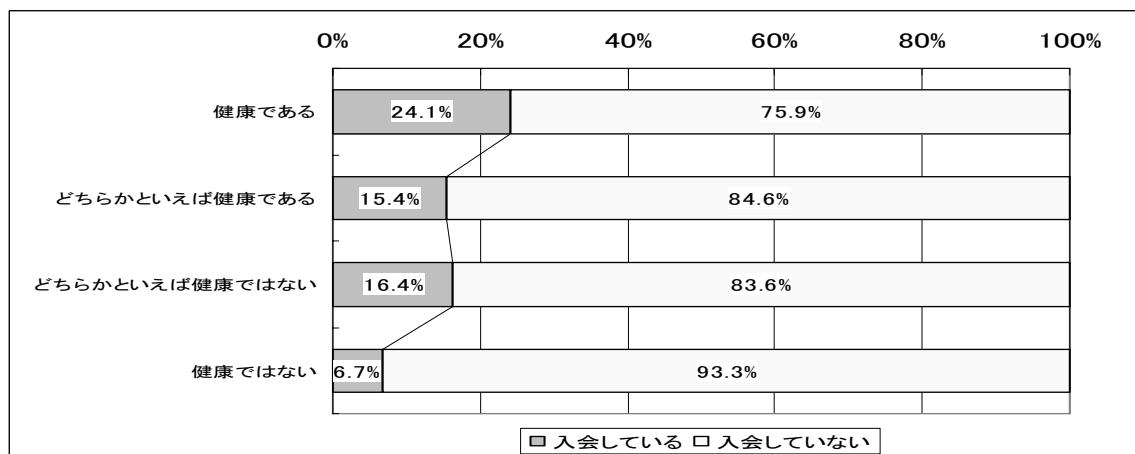


図12 「母親」の健康状態とスポーツのサークルやクラブへの入会状況

「父親」の健康状態とスポーツのサークルやクラブへの入会状況との関係を、図13に示した。

「健康ではない」「父親」以外は「入会している」割合は14%前後であり、「健康ではない」「父親」はすべて「入会していない」であった。

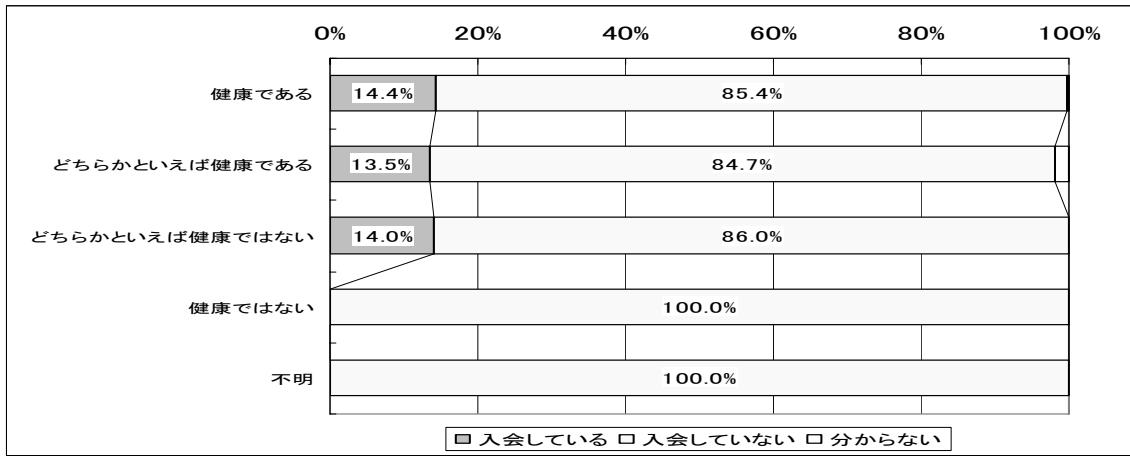


図13 「父親」の健康状態とスポーツのサークルやクラブへの入会状況

「第一子」の健康状態とスポーツのサークルやクラブへの入会状況との関係を、図14に示した。

「健康である」「第一子」は54.0%が「入会しており」、その割合は段階的に減って「健康ではない」「第一子」はすべて「入会していない」であった。

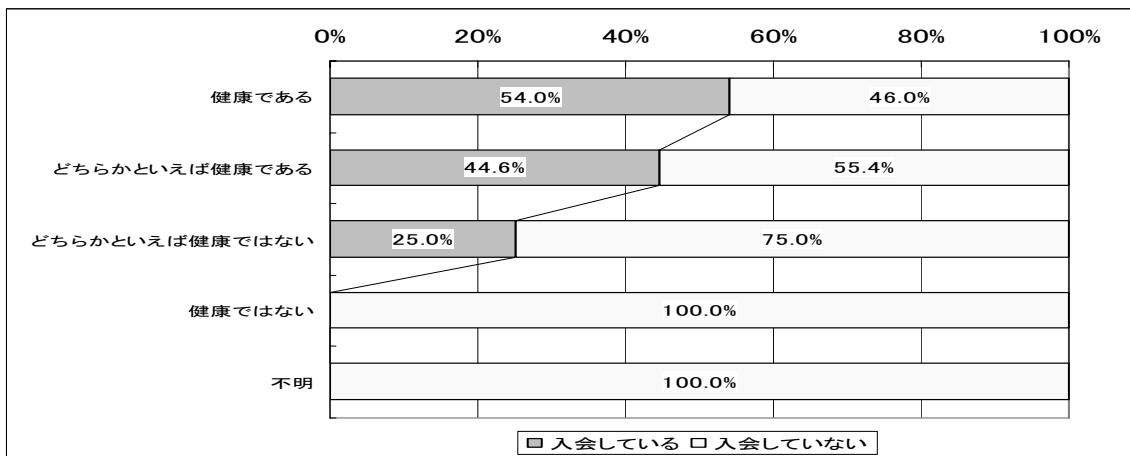


図14 「第一子」の健康状態とスポーツのサークルやクラブへの入会状況

1.5 食生活

和田 耕太郎(ヘルス・マネジメント・コンサルタント)

はじめに

本調査では、回答者を「母親」に限定したため（パネルA及びパネルB両者共に）、従って各設問についての「父親」やその「子」に関しての回答は回答者である「母親」が回答していることになる。

この章では、インターネット調査で実施したパネルAとパネルBの結果を併合した集計について取り上げた。また、「子」に関しては「第一子」の結果のみを取り上げた。

1. 家族揃って朝食を食べる頻度

家族揃って朝食を食べる頻度について、図1に示した。

「毎日」家族揃って朝食を吃るのは15.5%であり、その逆に「ほとんどない」のほうが多く24.1%であった。家族揃って朝食を食べる頻度が一番多いのは、「週に1～2回」で42.5%であった。

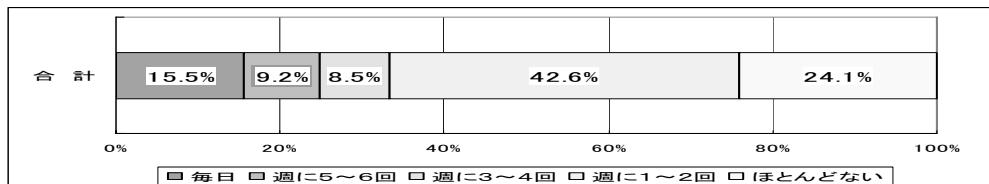


図1 家族揃って朝食を食べる頻度(全体)

家族揃って朝食を食べる頻度について、「父母の就業状況」別で図2に示した。

家族揃って朝食を食べる頻度を父母の就業別にみると、「毎日」家族揃って朝食を吃るのは「共働き」のほうが17.1%と「非共働き」の14.5%より多い結果であった。しかしながら、「家族揃って朝食を食べる頻度が「ほとんどない」は、「共働き」のほうが28.6%と「非共働き」の21.3%より多い結果であった。家族揃って朝食を食べる頻度で一番多いのは、「共働き」「非共働き」共に「週に1～2回」であり、それぞれ37.8%、45.8%であった。

家族揃って朝食を食べる頻度のうち、「ほとんどない」と「週に1～2回」を合わせると「共働き」と「非共働き」の両者共にほぼ7割弱であった。

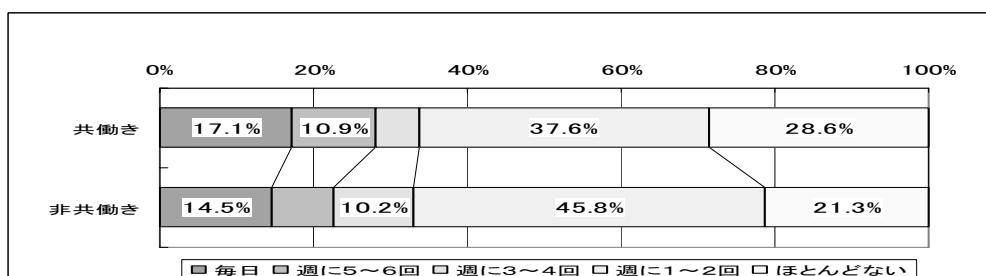


図2 家族揃って朝食を食べる頻度(父母の就業別)

家族揃って朝食を食べる頻度について、「母親」の年代別で図3に示した。

「毎日」家族揃って朝食を吃るのは、「母親」の年代別で「45歳以上」が全体でみた割合よりも多く22.2%であった。しかしながら、家族揃って朝食を食べる頻度が「ほとんどない」のも「45歳以上」が一番多く29.2%であった。

家族揃って朝食を食べる頻度について、「父親」の年代別で図4に示した。

「毎日」家族揃って朝食を吃るのは、「父親」の年代別では「45歳以上」が一番多く18.5%であった。また、「ほとんどない」のは「40～44歳」が24.5%、「35～39歳」が23.8%であつ

た。「35～39歳」では「週に5～6回」食べる頻度も他の年代に比べて高く13.2%であった。

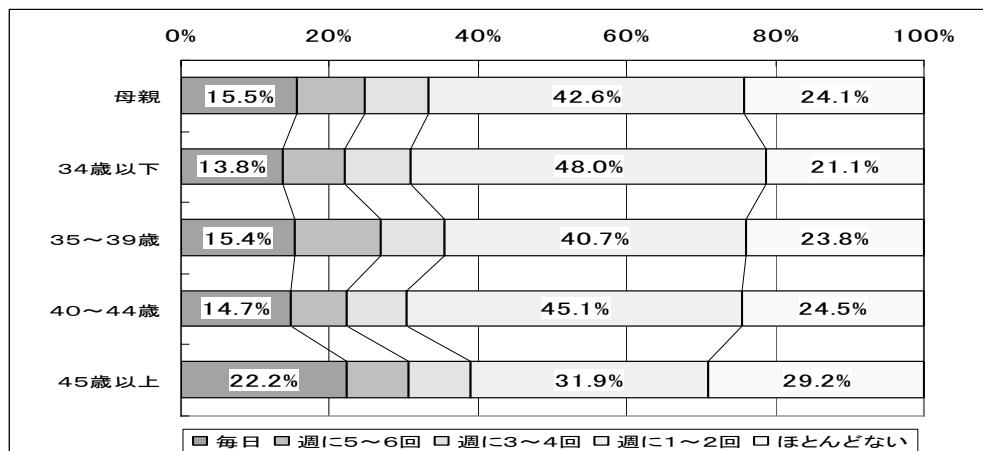


図3 家族揃って朝食を食べる頻度(母親:年代別)

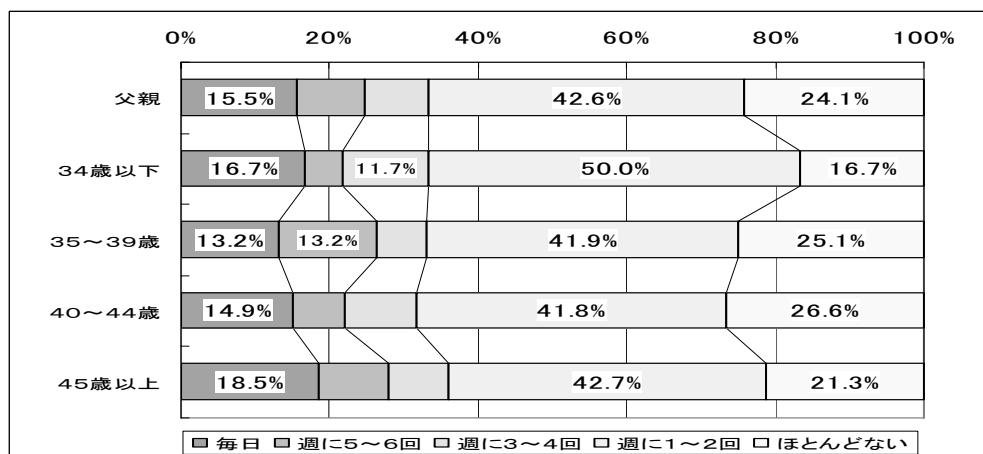


図4 家族揃って朝食を食べる頻度(父親:年代別)

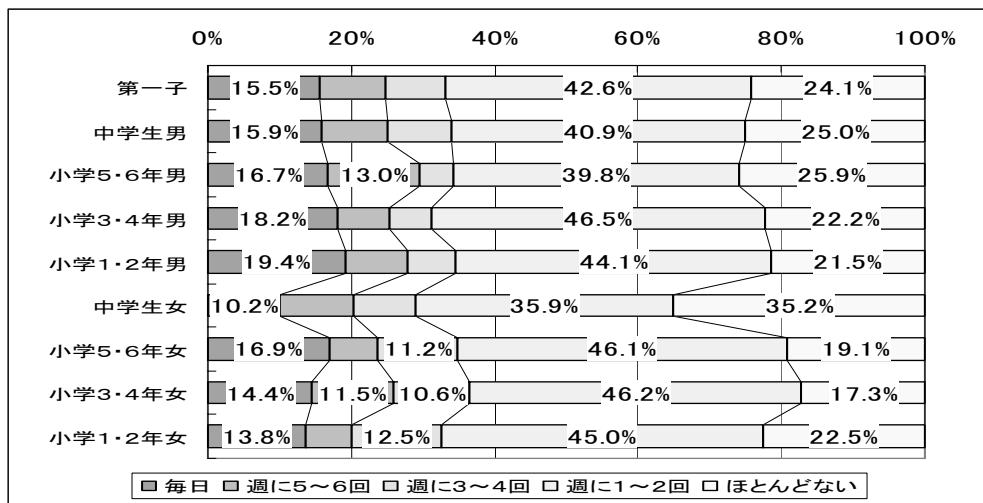


図5 家族揃って朝食を食べる頻度(第一子:性別・学年別)

家族揃って朝食を食べる頻度について、「第一子」の性別・学年別で図5に示した。

「毎日」家族揃って朝食を食べる頻度は、男子のほうが女子よりも高い傾向であった。「毎日」家族揃って朝食を食べる頻度を学年別にみると、男子では「中学生男」が一番低いが15.9%であり、一番高い「小学1・2年生男」は19.4%であった。一方、女子では「中学生女」が一番低く10.2%であり、一番高いのは「小学5・6年生女」で16.9%であった。

「中学生女」では、「ほとんどない」のも他と比べて高く 35.2%であった。「毎日」と「週に5~6回」を合わせると、「小学5・6年生男」が29.7%と一番多く、次いで「小学1・2年生男」の28.0%であった。逆に「小学生1・2年生女」が20.1%と一番少なく、次いで「中学生女」の20.4%であった。

2. 朝食の外食状況

朝食の外食状況について、「母親」の就業別で図6に示した。

「母親」全体で朝食に「外食を利用することがある」のは、11.0%であった。

就業別では、「共働き」のほうが多く13.7%であり、「非共働き」でも12.5%が「外食を利用することがある」であった。

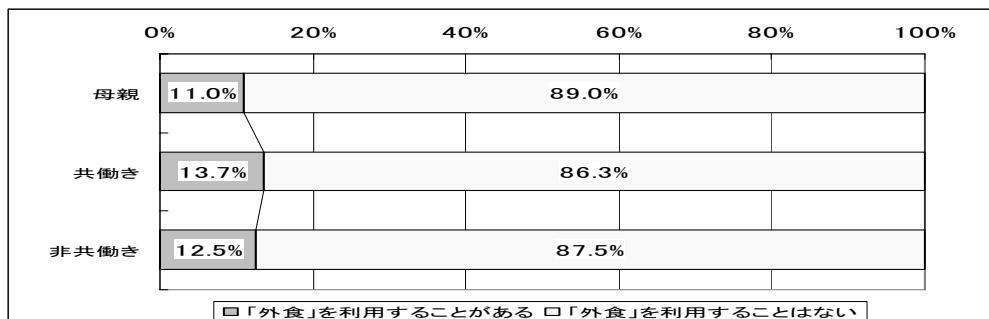


図6 朝食の外食状況(母親:就業別)

朝食の外食状況について、「父親」の就業別で図7に示した。

「父親」全体で朝食に「外食を利用することがある」のは、「母親」よりも多く19.0%であった。就業別では、「共働き」と「非共働き」とそれぞれ18.9%と19.0%とほぼ同じであった。

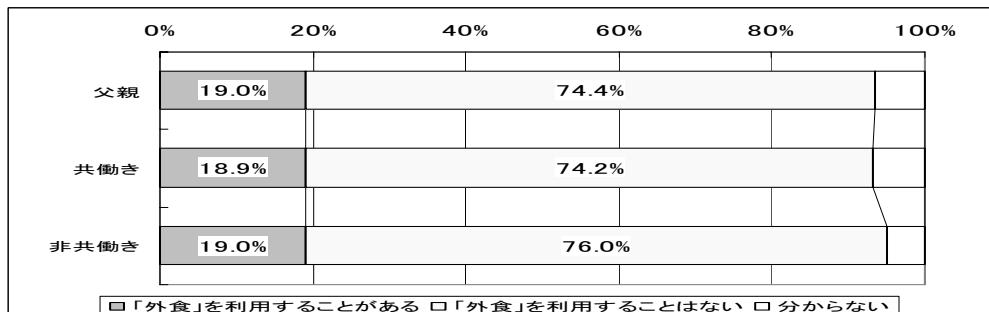


図7 朝食の外食状況(父親:就業別)

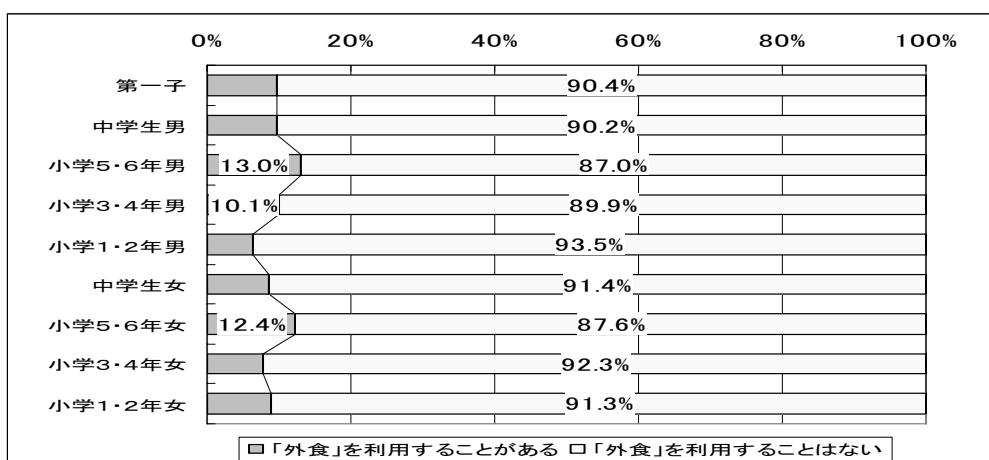


図8 朝食の外食状況(第一子:性別・学年別)

朝食の外食状況について、「第一子」の性別・学年別で図 8 に示した。

「第一子」全体で朝食に「外食を利用することがある」のは、9.6%であった。性別・学年別では、「中学生男」では 9.8%、「中学生女」では 8.6%であった。しかしながら、「小学生 5・6 年生男」が 13.0%、「小学 5・6 年生女」が 12.4%とそれぞれ「中学生」よりも高かった。

3. 朝食の外食にかける支払額

朝食の外食にかける支払額について、「母親」の就業別で図 9 に示した。

「母親」全体では、「401～500 円」が一番多く 35.9% であった。

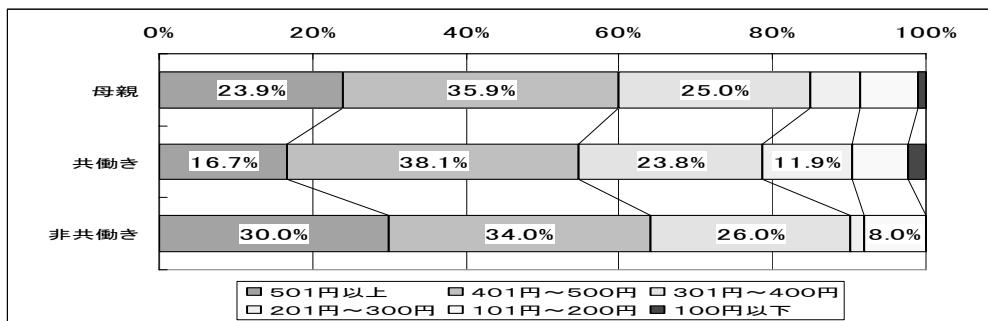


図9 朝食の外食にかける支払額(母親:就業別)

朝食の外食にかける支払額について、「父親」の就業別で図 10 に示した。

「父親」全体では、「401～500 円」が一番多く 32.9% であった。

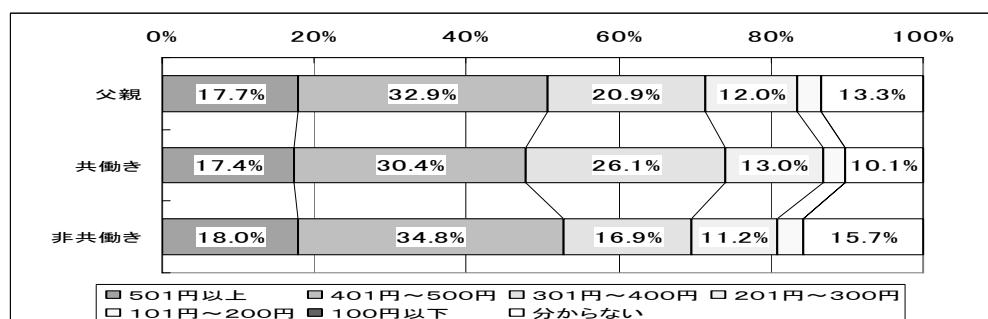


図10 朝食の外食にかける支払額(父親:就業別)

朝食の外食にかける支払額について、「第一子」の性別・学年別で図 11 に示した。

「第一子」全体では、「401～500 円」が一番多く 31.3% であった。次いで「301～400 円」が 25.0%、「501 円以上」が 22.5% であった。

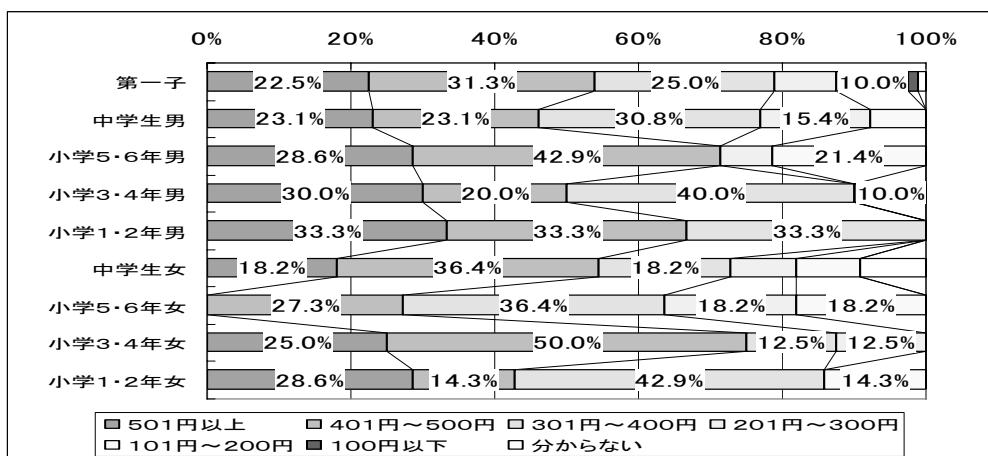


図11 朝食の外食にかける支払額(第一子:性別・学年別)

1. 6 地域ネットワークと情報

小山 修(日本子ども家庭総合研究所)

本稿では、保健行動のきっかけとなるネットワークに関する質問項目として、「母親及び配偶者と第一子の友人数」「身近に頼れる人・相談できる人の数」「参加している地域活動」、そして健康に関する情報手段としての「携帯電話の使用状況及び情報入手経路」をとりあげて、結果と考察とを併せて報告する。

1. 友人の数

1. 1 母親が友人と思っている人数

母親が友人と思っている人数は、最小の「いない」(2.0%) から最大の「31人以上」(2.8%)までと人数に巾があった。最も高いのが「6~10人」(38.9%)で、次いで「1~5人」(34.8%)と1人から10人までに全体の7割以上が集中した。母親が友人と思っている友人の平均は11.3人であった(図1)。

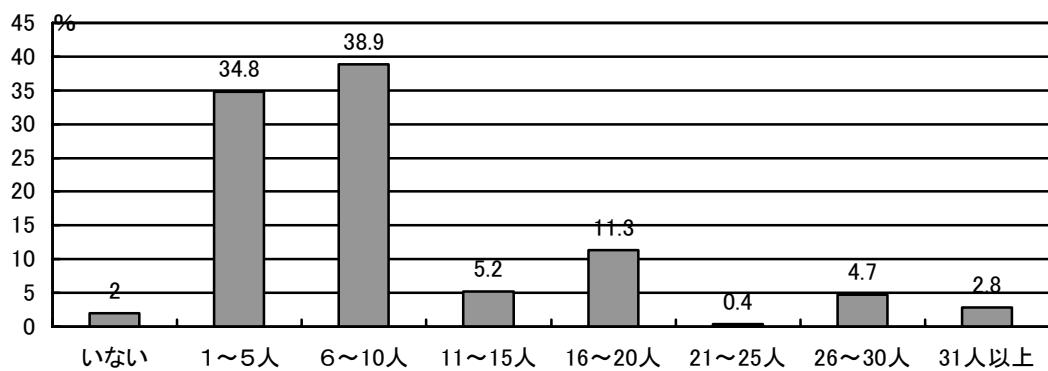


図1 母親の友人数

1. 2 母親から見た配偶者(父親)の友人数

母親からみた父親の友人と思っている人数は、「不明」(43.9%)と回答した割合がもっとも高く、次いで「1~5人」(28.3%)と「6~10人」(16.7%)であった。友人の数は母親の「6~10人」と比べて「1~5人」の割合が高く、平均は8.1人と母親より3.2人少なかつた(図2)。

母親からみた父親の友人は「不明」か、友人がいても少ないと思っているといえる。

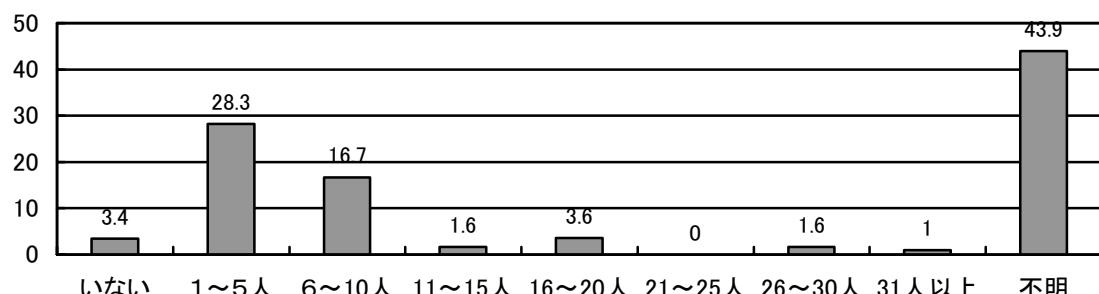


図2 父親の友人数

1.2 母親からみた第一子の友人の数

父親と同様に「不明」の割合が31.0%と高いが、父親より10ポイント以上低くかった。次いで高いのは「6～10人」(26.1%)、「1～5人」(22.7%)の順であった。平均は13.7人と母親、父親より人数が多くあげられた(図3)。

母親は、父親より第一子との情報量が多いいためとも考えられる。また、母親が子どもの友人を多く知っていることは、子どもの教育や行動に关心を抱いているとも考えられる。

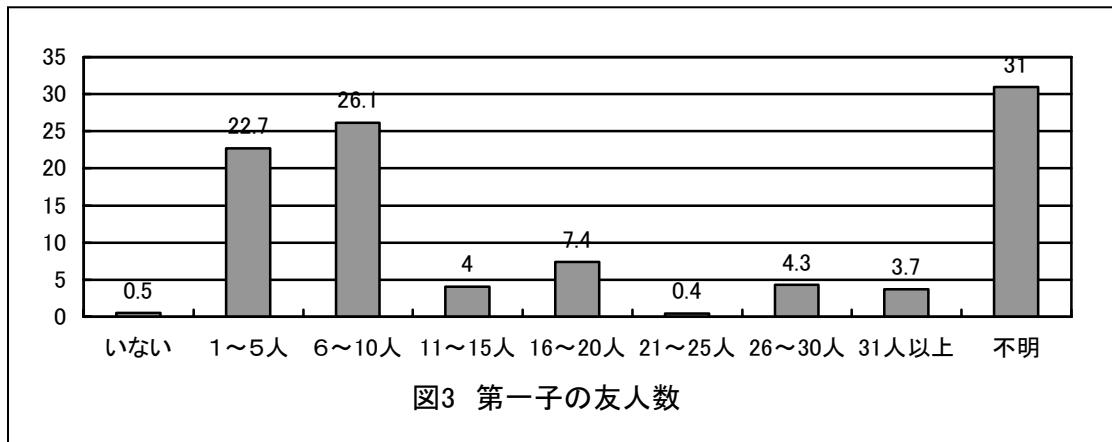


図3 第一子の友人

1.3 母親の年齢別友人の数

35～39歳の階級で「1～5人」(37.7%)の割合が高かったが、他の年齢階級では「6～10人」の割合が高く、特に45歳以上では56.9%と高かった。全体としては「1～10人」の間に7割以上が占められた。

友人が「いない」と回答とした年齢は、45歳以上(2.8%)と35～39歳(2.7%)の年齢階級で高く、友人が「31人以上」は3%前後と各階級とも低かった(図4)。

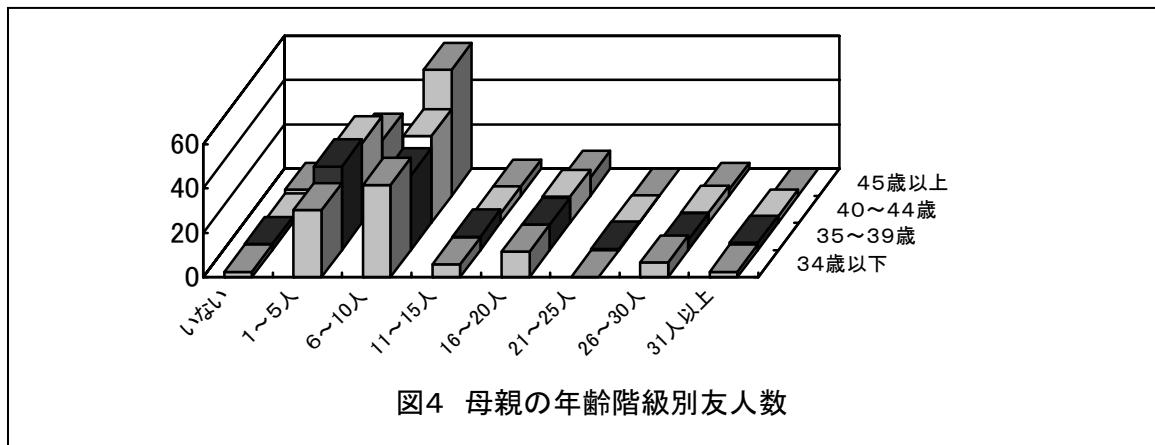


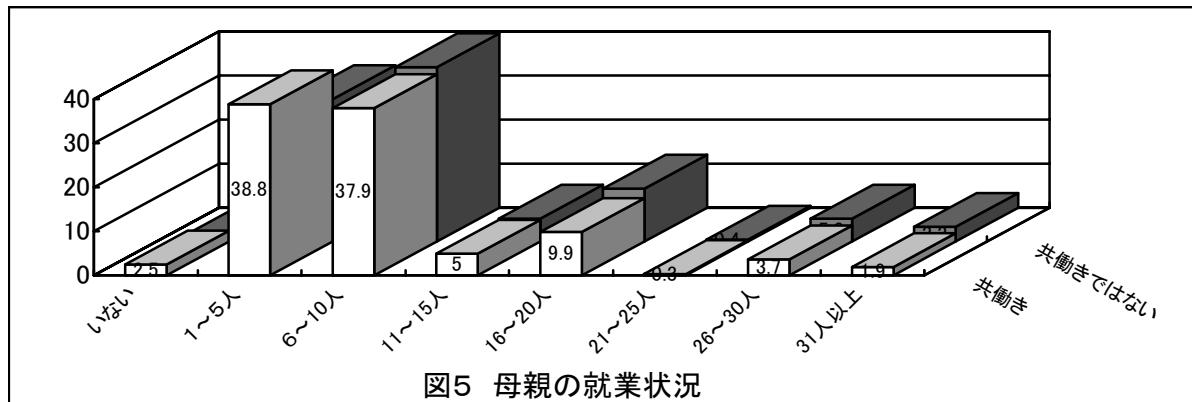
図4 母親の年齢階級別友人

1.4 母親の就労状況と友人の数

共働きの母親は38.6%と4割弱で、働いていない母親のほうが高かった。友人の数は、共働きの母親が「1～5人」(38.8%)と「6～10人」(37.9%)の割合はほぼ同率であるのに対して、働いていない母親は「6～10人」(39.5%)、「1～5人」(32.3%)の順であった。働いていない母親のほうが、友人數の各階級とも割合が高い傾向がみられた。

友人がいないのは、「共働き」2.5%、「共働きでない」1.8%であった(図5)

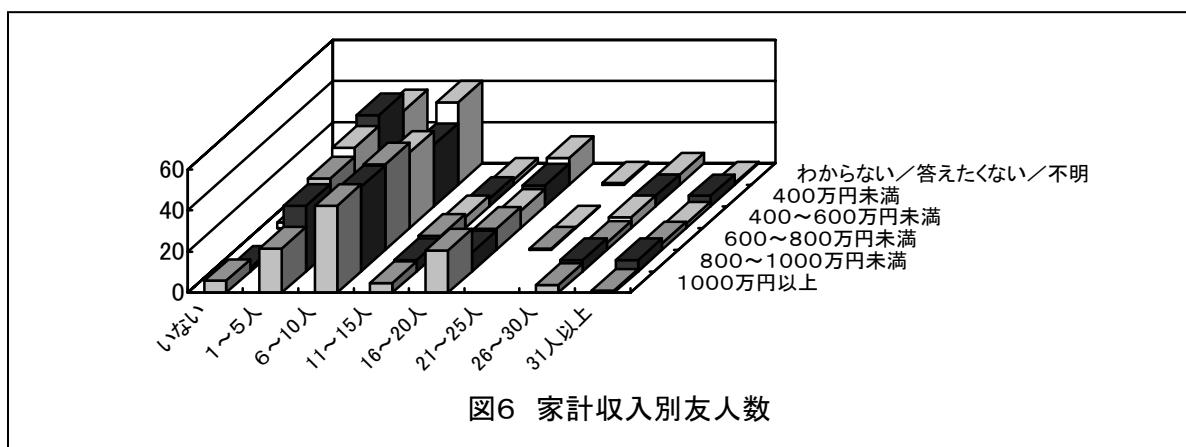
また、母親の職業別でも、専業主婦が全体の6割以上を占めており、友人の数は「6～10人」(39.6%)、次いでパート・アルバイト(39.4%)が高く、実数が75と少ない会社員・公務員では「1人～5人」(44.7%)が高かった。友人が「31人以上」では「家事手伝い」が20%と高かった(巻末表参照)。



1.4 世帯年収と友人の数

年収が下がるほど友人数「1～5人」の割合が高くなり、逆に年収が上がるほど「6～10人」の割合が高くなっていた。

年収「1000万円以上」の階級で友人の数が「16～20人」の割合が20.6%と他の階級よりも2倍前後高かった（図6）

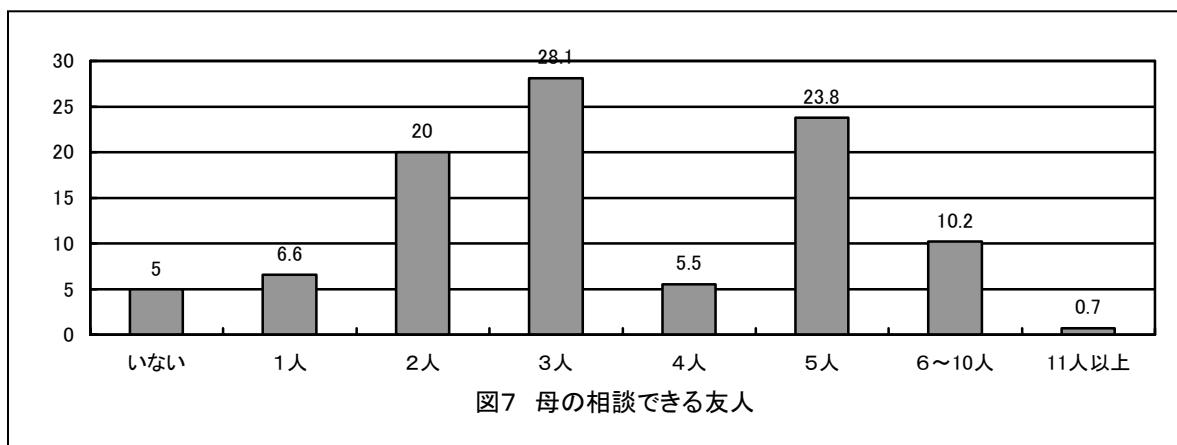


2. 身近に頼れる人や相談できる人の数

2.1 母親の相談相手の数

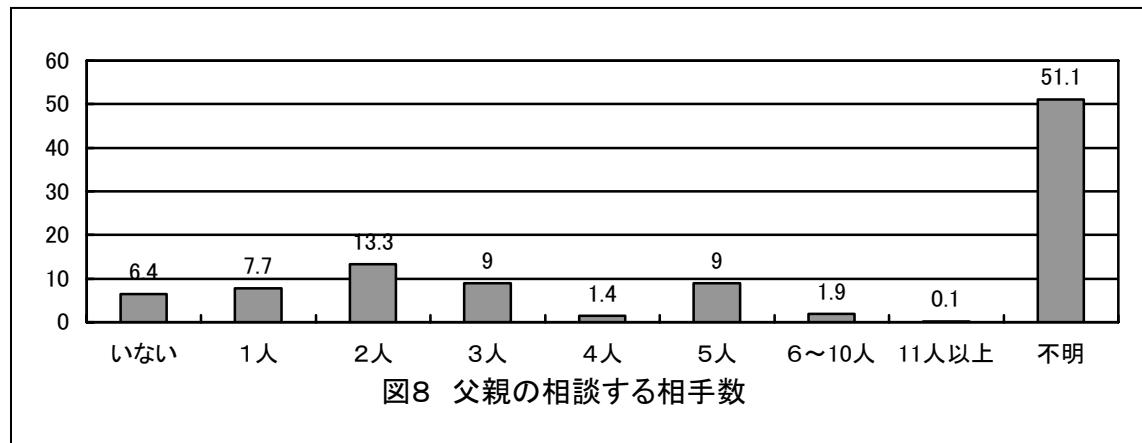
母親が身近に頼れる人や相談できる人は、3人（28.1%）、次いで5人（23.8%）、2人（20.0%）の順で2人から5人が多かった。

また、身近に頼れる人や相談できる人が「いない」割合5.0%であった（図7）。



2.1 母親からみた父親の身近に頼れる人や相談できる人の数

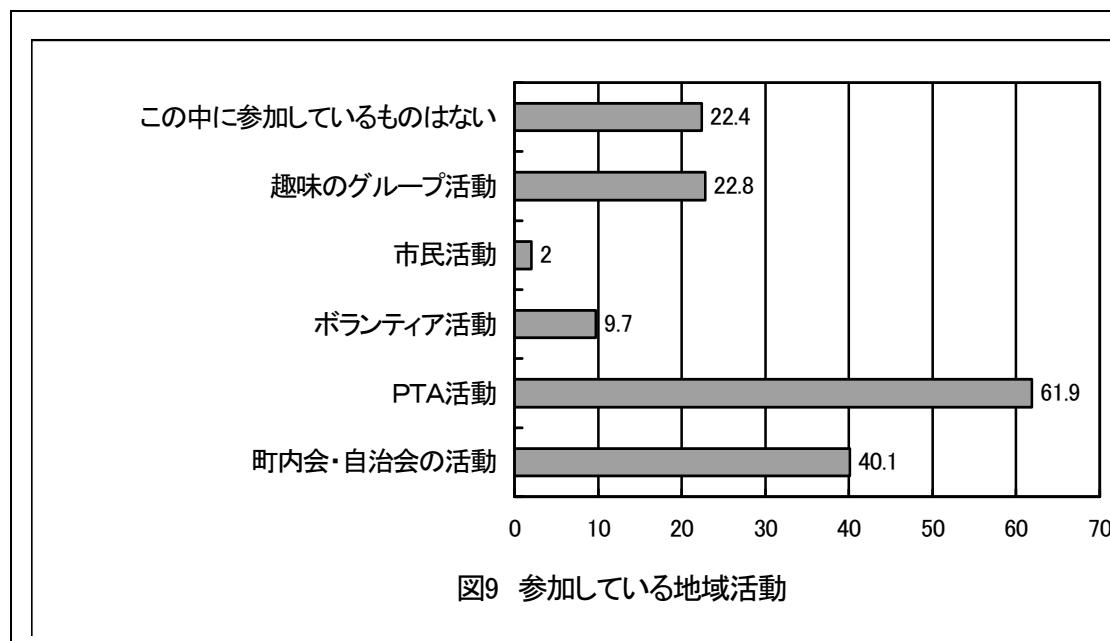
母親があげた父親が身近に頼れる人や相談できる人の回答は、半数以下の回答で「2人から3人」と「5人」と回答した割合が高かった。しかし「不明」が51.1%と高く、半数以上の母親は父親の相談相手の存在を知らないことになる（図8）。



3. 参加している地域活動

母親が参加している地域活動は、PTA活動がもっとも高く（61.9%）、次いでマンション管理組合を除く「町内会・自治会活動」（40.1%）であった。PTA活動への参加が高い理由は、第一子が中学生以下という、本調査対象者の条件から考えると当然の結果ともいえよう。

一方、市民活動やボランティア活動の参加は1割以下と低く、むしろ趣味のサークル活動が5人に1人以上と高かった（図9）。



4. 携帯電話の利用状況

通話、メール、インターネット機能を持つ携帯電話の使用状況は、「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、母親で71.1%、父親で65.5%となっていた。これに対して第一子では18.7%と低く、「持っていない・持たせない」の割合のほうが高く（61.5%）、親の規制が働いていると考えられる（図10）。

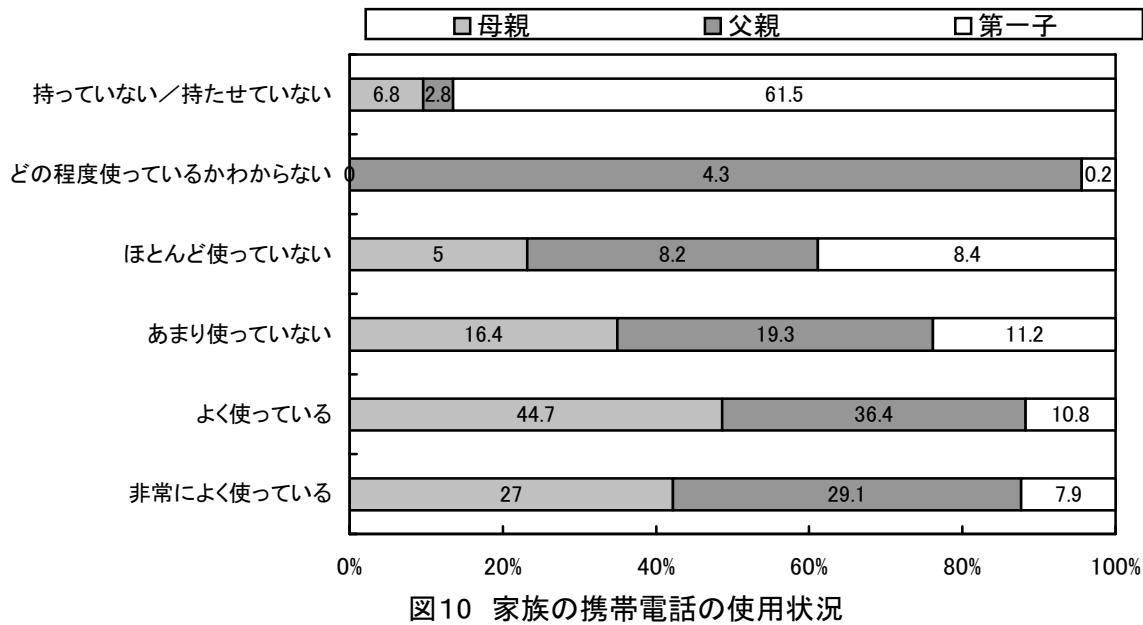


図10 家族の携帯電話の使用状況

5. 「健康」に関する情報の入手経路

健康情報の入手先で多いのはテレビ (91.8%)、インターネット (66.5%)、新聞 (63.9%) が上位3位で、以下書籍・雑誌 (49.8%)、友人・知人(46.8%)が続いた。検索機能が便利なインターネットが上位に上げられたことは、本調査の特色をあらわした結果といえよう（図11）。

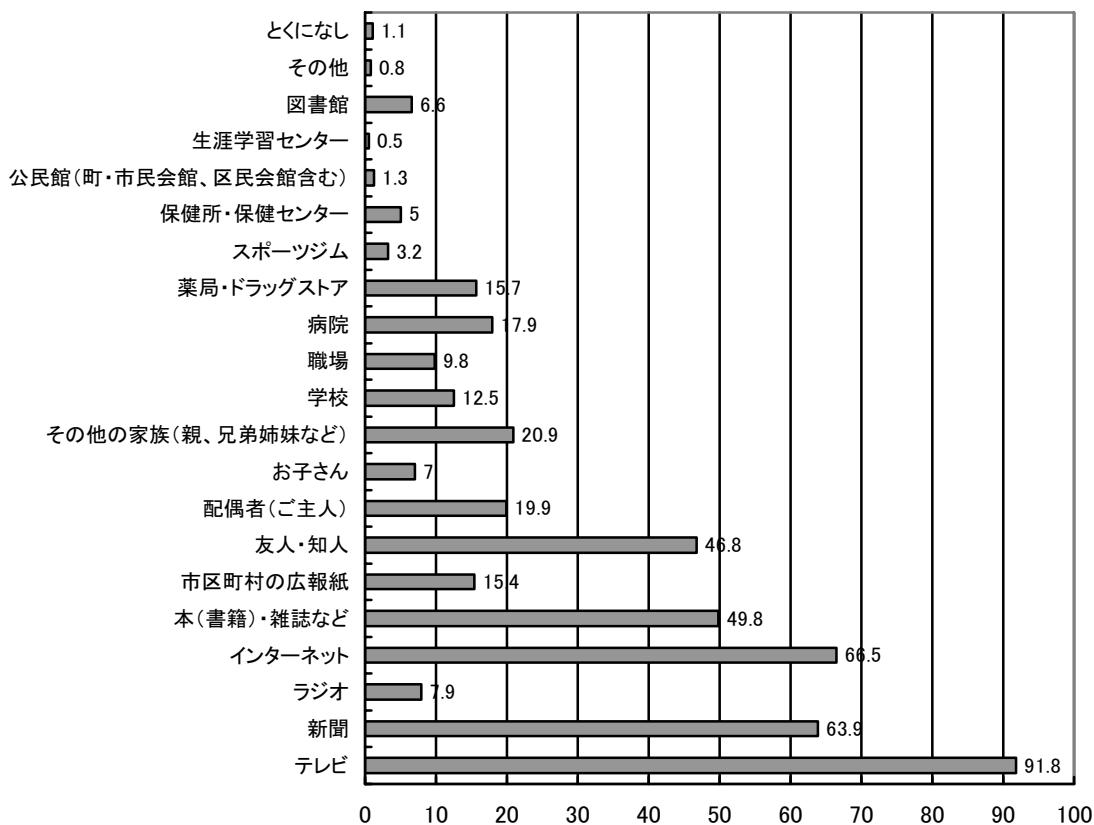


図11 健康情報の経路

まとめ

本調査の対象は、核家族、給与所得世帯で第1子が小中学生をもつ母親である。インターネット調査という従来的な研究方法とは異なるが、対象を特化した調査、すなわちインターネットができる30代から40代の母親層という点で特徴的であり、現代家族の一断面として検討する上で意義深いと考えられる。

1. ネットワークと保健行動

近年ネットワーク（network）という言葉が頻回に使われるようになった。本来の意味は、網状組織の意味（広辞苑）であるが、伝統的なタテ組織とは異なり空間を介したヨコ組織細、すなわち共通の目的を達成するためにフォーマルに組織されたネットワーク（例えば、行政機関連携である〇〇連絡協議会など）から、インフォーマルな友人関係までを指していることがある。前者の場合は、目的達成のための機関・人材・情報などの組織間共有と役割分担が課題であり、後者は、もっぱら個人的な生活情報の収集や、サークル的、同好的な仲間づくり、時には運動体的な性格で用いられることがある。

両者が共通しているのは「情報」の収集・提供・活用であり、その結果、人材、技術、法・制度などをどう活かすかは目的によって異なってくる。

本調査では、友人の数は「1～10人」が多く、また、身近な頼れる人・相談できる人は「2～5人」が多かった。すなわち、頼れる人・相談できる人の存在こそがネットワークの中心を構成しているといえる。われわれの行動は、家族・頼れる友人・知人などの人的なネットワークを通じて、組織・機関などからさまざまな情報を得て行動に移すことが多いからである。友人・家族などによる支援は、保健行動の強化因子（W.Green 1991）となり、健康教育の重要な視点である。

一方、母親が参加している地域活動はPTA、町内会・自治会への参加割合が高かった。PTAは、子どもの就学との関係が深く、町内会・自治会は地域動員型なためともいえる。ポジティブに考えれば、地域情報量も多くのためネットワークが拡大する可能性もあるともいえる。しかし、ネガティブに考えれば、子どもの年齢が高くなるにつれ、自由選択的な趣味のグループへの参加の可能性の方が高くなるともいえる。いずれにせよ、その結果は、現在参加している地域活動（PTA、町内会・自治会）での自己実現の成果や役割期待の度合いによって、将来の選択も異なってくるであろう。

2. ネット社会と健康情報

かつてマスコミといえばテレビ、新聞、ラジオであった。本調査ではインターネットが第2位に登場している。調査対象の条件からいえば当然の帰結ともいえるが、検索機能や通信機能は居ながらにしてリアルタイムで入手できるため、文字媒体より利便性が高い。病名、薬品名、医療機関、診療科目なども自由に情報が得られるため、人々の保健知識・態度・行動に大きく影響を与える媒体といえる。インターネットの普及率は、現在8割台を推移しており（総務省「通信利用調査」）、今後さらに普及するものと思われる。それ故にどのような健康情報を提供するかということと、情報選択の能力が提供側、受け手側双方が問われているといえる。

情報は、個人から友人などを通じて入り、自己にとって合理的であれば内面化され、そして行動へと移りやすい。個々人がどのようなネットワークを持っているか、換言すればどのような資源（social capital）をいかに多く持つかによって、健康な生活、すなわち人生の質（QOL）も異なってくるといえる。

3. 父親の役割

母親からみた父親（夫）の友人数は半数以下であった。このことは夫婦のコミュニケーション

ンの中に夫の「友人」が登場していないことを意味するといえる。その結果、家庭内コミュニケーションは母子関係が中心となり、頼るべき存在である父親・夫の不在は「ガラスの城」といわれる核家族世帯を一層脆いものに陥れる可能性含んでいるといえなくない。

「健康状態に不安のある家族」の回答では、母親(21.0%)よりも父親・夫のことが上位(27.0%)にあげられており、少なからず健康を気遣っている様子がうかがえた。

単に情報を提供するだけではなく家族のコミュニケーションが活発になるような（例えば、クイズ式の教材など）情報を提供するとともに、様々な地域組織へアクセスしやすいような健康づくり情報の提供が重要である。

1.7 子育てに関する意見

山口 忍(順天堂大学医療看護学部)

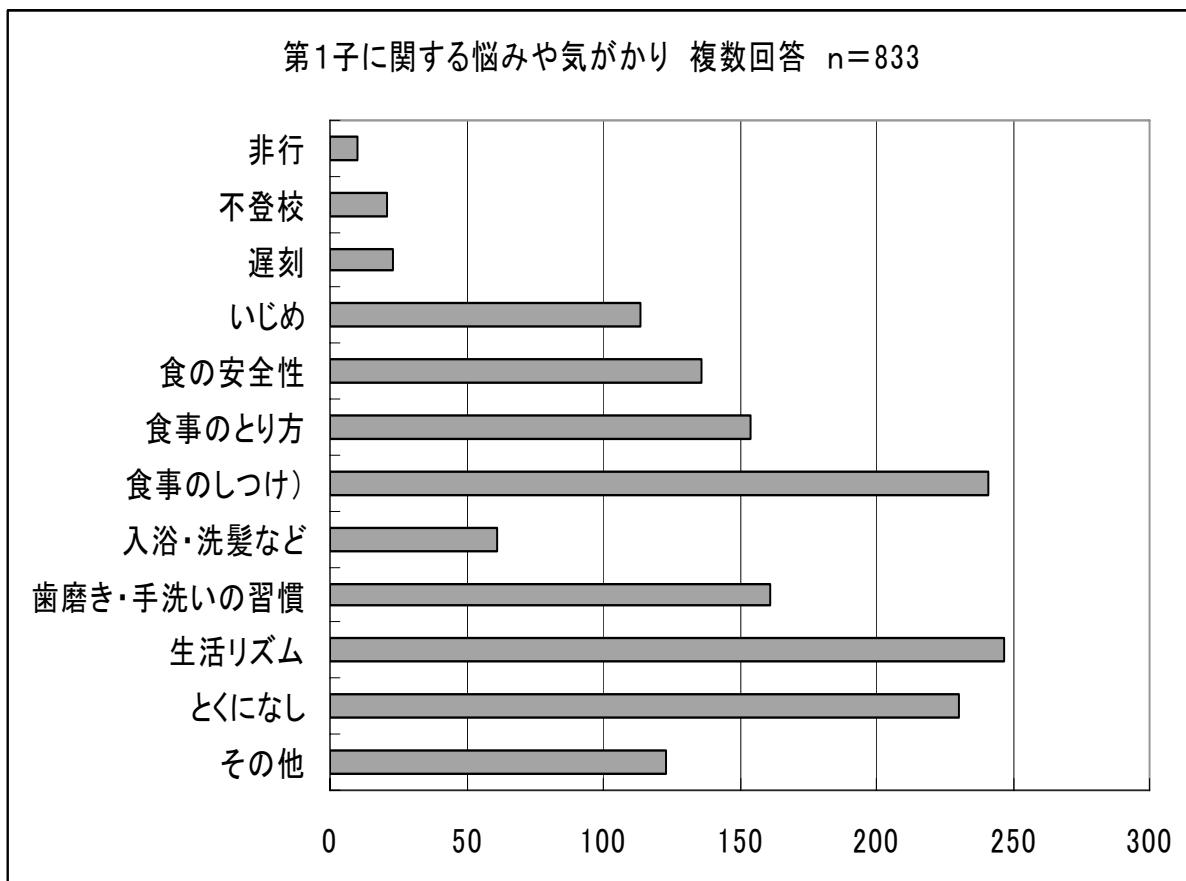
1. 子どもに規則正しい生活習慣を身につけさせる必要性について

子どもに規則正しい生活習慣を身につける必要性については、「必要だと思う」99.6%ほぼ全員が必要と思っていた。パネルA、Bともに同様の結果であった。

2. 第1子に関する「悩みや気がかり」

第1子に関する悩みや気がかりなことは、「生活リズム（朝おきる時間や夜寝る時間など）」が29.7%で一番高く、次いで「食事のしつけ（食事中の態度やマナーなど）」28.9%、「歯磨き・手洗いの習慣」19.3%と、上位の3項目は日常の生活習慣のことであった。

二つのパネルの比較では、「その他」以外の全ての項目でパネルBが高かった。「遅刻」「不登校」「非行」の項目はそれぞれ2%未満であり、パネルBがパネルAの約2倍であった。昨今話題になっている「いじめ」はパネルA Bとも13.7%であった。



1.8 自由回答質問にみられる特徴

- 主な特徴の初動探査 -

大隅 昇(統計数理研究所)、斎藤 進(日本子ども家庭総合研究所)

1. 自由回答の分析

今回調査の特徴の一つはいくつかの自由回答質問を設けたことである。これについて初動探査として初步的な分析を試みた。自由回答のようなテキスト型データの解析、いわゆるテキスト・マイニングを行うと、扱い情報のボリュームが急速に増えるのが通例であり、限られた紙数の中では十分な議論ができない。ここではごく基本的な情報の記述にとどめる。

1.1 自由回答質問の内容

今回調査では自由回答質問として、以下を用意した（調査票を参照）。

- ① 回答者自身（母親）、子供、配偶者の「健康」への意見
- ② 子供の「食生活」への意見
- ③ 「生活習慣」への意見
- ④ 「子育て」で重要と思うこと

なお、この調査の回答者は母親であるから、母親以外の配偶者（父親）、第一子についての自由回答は、“母親からみた間接的な意見”ということになる。自由回答の分析では、このことにとくに注意すべきである。

「健康のために実施していること」は、テキスト・フィールドを使った5項連記形式を使った。「食生活」についても同様の形式を用いた。「生活習慣」については、選択肢型の確認を取ってから「その理由」を「書き込み必須」の自由回答として取得している。つまり回答制御機能を使って「規則正しい生活習慣を身につけさせることは必要」との選択肢質問に必ず回答し、また自由回答も必ず書き入れて初めて次に進むように設定した。「子育て」についての意見は、自由回答意見の重要度に順序を付けたかったがあるので、「子育てにもっとも大事なこと」を質問した後に、「その他に大事なこと」を連記で尋ねるという方式をとった。

自由回答質問の全体の特徴としては、書き込みの記入率が高く、回答者の多くが何らかの意見を述べている。この話題に関心があるであろうこと、調査協力を応諾した回答者であること、謝礼など、色々な要因が重なってこのような結果となつたと思われる。

1.2 自由回答質問における回答制御と記入率

ここで若干の回答制御を設定した。連記型の場合、パネルAは回答記入欄の並び順に始めから各欄に記入するよう記入順を制御した。なおパネルBではこの機能は用いていない。

GQ3：生活習慣の必要性、についてはその前の選択肢型質問を選び、必ず自由回答を書き入れるように回答制御を行った。よって未記入は発生しない。ただし「空白記入であっても記入と認識」するので、自由回答の内容が正しかったとはならない。

GQ3_c1：子育てで大事なこと、の連記記入で、パネルAは4項連記、パネルBは5項連記となった。ここは設計上は、その前の質問「もっとも大事なこと」の1項を受けて残り4項とするはずであった。

自由回答質問の構成と得られた記入率を一覧とした（表1）。ここに見るように自由回答の記入率は高い。一般にインターネット調査では自由回答の記入率が高く記入ボリュームも多いと言われているが、ここでもその傾向がみえる。ただし、記入内容の潤沢さ（本当に意味ある記述がなされたか）とは直接は関連しない。質問文の内容や問い合わせ方にも関連する。また「とくになし、ない」などの書き込みも当然ある。ここらは出現単語・語句の統計情報の精査が必要であるが、ここではもっとも基本的な統計値についての概数を表2に示した。

その他の特徴として、始めの質問「健康のためにしていること」では、母親の記入率が配偶者、第一子のそれよりもやや高い。ここで回答者はいずれも同じ母親、ということを考慮

すると、それが理由でやや割合が変化したとも見える。ここは実際の回答内容の分析も必要である。最後の自由回答質問（「大事なもの」を4項連記で回答）の記入率が他に比べてやや低い。ここで注意することは「回答者、つまり書き込みを行った人は同じ人（母親）」と言う点にある。内容分析に際して注意すべき条件である。

表1 自由回答の構成と記入率

質問コード	質問文	質問形式	自由回答 記入あり	自由回答 記入なし	記入率	備考
EQ3	a. 自分自身の健康のためにしていること（具体的に）	5項連記 テキスト・フィールド	804	29	96.52	5箇所いずれか記入あり
	b. 配偶者（ご主人）の健康のためにしていること（具体的に）	5項連記 テキスト・フィールド	779	54	93.52	5箇所いずれか記入あり
	c. 第一子（[AQ4の学年]の[AQ4の性別]）の健康のためにしていること（具体的に）	5項連記 テキスト・フィールド	788	45	94.60	5箇所いずれか記入あり
GQ	a. お子さんの「食生活」に関するあなたのお考えを、できるだけ具体的にいくつでもお聞かせください。	5項連記 テキスト・フィールド	809	24	97.12	5箇所いずれか記入あり
	b-1. あなたは、お子さんに規則正しい生活習慣を身につけさせることは必要だと思いますか。					
	b-2. 「そう思う理由」を、できるだけ具体的にお聞かせください。	テキスト・ボックス	833	0	100.00	回答記入は必須（回答制御）
	c-1. 子育て全般あなたが「もっとも大事にしていることを一つ」、できるだけ具体的にお聞かせください。	テキスト・ボックス	812	21	97.48	1箇所に記入あり
	c-2. その他に子育て全般あなたが大事にしていることがあれば、できるだけ具体的にいくつでもお聞かせください。	4項連記 ^(注2) テキスト・フィールド	704	129	84.51	4項連記の4箇所いずれかに記入あり

(注1) 質問コードはパネルAで用いたコードで示した。

(注2) パネルにより連記数が異なる（パネルAは4項連記、パネルBは5項連記となった）。

表2 総単語数、異なり単語数(率)

質問コード	質問文	分かち書き			キーワード		
		総単語数	異なり 単語数	異なり 単語率	総単語数	異なり 単語数	異なり 単語率
EQ3_a	自分自身の健康	6122	1271	20.8	3016	785	26.0
EQ3_b	配偶者（ご主人）の健康	4893	1162	23.7	2512	689	12.0
EQ3_c	第一子の健康	6167	1276	20.7	3154	753	23.9
GQ3_a	子どもの「食生活」	10075	1597	15.9	4422	837	18.9
GQ3_b2	規則正しい生活習慣	7589	1456	19.2	3608	701	19.4
GQ3_c1	子育て「もっとも大事にしていることを一つ」	4781	1326	27.7	2251	622	27.6
GQ3_c2	その他に子育て全般で大事にしていること	12101	2391	19.8	5436	1197	22.0

(注1) 総単語数とはその質問に含まれる単語の総度数のこと（延べの単語数）。

(注2) 異なる単語数とは、重複のある単語を「1語」と計数し直したときの単語数のこと。

(注3) 異なり単語率は、総単語数に占める異なり単語数の割合（%）。

表3 子どもの「食生活」(主要キーワードの一覧)

順位	単語	単語数	度数	順位	単語	単語数	度数	順位	単語	単語数	度数
1	御飯	235	232	26	礼儀作法	34	33	51	薄味	16	16
2	バランス	221	221	27	なくす	32	32	52	外食	15	15
3	野菜	196	196	28	子供	31	31	53	牛乳	15	15
4	好き嫌い	184	184	29	一緒	30	30	54	摂取	15	15
5	きちんと	85	85	30	工夫	27	27	55	朝	15	15
6	お菓子	84	83	31	食べさせ	25	25	56	1口	14	14
7	朝食	84	84	32	摂る	25	25	57	時	14	14
8	3食	79	79	33	オツク菓子	23	23	58	自分	14	14
9	時間	75	75	34	家族	23	23	59	中心	14	14
10	食品食材	75	75	35	食生活	23	23	60	和食	14	14
11	手作り	74	74	36	味	22	22	61	インスタント	13	13
12	色々	61	59	37	ファーストフード	21	21	62	安心安全	13	12
13	食べ物	61	58	38	家	21	21	63	控えめ	13	13
14	栄養	60	60	39	偏食	21	21	64	事	13	13
15	料理	56	55	40	大事	20	20	65	素材	13	13
16	間食	50	50	41	果物	19	19	66	無い	12	12
17	沢山	48	48	42	旬	19	19	67	夕食	12	12
18	魚	46	46	43	食卓	19	19	68	和食中心	12	12
19	メニュー	44	42	44	体	19	19	69	1日3食	11	11
20	肉	42	41	45	量	19	19	70	給食	11	11
21	あまり	38	38	46	ジュース	18	18	71	品目	11	11
22	気	38	38	47	だらだら	17	17	72	お惣菜	10	10
23	嫌い	38	38	48	みんな	17	17	73	必要	10	10
24	栄養バランス	37	37	49	種類	17	17	74	味噌汁	10	9
25	食品添加物	37	37	50	食	16	16				

(注1) 単語とは主要キーワードとして登場した語句のこと、単語数はその出現度数、度数はそれが使われた回答者数（延べ）。

(注2) 出現度数が10までを掲載した。単語数を出現度数1までを全て加えると総単語数となる（表23）。

(注3) 辞書編集はほとんど未処理のまま、つまり出現単語数は概数である。表25も同様。

表4 子どもの「生活習慣」(主要キーワードの一覧)

順位	単語	単語数	度数	順位	単語	単語数	度数	順位	単語	単語数	度数
1	健康	212	210	26	ダラダラ	26	26	51	脳	14	14
2	生活	202	202	27	学校	26	26	52	安定	13	13
3	身体	157	157	28	精神的	26	26	53	ときに	12	12
4	生活習慣	105	105	29	病気	25	25	54	子	12	12
5	子供	97	95	30	今	24	24	55	程度	12	12
6	必要	79	79	31	時	22	22	56	当たり前	12	12
7	大事	72	70	32	睡眠	22	22	57	特	12	12
8	大人	68	68	33	社会	21	21	58	発達	12	12
9	成長	67	67	34	食生活	21	20	59	風邪	12	12
10	リズム	57	57	35	生活リズム	21	20	60	自然	11	11
11	基本	56	56	36	バランス	20	20	61	全部	11	11
12	食事	50	50	37	上	20	20	62	ほう	10	10
13	きちんと	49	49	38	朝食	20	20	63	メリハリ	10	10
14	影響	49	49	39	重要	19	19	64	学業	10	10
15	時間	40	40	40	気	18	18	65	気持ち	10	10
16	心	37	37	41	頃	18	18	66	早寝早起き	10	10
17	成長期	35	35	42	親	18	18	67	不可欠	10	10
18	習慣	34	34	43	朝	17	17	68	毎日	10	10
19	心身	34	34	44	勉強	17	17				
20	体調	34	34	45	健全	16	16				
21	不規則	34	34	46	集中	16	16				
22	自分	33	32	47	基礎	15	15				
23	人	31	30	48	精神	15	15				
24	事	28	28	49	頭	15	15				
25	将来	28	28	50	社会生活	14	14				

(注1) ここも出現度数が10までを掲載した。

2. 簡単な分析

すべての質問について詳細分析を行うことは紙数の都合で無理があるので、次の 2 問について基本的な分析を試みた。

GQ3_a : お子さんの「食生活」に関するあなたのお考えを、できるだけ具体的にいくつでもお聞かせください。

GQ3_b : あなたは、お子さんに規則正しい生活習慣を身につけさせることは必要だと思いますか。

「そう思う理由」を、できるだけ具体的にお聞かせください。

この 2 問は回答者自身（母親）に意見を直接問う質問である。また、「食生活への意見」は 5 項連記型で、「子育て」はテキスト・ボックスへの自由書き込みであり、この 2 種の形式で比べる。また配偶者（父親）や第一子についての間接的意見あるいは観察事項を問う質問とは少し性質が異なるので、まずこれについて分析した。また分析には WordMiner を利用した。WordMiner で自由回答文の分かれ書き処理を行い、いわゆる分かれ書き語とキーワード語を抽出した。

表 3 は「食生活」について、自由回答に登場した出現度数が 10 回以上のキーワード（単語・語句）を発生度数順に並べたものである。またここは 5 項連記の全てを併せたデータで分析した。質問文の表現（ワーディング）が、一般的な意見を問う形となっているので、発言語句は様々である。また、この質問に至るまでに既に食生活、健康その他の質問に回答している。従って登場する語句にも関連語句が頻出する（例：御飯、朝食、食生活、家族、品目、...）。これらの語句が回答文の中でどう使われたか、また具体的な特徴、他の選択肢型質問との関係などの分析が必要だがここでは略した。

表 4 は「規則正しい生活習慣を身につけさせることの必要性」についての自由回答で現れたキーワード群である。こちらもほぼ常識的な語句が登場している。ここで質問文の「規則正しい生活習慣」という表現から受け取る回答者のおおよその特徴は見える。また質問文に関連する「生活習慣」「リズム」「健康」「きちんと」「習慣」「不規則」などの出現度数が多いことも特徴である。

この他、いわゆる質的変数（属性や選択肢型質問など）と自由回答に現れた単語群の間の関係の吟味や、「パネル間」「共働き・非共働き」の類似・差違などについての分析を試み、興味ある特徴も見えているが、紙幅の都合で分析内容の詳細な報告は別の機会に譲る。

2.まとめ

斎藤 進(日本子ども家庭総合研究所)

インターネット調査の結果を概観すると、回答者は 2 人の子どもを持つ人が多く 6 割弱 (56.5%) で、平均子ども人数は 1.95 人、共働き 4 割、非共働き 6 割であった。これらの親子の生活行動の特徴をまとめてみた。

【朝食の摂取状況について】

- ① 朝食の所要時間は、第一子で約 8 割が 10~20 分であった。
- ② 主食は「パン」が「ごはん」上回る結果であった。
- ③ 「パン」は「ごはん」に比べ、品数が少ない傾向が見られた。

【運動習慣について】

- ④ 「屋外」で遊ぶのは「小学生男」で、「小学生女」は「屋内」で遊ぶ傾向があった。
- ⑤ 「中学生」になると男子も女子も半数以上が「放課後も遊ぶ時間が無い」傾向であった。

【食生活について】

- ⑥ 「毎日」家族揃って朝食を食べる (15.5%) より、「ほとんどない」 (24.1%) が高い。
- ⑦ 家族揃って朝食を食べる頻度が一番多いのは、「週に 1~2 回」で約 4 割であった。
- ⑧ 「父親」で朝食に「外食を利用することがある」のは約 2 割
- ⑨ 外食利用では「共働き」と「非共働き」とほぼ同比率であった。

【地域ネットワークについて】

- ⑩ 友人の数は「1~10 人」が多かった。
 - ⑪ 身近な頼れる人・相談できる人は「2~5 人」が多かった。
 - ⑫ 母親からみた父親（夫）の友人には半数以下であった。
-

以上の 12 点が、明らかとなった。各領域について、若干のコメントを述べる。

【朝食の摂取状況について】

朝食の摂取状況では、まず第一子の所要時間は 10 から 20 分が最も高かったことについて、池田は、「朝に余裕のある時間をつくることは容易ではないが、今の生活時間の多様化を考えると、この時間を使うことが、食を通じた家族のコミュニケーションを高めるきっかけになる」と指摘し、この短い時間帯をどうやってコミュニケーションの場に工夫するかの検討を示唆している。食事のみならず、共通の時間の持ち方など今後の課題であると思われる。

また、パンの主食とする傾向について、手軽で用意しやすい「パン」であるが、「ごはん」に比べ品数が少ない傾向を指摘し、注意を喚起している。今後の情報提供にあたって、留意すべき点と考えられる。

【運動習慣について】

子どもの運動習慣についてみると、「屋外」で遊ぶのは「小学生（男）」であり、「小学生（女）」は「屋内」で遊ぶ傾向で、「中学生」では男子も女子も半数以上が「放課後も遊ぶ時間が無い」傾向であった。小学生と中学生では、登下校時間や部活動等による生活パターンの違いが大きいと思われる。従って、運動や朝食を考える場合、生活パターンを加味した検討が必要と考えられる。

【食生活について】

食生活全体の面では、「毎日」家族揃って朝食を吃るのは少数派であることが確認された。しかし、約 4 割は「週に 1~2 回」家族揃って朝食を食べていると回答していた。子どもの成長と親の就労条件（業種や通勤など）により変化するだろうが、家族のコミュニケーション

の場としても朝食のあり方を検討することが大切と考えられる。

朝食に「外食を利用することがある」父親は約2割であったことから、利用する場合の注意など情報提供を検討することの必要性が示唆されている。

【地域ネットワーク】

母親からみた父親（夫）の友人数は半数以下であったことについて、小山は、「このことは夫婦のコミュニケーションの中に夫の「友人」が登場していないことを意味する」と指摘している。あわせて、「家庭内コミュニケーションは母子関係が中心となり、頼るべき存在である父親・夫の不在から核家族が一層脆いものに陥れる可能性含んでいる」と指摘している。朝食を家族そろってとる比率や父親の外食利用率とあわせて、家族のあり方を再度見直すことが重要となっていると推測される。

以上から、親と子の生活行動の一部を窺うことができる。今後、インターネット調査という特徴も加味した詳細な分析が必要である。また、食生活への考え方や子育て観に関する自由回答については、大隅が別項で若干述べているが、詳細な分析ではないので、このテキストデータの分析が期待される。

第3部 聞き取り調査

1. 聞き取り調査の概要

山口忍(順天堂大学)、松下弘子(武蔵野大学)

今回、インターネット調査の補完として、特に我々が焦点を当てたい項目について聞き取り調査を以下のように実施した。

1) 実施日

平成 19 年 1 月 14 日・19 日

2) 対象

東京近郊の A 市・B 市在住で第 1 子が小・中学生の子どもを持つ核家族の母親各 10 名
合計 20 名

3) 面接時間と方法

調査ガイドに沿って面接者 3 名で、おのの一人 40 分から 45 分程度で半構成式質問紙法を実施した

4) 調査項目

- ①家族構成 ②家族の年齢 ③健康状態 ④住居形態 ⑤職業(本人・夫)
⑥通勤時間(本人・夫) ⑦健康状態の不安心配の有無
⑧朝食摂取頻度(母親・夫・第 1 子) ⑨家族揃って朝食を食べる頻度
⑩母親が家族の健康のために実施していること(具体的に)
 自分自身の健康のため 配偶者の健康のため 第 1 子の健康のため
⑪子どもの食生活に対する考え方(具体的に)
⑫子どもに規則正しい生活習慣を身につけさせることの必要性の有無とその理由
 (具体的に)
⑬子育て全般でもっとも大事にしていることを一つ(具体的に)
⑭子育てで他に大事にしていること(具体的に)

5) 分析方法

質問紙に記載された内容について、その項目ごとに、数値項目は単純集計、記述項目は KJ 法により、類似した内容ごとに分類した。分類した内容をさらに抽象化した名称をつけ「中項目」とした。さらに、それを抽象化し「大項目」とした。

6) 倫理的配慮

調査対象者は、事前に調査概要を説明し、協力できる人を選定した。実施日に面接者が再度説明し、同意を得た後に実施した。

2. 調査結果

山口忍(順天堂大学)、松下弘子(武蔵野大学)

2.1 回答者の属性

1) 基本的属性

聞き取り調査の回答者は 20 件で、全員母親であった。

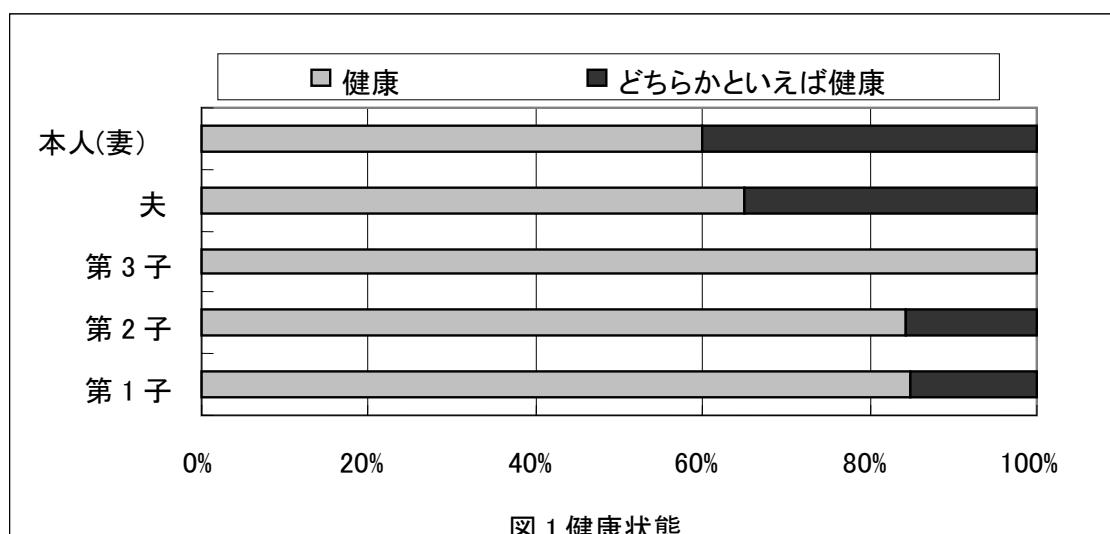
家族構成は全員、夫婦と子どもの核家族であった。本人の平均年齢は 38.7 歳 (31 歳～44 歳)、夫の平均年齢は 41.7 歳 (32 歳～54 歳) であった。子どもの人数は 1 人が 1 件、2 人が 14 件、3 人が 5 件であった。第 1 子の平均年齢は 9.6 歳 (6 歳～13 歳)、小学 1 年生から中学 1 年生であった。第 2 子の平均年齢は 5.6 歳 (2 歳～12 歳)、第 3 子の平均年齢は 3.6 歳 (1～12 歳) であった。

住居形態は、1 戸建てが 6 件 (30.0%)、集合住宅が 14 件 (70.0%) であった。

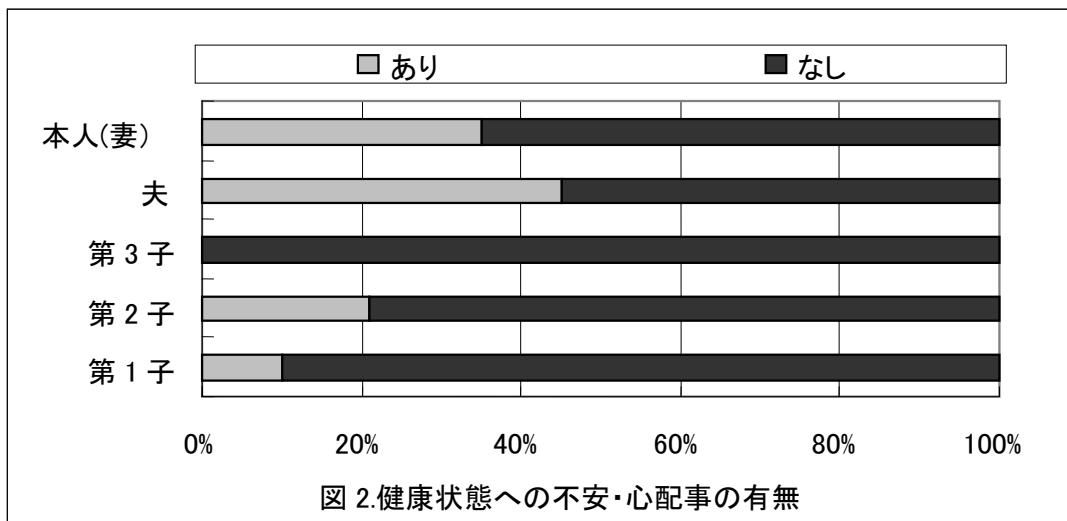
就労については、本人は、「専業主婦」9 件 (45%)、「サービス業」4 件 (20%)、「技術職」2 件 (10%) であった。職業についている 10 名の通勤時間は、「30 分未満」9 件 (90%) であり全員が 1 時間未満であった。夫は「管理職」7 件 (35%)、「技術職」6 件 (30%)、「事務職」4 件 (20%) の順で高かった。通勤時間は、「1 時間～1 時間未満」10 件 (50%) で最も高く、次いで「30 分～1 時間未満」6 件 (30%) であった。

2) 健康に関すること

健康状態は、全員が「健康」「どちらかといえば健康」であった。



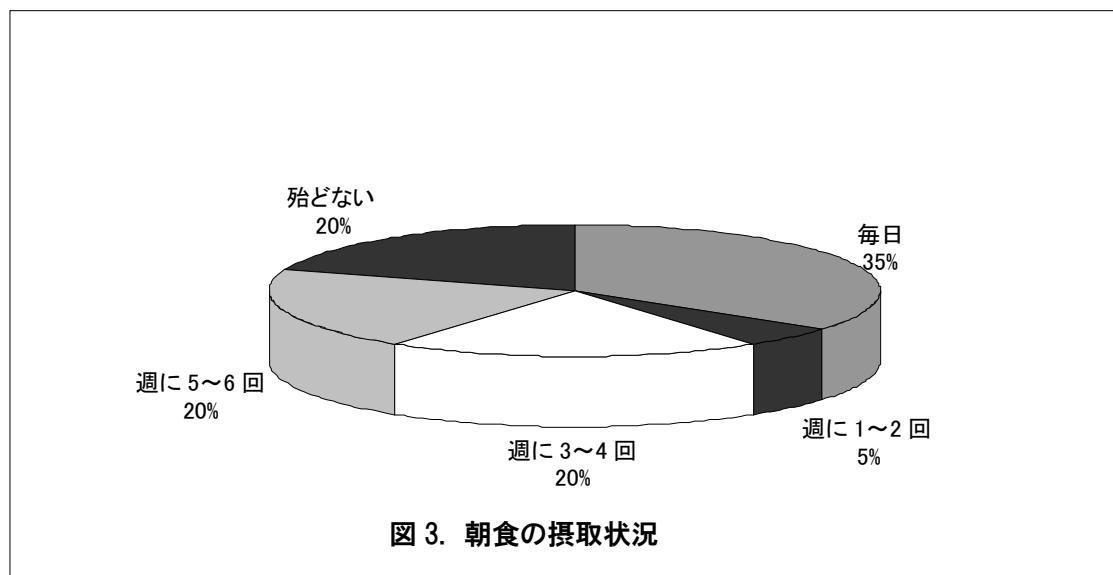
健康に関しての不安や心配事の有無は、「夫」「本人」の順で高かった。



3)朝食の摂取状況

朝食を摂取する回数は、本人、第1子は全員「毎日」であった。夫は、「毎日」17件（85%）であるが、「週に1～2回」2件（10%）「殆どない」1件（5%）であった。

家族がそろって食事をする頻度は、「毎日」7件（35%）が最も高く、「殆どない」「週に5～6回」「週に3～4回」がともに2割だった。



2. 2 健康のためにしていること

1)自分の健康のためにしていること

自分の健康のためにしている項目としては 70 件抽出された。70 件の内訳は《栄養に関するここと (35 件)》として、<特定の食品等をとる (12 件) ><野菜をとる (8 件) ><控えるものの (4 件) ><3 食食べる (3 件) ><バランス (3 件) ><その他 (5 件) >であった。<特定の食品等をとる>では、「健康食品」や「補助食品」、「サプリメント」等のほかに、「魚」や「豆腐」、「季節の食材」等健康のために意識して摂取しているものがあげられた。特に食品の中では<野菜をとる>ことが必要であると意識して摂取している者が多くかった。

《運動のこと (19 件)》としては、<自分なりの運動 (7 件) ><自転車に乗ること (5 件) ><子供と一緒に運動 (3 件) ><歩くこと (2 件) ><ストレッチ (2 件) >であった。<自分なりの運動>については、各自によって頻度が異なるがそれぞれ「体操」や「気功」等自分にあった運動を可能な時間内で行っていた。<自転車に乗る>ことを心がけている者も多く、「車を使わないかわりに自転車に乗る」等、改めて運動をするのではなく日々の生活の中で実現可能なことを行っていることが明らかになった。

《休養のこと (7 件)》としては、<睡眠のこと (5 件) ><ストレス対処 (2 件) >で、《その他 (9 件)》は<病気の予防 (4 件) ><その他 (5 件) >であった。<病気の予防>に関しては、「自分が倒れるわけにはいかない」との理由から、日ごろから疾病予防を意識していたり、「定期的に健診を受ける」等、健康に対する積極的な姿勢がうかがえた。

表 1 自分の健康のためにしていること

大項目	中項目
栄養のこと (35 件)	特定の食品等をとる (12 件)
	野菜をとる (8 件)
	控えるもの (4 件)
	3 食食べること (3 件)
	バランス (3 件)
	その他 (5 件)
運動のこと (19 件)	自分なりの運動 (7 件)
	自転車に乗る (5 件)
	子供と一緒に運動 (3 件)
	歩くこと (2 件)
	ストレッチ (2 件)
休養のこと (7 件)	睡眠のこと (5 件)
	ストレス対処 (2 件)
その他 (9 件)	病気の予防 (4 件)
	その他 (5 件)

2) 夫のためにしていること

夫の健康のためにしている項目としては 60 件抽出された。60 件の内訳は《栄養に関するここと (38 件)》として、<カロリーを控える (12 件) ><特定の食品等をとる (8 件) ><自宅で食事をとる (5 件) ><弁当持参 (4 件) ><バランス (3 件) ><声掛け (3 件) ><薄味 (2 件) ><その他 (1 件) >であった。夫の健康のためにしていることのほとんどが《栄養に関するここと》であり、その中でも<カロリーを控える>ことをあげた者が最も多かった。食事の内容として「揚げ物」や「肉」を控えることとともに、食事以外の「コーヒーの砂糖をカロリー オフのもの」に変えたり、「お菓子やビール等の嗜好品を注意する」等の工夫がなされていた。

《運動に関するここと (10 件)》として、<夫自ら行っていること (8 件) ><その他 (2 件) >であった。運動については、夫自らが行っていることが最も多く、妻として見守りや支持的態度であることが明らかになった。

《休養に関するここと (5 件)》としては、<睡眠に関するここと (3 件) ><ストレス対処 (2 件) >であり、《その他 (7 件)》はであった。その他の中には、特に夫のために自分が行っていることではないものの、「タバコの吸い過ぎ」や「太り過ぎ」について注意したり、健康に良いとされるものを勧める等も含まれていた。

表 2 夫の健康のためにしていること

大項目	中項目
栄養に関するここと (38 件)	カロリーを控える (12 件)
	特定の食品をとる (8 件)
	自宅で食事をとる (5 件)
	弁当持参 (4 件)
	バランス (3 件)
	声掛け (3 件)
	薄味 (2 件)
運動に関するここと (10 件)	その他 (1 件)
	夫自ら行っていること (8 件)
休養に関するここと (5 件)	その他 (2 件)
	睡眠に関するここと (3 件)
その他 (7 件)	ストレス対処 (2 件)

3) 子どものためにしていること

子どものためにしている項目としては 109 件抽出された。109 件の内訳は《栄養に関するここと (45 件)》として、<特定の食品等をとる (8 件) ><控えるもの (7 件) ><野菜をとる (6 件) ><嫌いな食材を食べる工夫 (6 件) ><朝食の摂取 (6 件) ><バランス (3 件) ><和食を心がける (3 件) ><食べ方の工夫 (2 件) ><その他 (3 件) >であった。<特定の食品等をとる>では「牛乳」や「納豆」等、健康に良いとされるものを意識的に摂取しており、その一方では<控えるもの>として、「スナック菓子」や「化学調味料」等の過剰摂取に注意していた。子どもの健康のために毎日の食事の中で積極的に摂取するものと控えるものを意識しながら生活していることが明らかになった。

《休養にすること (19 件)》としては、<早く寝る (16 件) ><早く起きる (3 件) >であった。<早く寝ること>をあげた母親は多くみられ、「20 時から 22 時までには就寝」きるよう声かけをしている様子がみられた。

《運動にすること (16 件)》としては、<特定の運動等 (7 件) ><遊ぶ (6 件) ><スイミング (3 件) >であった。<特定の運動等>では「サッカー」や「縄跳び」等各自が好きな運動を取り入れており、また<遊び>においてもできるだけ「外で遊ぶ」ようにさせていると述べる母親が多くみられた。

《その他 (29 件)》としては、<コミュニケーション (6 件) ><受診・相談 (4 件) ><アレルギーにすること (4 件) ><疾病予防 (4 件) ><TV・ゲームの規制 (3 件) ><歯磨き (2 件) ><排泄 (2 件) ><その他 (4 件) >であった。

表 3 子どものためにしていること

大項目	中項目
栄養にすること (45 件)	特定の食品等をとる (8 件)
	控えるもの (8 件)
	野菜をとる (6 件)
	嫌いな食材を食べる工夫 (6 件)
	朝食の摂取 (4 件)
	バランス (4 件)
	和食 (3 件)
	食べ方の工夫 (2 件)
	その他 (4 件)
休養にすること (19 件)	早く寝る (16 件)
	早く起きる (3 件)
運動にすること (16 件)	特定の運動等 (7 件)
	遊ぶ (6 件)
	スイミング (3 件)
その他 (29 件)	コミュニケーション (6 件)
	受診・相談 (4 件)
	アレルギーにすること (4 件)
	疾病予防 (4 件)
	TV・ゲームの規制 (3 件)
	歯磨き (2 件)
	排泄 (2 件)
	その他 (4 件)

2.3 食生活に関する考え方

食生活に関する考え方としては 73 件抽出された。73 件の内訳は《心身への影響（20 件）》として、＜身体面への影響（9 件）＞＜精神面への影響（8 件）＞＜その他（3 件）＞であった。食生活が身体および精神面へ与える影響が大きいと述べた者が最も多く、特に＜精神面への影響＞としては、「食事の場が子どもにとってホッとする場になってほしい」と願う者や、「食事が心の栄養にもつながる」と考えて食生活を重要視する者が多くみられた。

《楽しむ（11 件）》としては、＜食べること（9 件）＞＜おいしさ（3 件）＞であった。＜食べること＞の楽しさとして「食事自体を楽しいと感じること」と、さらに食事の楽しさから「生きる楽しみ」を見出すことを願う者もみられた。

《食事のとり方（11 件）》として、＜バランス（6 件）＞＜素材の選択（5 件）＞であった。《安全性（9 件）》としては、＜不安なもの（6 件）＞＜安心できるもの（4 件）＞であった。《コミュニケーション（9 件）》としては、＜会話（5 件）＞＜共に食べること（5 件）＞であった。《社会性（6 件）》としては、＜マナー（3 件）＞＜習慣（3 件）＞と、《生きること（4 件）》であった。食生活そのものが＜生きること＞であり、「人生の基本となるもの」、「命そのもの」であると答えた者もあり、日々の生活において食生活に重きを置く者もいた。

表 4 食生活に関する考え方

大項目	中項目
心身への影響（20 件）	身体面への影響（9 件）
	精神面への影響（8 件）
	その他（3 件）
楽しむ（11 件）	食べること（9 件）
	おいしさ（3 件）
食事の取り方（11 件）	バランス（6 件）
安全性（10 件）	素材の選択（5 件）
	不安なもの（6 件）
	安心できるもの（4 件）
コミュニケーション（9 件）	会話（5 件）
	共に食べること（5 件）
社会性（6 件）	マナー（3 件）
	習慣（3 件）
生きること（4 件）	

2.4 生活習慣に対する考え方

生活習慣をつけることの必要性については、回答者全員が「必要と思う」であった。その理由として 80 件の記述が抽出された。その内訳は、《心身の健康（50 件）》として、<不調を防ぐ（22 件）><体の健康（20 件）><生活がスムーズ（8 件）>があげられた。不調の内容としては、「身体がもたない」「ボーっとしている」「機嫌が悪い」「イライラする」「集中力にかける」「落ち着きがなくなる」など日常生活で気づかれる兆候であった。<体の健康>では「成長ホルモンの分泌」「成長への影響」「体内時計への影響」などの知識があげられた。<生活がスムーズ>では生活習慣が「生活のリズム」を作るために必要と考えられ、それは人生を楽しくするための必須項目と捉えられていた。

《社会性（13 件）》として、<社会ルールにつながる（11 件）><自律につながる（2 件）>であった。<社会ルールにつながる>では、生活習慣は「家族」「友達」「社会」付き合いのルールにつながっていると考えていた。また、自分自身で生活習慣を身につけることは<自律につながる>と考えており、生きる上での必要項目と考えていた。

《当然のこと（9 件）》としては、<当たり前のこと（6 件）><習慣が大事（3 件）>であった。<当たり前のこと>では、何も理屈はなく生きる上で必要なことと体得しているようであった。また<習慣が大事>では、生活習慣をつけるのは大人になってから急につけられることではなく、小さいころからの習慣の大切さを実感していた。

《その他（8 件）》としては、<母が楽・安心（4 件）><その他（4 件）>であった。

表 5 生活習慣をつける理由

大項目	中項目
心身の健康（50 件）	不調を防ぐ（22 件）
	体の健康（20 件）
	生活がスムーズ（8 件）
社会性（13 件）	社会ルールにつながる（11 件）
	自律につながる（2 件）
当然のこと（9 件）	当たり前（6 件）
	習慣が大事（3 件）
その他（8 件）	母が楽・安心（3 件）
	その他（4 件）

2.5 子育てで大事にしていること

1) 子育てで一番大事にしていること

子育てで一番大事にしていることとして 32 件の記述が抽出された。その内訳は《人間性（14 件）》として、<自律（6 件）><自分らしさ（4 件）><柔軟さ（3 件）><感性（1 件）>であった。わが子が人間性豊かに生きてほしいと願うのはいつの時代でも同様であろうが、今回の結果から《人間性》を最も大事にしていることが確認できた。特に子育てのゴールである<自律>、生きていく根幹である<自分らしさ>、人間同士が生きていく上で必要な<柔軟さ>と<感性>を大切にしていた。

《社会のルール（9 件）》としては、<人に迷惑をかけない（6 件）><社会性（3 件）>であり、《その他》が 2 件であった。<社会性>では、「物を大切にする」「手伝いをする」など生活行為をとおして必要なルールを教えていた。

《心身の健康（7 件）》として、<たくましさ（3 件）><元気（2 件）><命の重視（2 件）>があげられ、いじめや自殺者のような事件が起こる昨今、いつどんな時でも<命を大事>に、<たくましく><元気>に生きてほしいという親の気持ちを表していた。

表 6 子育てで一番大事にしていること

大項目	中項目
人間性（14 件）	自律（6 件）
	自分らしさ（4 件）
	柔軟さ（3 件）
	感性（1 件）
社会のルール（9 件）	人に迷惑をかけない（6 件）
	社会性（3 件）
心身の健康（7 件）	たくましさ（3 件）
	元気（2 件）
	命の重視（2 件）
その他（2 件）	

2)子育て全般で大事にしていること

子育て全般で大事にしている項目として 92 件の記述が抽出された。その内訳は、《受容と尊重（36 件）》として、<本人の尊重（9 件）><怒らない（8 件）><言葉で伝える（7 件）><話を聞く（5 件）><対等（4 件）><スキンシップ（3 件）>であった。今回の回答者は全て母親であったことが回答に影響していることが考えられる。<本人の尊重>では「子どもの個性を認める」「子どもが主役で親はサポーター」という回答に代表されるよう、子どもが親の力に抑え込まれず、子どもと親が<対等>な関係で成長することを願っていた。そのために<怒らない>ようにし、<言葉で伝える><話を聞く><スキンシップ>を重視していた。その一方、面接の中で回答者からは「迷っている」「ジレンマがある」という言葉も聞かれた。

《拡がり（21 件）》としては、<人間関係（13 件）><体験（8 件）>であった。これらは子どもに多くの体験をさせたいという思いから、「スポーツ」「近所付き合い」での体験の拡がりが多かった。

《夫婦・母親のあり方（18 件）》としては、<模範的態度（11 件）><母の姿勢（4 件）><夫婦（3 件）>であった。<模範的態度>は、「自分が自分の生き方を示すことの記載が多くた。<母の姿勢>では「一緒に遊ぶ」「学校行事にはできる限り参加する」など子どもとの時間を大切にしたいという姿勢が多かった。また「夫婦で子育ての意見をあわせる」など子育てへの配慮が伺える。

《躾や管理（17 件）》は、<躾（8 件）><命（3 件）><病気への対処（3 件）>であった。子どもを受容するばかりではなく<躾>では「社会での基本的ルール」をしつけていた。

表 7 子育てで大事にしていること

大項目	中項目
受容と尊重（37 件）	本人の尊重（10 件） 怒らない（8 件） 言葉で伝える（7 件） 話を聞く（5 件） 対等（4 件） スキンシップ（3 件）
拡がり（21 件）	人間関係（13 件） 体験（8 件）
夫婦・母親のあり方（20 件）	模範的態度（11 件） 母の姿勢（6 件） 夫婦（3 件）
躾けや管理（13 件）	躾け（8 件） 命（3 件） 病気への対処（3 件）
その他（1 件）	

3.まとめ

山口忍(順天堂大学)、松下弘子(武蔵野大学)

健康のためにしていることでは、「子ども」の健康のためにしていることが最も多かった。今後、親が「子どもの健康」について学習できる機会を作ることは必須のことである。「夫」の健康については「妻」が行なうばかりではなく、「夫」自らも健康のために行なっていることがあり中高年からの健康づくりが浸透している様子が伺える。企業や職場における健康づくりの必要性が再確認できた。

また、「栄養」「運動」「休養」の3つの区分でまとめたところ、「自分」「子ども」「夫」の全ての健康において「栄養」に関することが多かった。「栄養」はつまり「食生活」の一部であり、問8の「食生活に関する考え方」で、なぜ母親が「栄養」を重視しているのかを知ることができる。母親は「食生活」を単に食べるためだけのこととは捉えてなく「心身に影響を及ぼす重要なこと」「生きること」につながる大切なことと捉えていた。それゆえ、食事を「楽しみ」になってほしいと考えており、食生活は食べるだけではなく「コミュニケーションの場」とも捉え、「食べながら話す」「家族で一緒に食べる」ことを重視していた。また、食卓だけではなく、「畑で食物をつくること」「料理を一緒につくる」ことも食生活に含んでおり、母親が「食生活」をとても広い範囲で捉えていることがわかった。このことから、子どもへの食育については「栄養」だけではなく様々な場面から学習できる機会となると考える。

生活習慣をつける必要性は全員の母親が必要と思っており、その理由は「心身の健康」と「社会性を育む」ために必要と考えていた。「食生活」についてもほぼ同じような考えをしており、毎日繰り返し行なわれる「食事」「起床・就寝」などの生活習慣は「社会性」を育むためにも必要と考えられていた。「当たり前のこと」と考えている母親は、「習慣」が大人になっても続くこと、「習慣」をなおすことの大変さを体得していた。今後、このように生活習慣の大切さを熟知し体得する保護者が増えることが必要であろう。

子育てで一番大事にしていることでは、気をつけていることの事実と、こんな大人になってほしいという期待が主な内容であった。その内訳では、人間性に関することが最も多く、次いで「命の大切さ」「たくましさ」であった。人間性では「自律」「柔軟さ」が多く、自律した者にこそ柔軟さが備わっている「大人」を目指して子育てをしている様子が伺われた。その他の大事にしていることでは、「怒らない」ようにして、子どもしさをそのまま「受けとめ」、本人の生き方を「尊重」しながら子育てをしていることがわかった。「食生活」でも「楽しみ」の要素を大切にしていることからもこの結果は裏付けられる。その反面「社会性」を育てるために「チームワーク」「躊躇」「健康管理」も大切にしていた。聞き取りの最中に、「優しくしなければいけないのはわかっているがどこまで優しくしたらいいのか、どこで怒ったらしいのかその判断が難しい」という言葉が印象的であり現代の親が抱える課題と思われる。またこのことを解消するためにも、母親は子どもに「友達づきあい」「近所づきあい」を通して「多くの体験」をさせたいと考え「子ども同士」「親同士」「子どもと親」の付き合いの場を身近に求めていた。

今回の聞き取り調査の対象は、ある特定地域に住んでいる限られた範囲の対象者であるため本結果が必ずしも母親を代表する回答とはいえない。今後、この結果を検証するための調査が必要である。

4. 資料

4. 1 調査結果データ

4. 2 聞き取り調査ガイドと記録票

問7:自分の健康のためにしていること(70件)

大項目	中項目	番号	小項目	
栄養に関すること 35件	特定の食品等をとる 12件	1	ミキフルーンの健康食品をとるようにしている	
		2	液体のフルーンを食べている	
		3	補助食品をとっている	
		4	サプリメントを飲んでいる	
		5	なるべく魚を中心の食事を心がける	
		6	魚類を1回/1日とるようにしている	
		7	豆腐をなるべく毎日食べるようによっている	
		8	青汁を時々飲んでいる	
		9	水分をよくとる	
		10	自然の食材を使う	
運動のこと 19件	野菜をとる 8件	11	季節にあった食材をとる	
		12	ヨーグルトを食べている	
		1	野菜の多い食事をとる	
		2	できるだけ住んでいる現地で取れた野菜を食べる	
		3	野菜を多くとる	
		4	野菜を大目にとる	
		5	野菜をよく食べる	
		6	できるだけ野菜中心の食事にしている。	
	控えるもの 4件	7	毎日緑の野菜を食べる	
		8	野菜を取るようにしている	
		1	なるべく脂肪をとらないようにする	
		2	レトルトを使わない	
その他のこと 10件	3食食べる 3件	3	乳製品を取り過ぎない	
		4	化学調味料を取らない	
		1	1日3食食べる	
	バランス 3件	2	3食食べる	
		3	3食食べるようによっている	
	その他 5件	1	糖尿病があるので、食事のカロリー・バランスを考えている	
		2	主食・野菜とたんぱく質の組み合わせによる食事	
		3	バランスよく食べる	
		1	夕食をできるだけ家で食べるようによる	
		2	できるだけ和食にする	
運動のこと 19件	自分なりの運動 7件	3	朝食を必ずとること	
		4	なるべく手作りで	
		5	食育指導士の資格をとる	
		1	週に1回自力整体をする	
		2	体操4回/週に行っている	
		3	2回/週運動はしている	
		4	からだを動かすと心がけている	
	自転車に乗る 5件	5	気功をする	
		6	スポーツジム2回/週	
		7	週1回体操をして体を動かす	
		1	1日2~3時間自転車に乗る	
		2	なるべく車を使わないようにして、歩いたり自転車乗る	
子供と一緒に運動 3件		3	なるべく車を使わずに歩いたり、自転車を使う	
		4	幼稚園の送り迎えを車ではなく自転車を使うようにしている	
		5	近くの買い物には車を使わず自転車を使うようにしている	
		1	子供のベビースイミングに行く	
子供と一緒に運動 3件	2	子どもとサッカーをすることで運動を促す		
	3	運動をする(子どもと剣道1回/週)		

休養に関すること 7件	歩くこと 2件	1 歩くことを心がけている
		2 通勤の際15分ほど徒歩
	ストレッチ 2件	1 気付いたときにストレッチをするようにしている
		2 寝る前と起きる前に腰痛予防のためストレッチ、足、首まわしを行う
	睡眠に関すること 5件	1 早く寝ることを心がける(普段は23時目標)
		2 疲れたら寝る
		3 早く寝る
		4 6時間以上は寝る
		5 早く寝るように心がけている
	ストレス対 2件	1 ストレスたまつたら、週末時間をもらって一人でどこかへ行く
		2 ストレス解消のために釣りをする
その他 9件	疾病予防 4件	1 風邪をひかないように薄着をしない
		2 体を冷やさないようにする
		3 風邪をひいても倒れられないので、予防的にマスクしたり手洗いする
		4 1年に1回健康診断を受ける
	その他 5件	1 お灸を毎日する
		2 薬を飲まない
		3 空気清浄機を使う
		4 花粉症の時期は洗濯物は中に干す
		5 健康についての講演会を聞きに行く

問7 子供のためのにしていること(109件)

大項目	中項目	番号	小項目
栄養に関すること 45件	特定の食品等をとること 8件	1	体にいいので納豆を食べるようになっている
		2	牛乳を飲む
		3	補助食品をとっている
		4	野菜・豆腐類の味噌汁だけは作る
		5	魚を取るようにしている
		6	上の子は水泳をしているので、大会近くになると、炭水化物を多くする
		7	パンよりご飯を食べるようになっている
		8	朝は「ごはん」をとるようにしている
	控えるもの 8件	1	化学調味料をあまり使わない
		2	スナック菓子を控える
		3	おやつは軽い食事と考えて、お菓子はださない
		4	ジャンクフードは時々しか家に置かない
		5	加工食品の食事ばかりにならないようにしている
		6	カロリーを控えるためにおやつは自分で作る
		7	ほっておくとお菓子食べ過ぎるので食べ過ぎないように
		8	普段の食事で食べ過ぎているときは食べすぎじゃないのと問う
野菜をとる 6件	野菜をとる 6件	1	野菜を多くとる
		2	野菜を多くとるようにしたい。自分から食べている
		3	野菜が嫌いなのでホットケーキに入れて食べさせる
		4	好きなメニューに野菜を入れて食べるようしちえる
		5	食卓に野菜を並べるようにしている
		6	野菜を取るようにしている
	嫌いな食材を食べる工夫 6件	1	嫌いな食材は細かくしてスープに入れて食べられるようにする
		2	食べないとときは食べやすいメニューにかえる
		3	魚が嫌いなので少しばし食べるように促す
		4	嫌いな野菜は小さく刻んだりスープにする
		5	好き嫌いなく食べられるようにしたい。
		6	食事をあまり食べていないときは好きなものを食べさせる
朝食の摂取 4件	朝食の摂取 4件	1	朝食を必ずとる
		2	朝食をきちんととる
		3	朝ごはんしっかり食べさせて、夜もしっかり食べさせる
		4	朝食を必ずとること
	バランス 4件	1	バランスのよい食事をとる
		2	食事残さないように、3食食べること
		3	食事をバランスよく
		4	栄養バランスを考えている
	和食 3件	1	和食中心
		2	粗食を心がける(五穀米、納豆、味噌汁のみ)
		3	洋食系ではなく和食系を心がける
食べ方の工夫 2件	食べ方の工夫 2件	1	品数を多く並べる
		2	一人分ずつつぎ分ける
	その他 4件	1	みそはおばあちゃんの手作りのものを使う
		2	魚は添加物なしのCOOPで買うようにしている
		3	食育指導士の資格をとる
		4	エプロンシアターをする
休養に関すること 19件	早く寝る 16件	1	早く寝かせるようにする。
		2	22時までには寝るようにうるさく言う
		3	寝る時間はできるだけ早く決まった時間に寝る
		4	早く寝せる
		5	21時には寝るようにしている

		6 早寝
		7 必ず21時には寝るようにさせている
		8 早寝するように
		9 早寝
		10 8時過ぎには寝るようにしている
		11 早く寝かせつけるようにしている
		12 早く寝るよう晩御飯も早めにする
		13 夜更かしはさせない
		14 早く寝るよう、9時には寝室に行くようにしている
		15 早寝させる
		16 睡眠をとるように
	早く起きる 3件	1 早く起きる
		2 早起き
		3 早起き
運動に関すること 16件	特定の運動等 7件	1 サッカーを続けるようにさせている
		2 体を動かすように習い事としてダンスならっている
		3 本人の楽しみで空手とチアーディングをしている
		4 柔軟体操を毎日一緒に
		5 運動不足気味のときは縄跳びなどをすすめる
		6 野球をしているのでいっぱい練習してきなさいと声をかける
		7 家族みんなで休みが取れたときは、歩こう会として、1日中みんなで歩く
	遊ぶ 6件	1 家にこもるとゲームをやるので晴れた日は外で遊ぶようにいう
		2 体を動かす。天気のいい日はゲームではなく外で遊ぶようにいう
		3 できるだけ外で遊ぶようにさせている
		4 外で遊ぶようにさせている
		5 外遊びを多くする
		6 一緒に身体を使って遊んでいる
	スイミング 3件	1 体力をつけるためにスイミングに通う
		2 生後6ヶ月からベビースイミングをはじめて今も続けている
		3 スイミングを週に1回
その他 29件	コミュニケーション 6件	1 なるべく小言を言わないようにする
		2 家でおちつけるようがみがみ言わないようにしている
		3 家で抱っこしてあげたり、スキンシップをとる
		4 不安な時は、夜寝る前に、足や手をマッサージ、自己流マッサージ
		5 女性や思春期の生理を弟がいないところで楽しく話せるようにしている
		6 お話を聞くようにしている
	受診・相談 4件	1 口腔外科・カイロプラクティスなど相談したり受診したりしている
		2 おねしょがなおらないので、腎機能を調べたり相談したりした
		3 発達の遅れ系の相談を専門家にした
		4 発達の遅れに関する講演会などを聞きに行く
	アレルギーに関するこ 4件	1 アトピーなので洋服選びは化繊を避けるなど気をつかう
		2 軽いアトピーがあるので塗布剤をつけている
		3 喘息なのでなるべく掃除機かけるようにしている
		4 花粉症の時期は洗濯物は中に干す
	疾病予防 4件	1 手洗い
		2 うがい
		3 なるべく薄着で生活する
		4 まめに布団を干す
	TV・ゲーム の規制 3件	1 TVは決まったもの以外はあまり見させない
		2 夜、下のことと一緒にゲームをしていると長くなるので声をかける
		3 テレビは1日1時間と決めている

歯磨き	1	寝る前の歯磨きをきちんとするように
2件	2	歯磨き
排泄	1	排便回数と便状を聞く
2件	2	朝は排便をするように
その他	1	空気清浄機を使う
4件	2	規則正しい生活
	3	あぶないものをおかないようにしている
	4	服薬管理

問7：夫の健康のためにしていること(60件)

大項目	中項目	番号	小項目
栄養に関すること 38件	カロリー控える 12件	1	毎朝のコーヒーの砂糖をカロリー少な目のものにかえる
		2	夕食は子供達とは別のカロリー控えめの食事を別につくる
		3	食事のときのビールは本数を2本(350ml)と決め、あとは焼酎とする
		4	カロリー控えめの食事作る
		5	ビールやお菓子を食べないように、買い置きをしない
		6	ほっておくと食べ過ぎるのでご飯は一膳と決めている
		7	揚げ物避け和食中心とする
		8	なるべく脂肪をとらないようにする
		9	帰宅時間が遅いのでなるべく油っぽいものにならないように
		10	肉を控える
		11	揚げ物を少なめに
		12	夕食時間が遅いので油っぽいものはとらない
	特定の食品等をとる 8件	1	夕食には野菜を入れる
		2	夕食にサラダをとる
		3	野菜を多くとるようにしている
		4	肉が好きなので、なるべく魚中心の食事を心がける
		5	豆腐をなるべく毎日食べるようになっている
		6	青汁を毎日飲んでいる
		7	酢を飲んでいる
		8	補助食品をとっている
	自宅で食事をとる 5件	1	夜帰りが遅いので、朝と晩ご飯は必ず家で食べるようになっている
		2	夕食ができるだけ家で食べるようになる
		3	自宅で食事を取るようにしている
		4	一日に外食は1回になるようになっている
		5	朝食を毎日食べてもらう
	弁当持参 4件	1	このままだと糖尿病になるといわれてから弁当持参するようになった
		2	お弁当を毎日作る
		3	太ってきてるので、野菜や魚を中心とした弁当を持たせている。
		4	昼はお弁当を作る
	バランス 3件	1	食事のバランスを考える
		2	魚と肉のメニューを交互にする
		3	品数を多く並べる
	声掛け 3件	1	疲れていないか声をかける
		2	酒を飲みすぎていないか声をかける
		3	お酒を控えるように言う
	薄味 2件	1	薄味にする
		2	しょっぱいものは食べないようにする
	その他 1件	1	夫は通風なので、それに合う食事を考えている
運動に関すること 10件	夫自ら行っている 8件	1	子どもとサッカーをする
		2	運動は妻が言う前に夫自身で娘と一緒に空手をしている
		3	マンションは階段を使う
		4	自分でトレーニングしている
		5	本人は会社のバレー部に入っている
		6	テニスをしている
		7	自分で管理している
		8	自分で気をつけている
	その他 2件	1	夫婦で時間のあるときに30分程度散歩する
		2	会社ではエレベータではなく階段使うように言っている

休養に関すること	睡眠に関すること	1	テンピュールの枕を購入し、ぐっすり眠れるようにする
5件	3件	2	早く寝るようにせかす
		3	寝る時間を早めるように言う
	ストレス対処 2件	1	ストレス発散のためお互い週末は自分のやりたいことを優先させる
		2	ストレス解消のために釣りをすすめる
その他 7件		1	タバコのすいすぎを注意する
		2	太ってきたら太ってきたというようにしている
		3	肩こりや腰痛があるときはマッサージをしてあげる
		4	お灸をすすめる
		5	花粉症の時期は洗濯物は中に干す
		6	空気清浄機を使う
		7	心身の健康のことによく話す

問8 食生活に関する考え方(73件)

大項目	中項目	番号	小項目
心身への影響 20件	身体面への影響 9件	1	上の子が伸び悩んでるのでいっぱい食べてほしい
		2	カルシウム補給、成長ばかり、大きくなるように、丈夫になってほしいと思う
		3	成長発達にいろんな栄養を取った方がいいと思う
		4	子供もまだまだ身体が出来ておらず成長期で大事な時期なので食事は大切
		5	お菓子が変なものだと味覚が育たない
		6	食事は口から入って身体をつくる
		7	食べ物で身体はつくられる
		8	害のあるものは身体に蓄積される
		9	薬を飲まないで食事で病気を予防することができる
	精神面への影響 8件	1	身体に悪いものを食べていると体だけではなく、キレイやすい子供につながる
		2	身体と気持ちは運動している
		3	何はなくともおいしい食べ物があれば何とかなる、言葉よりホッとしたり心を開いてくれると思う
		4	食べ物で考えることも違ってくると思う
		5	子供が思春期なのでこれからいろんなことがあっても「ご飯があるから家に帰ろう」と思ってほしい
		6	外から帰ってきたときに食事がホットとする場であるといい
		7	みんなと食べるほうが心の栄養にもなりいい
		8	栄養があれば元気になるし気分もよくなる
	その他 3件	1	健康を守るために食事が大切だと思っている
		2	のびのび健やかな大人になってほしい
		3	みんなで食事すると元気でいられると思う
楽しむ 11件	食べること 9件	1	食事作るのは遊びの一貫で楽しみながらやること
		2	食事の時間は楽しい時間
		3	食べることはうれしいこと、楽しいことなので、食べることを好きでいてほしい
		4	みんなで一緒に食べたり、たまに外食をして食事の楽しみを教えてほしい
		5	食べていることを意識して楽しみながら食べるようになってほしい
		6	今は食べる楽しみ、先々は作る楽しみを獲得して大人になってほしい
		7	生きる楽しみを持っている大人になってほしいから食べることを楽しめるようになってほしい
		8	食べることが楽しかったら一番いいと思う
		9	食べることは毎日のことだから楽しく食べてほしい
	おいしさ 3件	1	外で加工されていないまともなもの、おいしいものをおいしいねと食べるのがいい
		2	家で作ったものはおいしい
		3	おいしいものをおいしいと思えない人生はつまらない
食事の取り方 11件	バランス 6件	1	自分が忙しいと簡単なものになってしまいがちだけど、なるべくバランスを考える
		2	バランスが大事
		3	できるだけいろいろと食べてほしい
		4	食べられる種類を増やしたい
		5	3食べることが大切
		6	好きなものばかり食べていると偏りができる
	素材の選択 5件	1	素材の種類を増やしたい
		2	無農薬野菜を使ったほうがいいと思う
		3	旬のものがよい
		4	季節のものをおいしいと思って食べられるようになってほしい
		5	子供が生まれてから素材を意識し始めた

安全性	不安なもの	1 わけがわからないものを食べているとあとあと健康に影響がある
9件	6件	2 カップ麺のカップが身体によくないので食べるときはカップをはずして皿で食べる
		3 電磁波は脳に悪いので、電子レンジは使わない
		4 肉の安全性が不安
		5 スナック菓子には合成調味料が入っていて身体によくないし、蓄積が怖い
		6 激辛の食品は食べていて安心できず疲れる
	安心できるもの 4件	1 口に入れるものはいいものをいれさせたいので、いいお水を買っている
		2 お菓子も手作りがいいと思う
		3 添加物が気になっていたので家で作ったほうが安心できる
		4 穏やかな食べ物を安心して食べたい
コミュニケーション 9件	会話 5件	1 食べながら会話をしたいと思う
		2 コミュニケーションの場と考えている
		3 おやつやご飯と一緒に手作りしたい
		4 みんなと会話して楽しめることが大事
		5 外で頑張ってきた様子を食卓で出し合えるといい
	共に食べるこ 5件	1 一緒に吃るのは大事
		2 食卓を一緒に囲むのが大事
		3 家族一緒に食べられるとよい
		4 家族が一緒に御飯を吃るのが大事
		5 番を借りて子供達と一緒に育てる家庭も考えていいけたらいい
社会性 6件	マナー 3件	1 みんなで食べた方がマナーや挨拶、皿をさげるなどできる
		2 食事は人前でやることが多いので大人になって恥をかかないようになしたい
		3 マナーとして自分で食べた食器は自分で流し台に持っていくようにしたい
	習慣 3件	1 20歳になったらとらないような魚や根菜などを小さい頃になるべくとるように心掛ける
		2 小さい頃に食べる習慣をつけておくと身に付く
		3 離乳食の時期に食事が偏ると大きくなても偏るなど、離乳食の時期が大切
生きること 4件		1 人間は食べないと生きていけない。吃ることは生きることにつながる
		2 食事はとても大事で基本となるもの
		3 食事は大事、命をつなぐもの
		4 食生活=命=人生=大事

問9 生活習慣をつける理由(80件)

大項目	中項目	番号	小項目
心身の健康 50件	不調を防ぐ 22件	1	子どもの身体がもたないなーと思った
		2	遅い時間に寝ると朝ボヤーッとしているし機嫌が悪い
		3	早く寝ると朝自然に目が冷るので表情が違う
		4	集中力、考える力、楽しくが大事で、何事も一生懸命になれない、考えられない子になるので
		5	はやね早起き朝ごはんがいきいきとすごせると思う
		6	夜更かしをしていると翌日に支障ができる
		7	次の日元気に動けるためにも
		8	「週に1回金曜日は遅くまで起きててもよい日」と家族でしているが次の日機嫌が悪い。
		9	早寝早起きのほうが、次の日に機嫌がいい。体調もよい。
		10	早寝早起きのほうが体調もよい。
		11	きちんと睡眠時間とていればイライラしない
		12	睡眠不足すると学校でボーっとてしまい、集中力かけてイライラする
		13	睡眠時間が少ないと機嫌が悪かったり、子どもの情緒に影響ができる
		14	やりたいことはやるけど、やりたくないことはやらないようになる
		15	機嫌が悪くなる
		16	不規則だとからだがしんどくなる、
		17	具合が悪くなる
		18	子どもを見ていると、疲れている、睡眠が少ない、栄養が足りないなど身体がしんどくなるとイライラしてくるのがわかる
		19	学校ですっきり過ごすためには規則正しい生活習慣が必要
		20	夫の帰り12時で子どもが寝るのが2時のときがあり、子どもがおちつきがない、不安定っぽいという風になり実感した
		21	夜テレビをみていると朝おきられず、きちんと学校に行けない
		22	夜早く寝ないと、学校でボーっとする
体の健康 20件		1	ダラダラ食べると虫歯が増える
		2	夜中の成長ホルモンが分泌に気をつけて大きくなってほしい
		3	22時から2時までの間に成長ホルモンなので
		4	健やかな成長に影響ができないように
		5	丈夫な体で体調崩さないようにするため
		6	欠食は脳にわるい
		7	生活リズムができないと病気になったり体にわるい
		8	ダラダラ寝ていると朝だるかったり、頭痛がしたりする。体のサイクルを守ることが体には大切
		9	規則正しい生活しないと心の成長にも影響がでそうだから
		10	もともと痩せている子なので睡眠時間が減ると、すぐにクマができる
		11	健康になれると思う
		12	健康で大きくなってほしいから
		13	睡眠時間が足りないと風引きやすくなるし、子どもが疲れる感じで回復するために時間がかかる
		14	体内時計がうまくいかなくなる
		15	宵っ張りの子が肥満になる確率が高いという知識がある
		16	正しい生活習慣では身体の不調もでてこない、快適に過ごすためにも精神的にも大事なことと思う
		17	身体も頭も健康になれる
		18	快適な状態を保つためにも大事
		19	身体の発達、ホルモンのバランスを考えると早い時間に寝ることが大事
		20	夜起きていると昼ウトウトする睡眠障害になる
生活がスマーズ 8件		1	生活リズムをくずさないように
		2	生活リズムをつければ、朝の起床や勉強などスマーズになる
		3	規則正しい生活をしているほうが、部活など新しいことをやるのにスマーズ(時間的に)
		4	早く起きればいろいろできる
		5	生活がスマーズにできる

		6 寝る時間が遅れるとおきる時間が遅くなる。そうすると生活リズムが狂う
		7 生活リズムがたんたんと決まっている人生だと人生が明るい方向に行く
		8 そのほうが楽に生きられる
社会性 13件	社会ルールにつながる 11件	1 交友関係に影響がよいである
		2 他人に対する配慮ができるようになる
		3 社会生活全般におけるルールを守れるようになる
		4 時間を守ることにつながる
		5 約束を守ることにつながる
		6 家族が集団で生活する上でルールを守るために必要
		7 遅刻などの支障ができるから
		8 自分の周りの整理整頓ができるようになる
		9 生活習慣をつけると勉強の習慣も身に付く(遊ぶ時間、宿題の時間など)
		10 同じことをすると他人の信頼を得られる
		11 性格に影響がでそうな感じがする
	自律につながる 2件	1 自分自身で何かやる時間を決めて、1日スケジュールを組むことは成長するに連れて必要なこと
		2 自分で時間をきめてやらないと今後メニューをこなせないと思うから自分にとっては自分で決めてやるようだ
当然のこと 9件	当たり前 6件	1 一日の始まりは朝起きて食事を取ること
		2 当たり前でしょという感じ
		3 当たり前のことを当たり前に使うことが大切
		4 当たり前、当然のこと
		5 毎日の生活が大事
		6 3食食べるのは大事、基本。そう思って育ててきた。
	習慣が大事 3件	1 小さいときの積み重ねで習慣化していくので、そこがずれるとすべてが上手くいかなくなる
		2 小さい頃から自然に身についていくので、大人になっても続く
		3 夜更かしが通常になると体内時計がくずれていく怖さがある。それを治すには時間がかかる
その他 8件	母が楽・安心 4件	1 家族がばらばらの生活習慣だと疲れる(母親本人が)
		2 子どもが早く寝たほうが親も楽。
		3 朝食をとるのが1日の安心につながる
		4 早寝早起きで朝早く起きられると大丈夫と思う、今日は元気だなと思う
	その他 4件	1 保育園からも規則正しい生活習慣を身につけさせてくださいといわれている
		2 睡眠時間が大事
		3 規則正しい生活を送るには健康が必要で健康であることは子ども自身が助かる
		4 子供の行動に反映する

問10. 子育てで一番大事にしていること(32件)

大項目	中項目	番号	小項目
人間性 14件	自律 6件	1	自立してほしいので自分でやってという
		2	人のせいにしない
		3	流されていると思わない
		4	自分のやりたいことを見つけて楽しくやっていけるかなと考えている
		5	何でもいいあえる人間関係を築いてほしい
		6	先生の方向性にあわせるのではなく、自分の判断で動けるようにしたい
	自分らしさ 4件	1	のびのびしてほしい
		2	自主性がもてるようになしたい
		3	好きなことをやってくれればいい
		4	日々楽しく生きるように
	柔軟さ 3件	1	うまくクリアしてほしい
		2	人間関係がスムーズにいくような子どもに育てたいと夫と話している
		3	視野は広く、いろいろなことに対応できるような子どもになってほしい。
	感性 1件	1	喧嘩したり痛い思いをしたり、相手が泣いているのを見て何かを感じてい欲しい
社会のルール 9件	人に迷惑をかけない 6件	1	人に迷惑をかけないということ
		2	他人に迷惑をかけないようにいう
		3	人に迷惑をかけない子に育ってほしい
		4	人に迷惑をかけないように
		5	人に迷惑をかけないようにいう
		6	人に優しく接するようにいう
	社会性 3件	1	けじめ、生活上のルールはちゃんとしている
		2	物を大切にするようにいう
		3	手伝いをするようにいう
心身の健康 7件	たくましさ 3件	1	何があってもたくましく生きていけるように
		2	どんな逆境にも耐えられる子になってほしい
		3	悪いことを良いことに思えるようにする
	元気 2件	1	怪我や事故にあわず元気に行って元気に帰ってきてほしい
		2	元気よくするようにいう
	命の重視 2件	1	命の重さがわかる子になってほしい。
		2	つらいときに「死」という選択肢を選ばないように、軽々しく「死」を考えないように
その他 2件		1	将来的に本が好きな子になってほしい
		2	世の中に失望した大人になってほしくない

問11 子育てで大事にしていること(92件)

大項目	中項目	番号	小項目
受容と尊重 37件	本人の尊重 10件	1	上の子と下の子の個性が全然違うので、それぞれの個性を認めるようになしたいと思っている
		2	子供1人1人の勉強の進度や理解度にあわせて対応する
		3	1つだけ誰にも負けないこと、得意なことをあってあげたい
		4	「おかあさんがわかってくれてるからいいや」と思えるようにしている
		5	子どもの個性をみつける
		6	子どもが主役なので、そのサポーターになれたらいいと思っている
		7	自分でできることは何でも自分でさせる
		8	自分のことは自分でやらせる
		9	チャレンジする姿を応援する
		10	子どもの意見思いを尊重する
怒らない 8件	8件	1	おこりっぱなしで寝たり学校に行ったりしないようにしている
		2	上だからといって叱らないようにしている
		3	いらいらして不当におこったときは子どもは反発する、ちゃんと叱ったときはわかるから素直にきかないといけないな
		4	目に付くことはたくさんあるけど、少し言う前に見守るようにしている
		5	保育園にいっててもちゃんとした子どもに育ててやるという気持ち
		6	勉強しろなど、子どもが嫌がる言葉は言わずトラブルおきないようにしている
		7	あまりうるさく言わないこと
		8	母親は基本的には笑顔でと思っている
言葉で伝える 7件	7件	1	「思っていることはちゃんと言わないとわからないのよ」を大事にしている
		2	コミュニケーションが取れなかつたらできない。そのためのトレーニングとして家族があつたらいいなと思う
		3	今の世の中で生きていかなければいけないからコミュニケーションは大事
		4	いっぱいしゃべる
		5	あまり話しかけるとうざいと思われるので、話しかけてきたら話す
		6	絵など上手だったら、1番上手だと自分で思ったことを素直に伝える
		7	良いことをしたらちゃんとほめる
話を聞く 5件	5件	1	いやなことがあった時、話を聞いてほしいと言ってきた時はちょっと話を聞いてあげると満足する
		2	こつちが判断したり、否定的なことを言ったらしゃべらなくなるのでとりあえず聞くことにしている
		3	兄弟げんかをしてもよく言い分を聞く
		4	なるべく頭ごなしで叱るのではなく原因等も聞く
		5	できるだけ子どもの話を聞く
対等 4件	4件	1	やりたくないことがあったときは一緒に頑張って行こうねという、子どもが頑張っている姿が励みになる
		2	同じ人間として一緒に頑張っていく
		3	一人の人間として対等に接するように心がけている
		4	子どもが「あーそうだね」といえる関係をつくっていくためにアドバイスするタイミングを考える
スキンシップ 3件	3件	1	甘えてくるがあるので、その時は受け止めてあげる、抱っこしたり、1分添い寝をしたり
		2	親子にふれあいは大切にしたい
		3	寝る前に読み聞かせは毎日赤ちゃんのころから、しかったときも、いつも、何があってもやっている
拡がり 21件	13件	1	安心してみんなで子育てをしている
		2	スポーツを通してチームワークを体験する
		3	子供が言わないこともあるので、親同士で情報交換する

		4	一家族では子育ての限界があるので子育て活動を始めた。子どもに親の考え方を見せないより他の家族のあり方をみせることでいろんな事を感じ取ってほしい
		5	いろんな人に子どもを見てもらえるように、親が出来ない刺激を与えてもらって助けてもらう
		6	親と違うパーソナリティの人に家に来てもらったり「こういうものもありなんだ」と人生のいろんな生き方をわかってもらうようにしている
		7	待ってても誰も声をかけてこなくなるので自分から声をかけていく
		8	みんなが外に出て声掛け合っていけば昔ながらの地域ができる。作っていこうと思う
		9	友人同士のふれあいを大切にし、人間関係を自分で学んでもほしい
		10	家に母がいるときはお友達を呼ぶこと
		11	人にやられて嫌なことは他人にもしないようにいう
		12	家族を大事にする。
		13	家族全員が気持ちよく楽しく暮らせるようにしたい
	体験 8件	1	できるだけいろんな体験をさせたい
		2	行きたいところ、見たいところ、視野を広げてあげたいから
		3	のびのびと育つようにしている
		4	友人ととにかく遊ばせるために、あまり習い事をしない
		5	いろいろなことを経験させてあげたい
		6	それぞれがやりたいことをさせる
		7	親の前でいい言葉を使って演じていてもよくなないので、学校でしゃべる言葉で話した方がよい
		8	旅行に行って、普段できないこと例えば山登りや海で遊ぶなど、自然に触れる
夫婦・母親 のあり方 20件	模範的態度 11件	1	飼っている猫をだいじにている
		2	自分もテレビをみて悪口を言わないようにしている
		3	正直でいること: 自分もオープンにしている。子どもと対等に自分が間違えたことも素直に謝る
		4	自分が小さい頃いやだったので、夫や祖父母の悪口を言わない
		5	自分自身が楽しんでいる。
		6	自分でやりたいことを自分でやってる
		7	親が態度でしめすようにしている
		8	自分が一生懸命生きていくしかないかなと思う
		9	子どもにやってほしいことはまずは自分でやらなきゃと思う
		10	人の悪口を言ったときは聞き逃さずアドバイスをするようにしている
		11	子どもに対してうそをつかない(親が姿を示すしかない)
	母の姿勢 6件	1	子どもに腹が立ったら自分を振り返る
		2	学校行事、特に参観日にも出来る限り参加している
		3	できるだけ子どもと一緒に遊ぶ
		4	子どもが帰ってきたときに家にいるようにしたい
		5	今できることを一緒にする。
		6	めんどくさがらないで一緒に
	夫婦 3件	1	子どもが抱えている問題はこれということを夫婦でわかっているようにしておく
		2	夫婦で子育ての意見が違わないようにする
		3	兄弟が多いので二人で出かける時間を作る
躊躇や管理 13件	躊躇 8件	1	ほしいものを全部買ってあげるのではなく我慢せたりもする
		2	人前で騒いでいたらおこる
		3	寝る前にかたづけるを守らないとゴミ袋に捨てる
		4	社会での基本的ルールは守らせる
		5	食事とか健康生活習慣は普通に守っている
		6	ECOができるようにしている

	7	パッと見て怒ったり否定したりしてしまうが、子どもには子どもの理由があるはずだと思う。自分に対して「ちょっと待て」と一呼吸おく。
	8	実はあまり子どもが好きな方ではなかった。「子ども」でなくて「ちっちゃな人間」と思えばその「人」が好きになる。
命 3件	1	「死んでしまったらおしまいだよ」ということを教えたい
	2	お母さんは明日死ぬかもしれないから、1人でも生きていけるようにといつも話している
病気への対処 3件	1	花粉症がひどくならないような配慮
	2	健康管理すること
	3	規則正しい生活
その他	1件	3 やさしさ

資料

平成 19 年 1 月 11 日

聞き取り調査ガイド

1. 時 間

聞き取り時間は一人約 45 分ほどとする

2. 方 法

- ・ 調査協力のお願いの趣旨、決して強制ではないこと、途中でやめることもできることを説明する。
- ・ 問 1～問 6 は、必ず聞き取ること
- ・ 問 7～問 11 は自由記載の聞き取りとなる

問 7 健康のために実施していること（自分自身のため・夫のため・第 1 子のため）

実施している事実を聞き取る

1 項目 1 文で記載

「第 1 子のため」はのみではなく、他の子どもにもしていてもいい

問 8 お子さんの食生活に関するあなたの考え方

例) 「お子さんの食生活についてどのように考えていらっしゃいますか」

事実ではなく考え方を「どう思うからですか」と聞き取る

「食生活」であるため「食事」だけに偏らず、「食べ方」や「家族にとっての位置づけ」など幅広く聞けるといい

1 項目 1 文が望ましい

問 9 あなたはお子さんに規則正しい生活習慣を身につけさせることは必要だと思いませんか

→ 「1」 「2」 のどちらかに○をつける

そう思う理由

例) 「そのように思う理由をおきかせいただけますか」「何故そのように思いますが」

どちらに○をつけてもその理由を聞く

1 項目 1 文が望ましい

抽象的な言葉より、具体的な言葉ででてくるようつっこんで聞く

時間の余裕をもって自然と回答が出るような雰囲気にする

あまり理由が出ない場合は「他にありませんか」と促す

問 10 子育て全般あなたが「もっとも大事にしていることを一つ」できるだけ具体的におきかせください → そのまま 一つのみ

問 11 その他に子育て全般あなたが大事にしていることがあれば、できるだけ具体的にいくつでもおきかせください → そのまま

問 12 回答したくない場合は断ってもいいことを再度説明した上で聞く

資料

「親と子の生活行動と健康に関する調査事業」聞き取り調査票

調査協力のお願い

最近、核家族化や小家族化、地域関係の希薄化など、様々な理由から子育てや親と子の生活環境が注目されております。また、健康づくりにおいては、食生活や生活習慣の改善が大きなテーマとなっております。とくに子どもの生活リズムや行動は親の生活行動にも関係し、家族の生活のあり方について真剣に検討することが必要となっていました。

この調査は、こうした家族の生活行動のうち「朝ごはん（朝食）のとり方」日常で行なっている「健康づくり」などについて、皆様の率直なご意見をうかがい、親と子の健康づくりに役立つ事業の企画や実施に役立つ情報をご提供いただくことを目的として行うものです。

ご回答者の皆様からいただいたご回答の結果はすべて統計数字として扱われ、個人のお名前が表に出ることは一切ありません。また調査結果はすべて学術研究の資料として使われ、他の目的のために利用されることはありません。

それでは、よろしくお願ひいたします。

「親と子の生活行動と健康に関する調査事業」研究企画委員会
委員長 斎藤進（日本子ども家庭総合研究所主任研究員）

【事業主体】

(財) 健康・体力づくり事業財団 調査情報部

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-25-5 虎ノ門34MTビル6階

この調査研究事業は、独立行政法人福祉医療機構の助成金により (財) 健康・体力づくり事業財団が実施しています。

実施 2007 年 月 日 ()

地区名 _____ サンプル番号 _____

時間 時 分 ~ 時 分

調査員名 _____

問1 家族構成を教えてください→ 1本人 2夫 3子ども 4祖父 5祖母 6その他()

問2 以下の家族について年齢と健康状態を教えてください

本人 () 才

健康・どちらかといえば健康・どちらかといえば健康ではない・健康ではない

夫 () 才

健康・どちらかといえば健康・どちらかといえば健康ではない・健康ではない

子ども () 人

第1子 () 才 男・女

健康・どちらかといえば健康・どちらかといえば健康ではない・健康ではない

第2子 () 才 男・女

健康・どちらかといえば健康・どちらかといえば健康ではない・健康ではない

第3子 () 才 男・女

健康・どちらかといえば健康・どちらかといえば健康ではない・健康ではない

第4子 () 才 男・女

健康・どちらかといえば健康・どちらかといえば健康ではない・健康ではない

第5子 () 才 男・女

健康・どちらかといえば健康・どちらかといえば健康ではない・健康ではない

問3 お宅の住居についてあてはまるものを、次にあげた中からお選びください。

1. 一戸建て

2. 集合住宅(マンション・アパートなど)

問4 あなたは、ご家族の方の現在の健康状態に不安や心配事がありますか。

1. 自分自身

4. 第二子

7. 第五子

2. 配偶者(ご主人)

5. 第三子

8. とくにない

3. 第一子

6. 第四子

問5 朝ごはん(朝食)は、週に何回程度食べていますか。

1. 毎日

4. 週に1~2回

2. 週に5~6回

5. ほとんどない

3. 週に3~4回

あなたご自身() 配偶者(ご主人)() 第一子()

問6 普段、朝ごはん(朝食)を「家族そろって」食べるるのは、週に何回程度ですか。

1. 每日

4. 週に1~2回

2. 週に5~6回

5. ほとんどない

3. 週に3~4回

問7 あなたは、ご家族の健康のために実施していることがありますか。あなたご自身、配偶者（ご主人）と第一子のためを思ってあなたがしていることを、具体的にいくつでもお聞かせください。

a.自分自身の健康のためにしていること （具体的に）

b.配偶者（ご主人）の健康のためにしていること（具体的に）

c.第一子の健康のためにしていること (具体的に)

＜あなたの子育てに関するご意見をお聞きします＞なんでもいいです

問8 お子さんの「食生活」に関するあなたのお考えを、できるだけ具体的にいくつでもお聞かせください。

問9 あなたは、お子さんに規則正しい生活習慣を身につけさせることは必要だと思いますか。

1. 必要だと思う
2. 必要だとは思わない

「そう思う理由」を、できるだけ具体的にお聞かせください。

問 10 子育て全般であなたが「もっとも大事にしていることを一つ」、できるだけ具体的にお聞かせください。

問 11 その他に子育て全般であなたが大事にしていることがあれば、できるだけ具体的にいくつでもお聞かせください。

問 12 差し支えない範囲でお答えください。

① あなたご自身と配偶者（ご主人）のご職業は、次のどれにあてはまりますか。

《定職を持っている方で事業主や役員の方》

1. 自由業、専門職（医者、弁護士など）

2. 個人経営主、農業主

3. 会社団体役員

《定職を持っている方で会社員／公務員／団体職員などの方》

4. 管理職（課長クラス以上）

5. 事務職（教員も含む）

6. 技術職（エンジニア、プログラマーなど）

7. 営業／販売職（セールスマン、販売員など）

8. 製造／労務職

9. サービス職（理容師、運転手など）

《家業手伝いの方》

10. 商店

11. 製造業（工場）

12. その他

《パート／アルバイトの方》

13. 事務職

14. 技術職（エンジニア、プログラマーなど）

15. 営業／販売職（セールスマン、販売員など）

16. 製造／労務職

17. サービス職（理容師、運転手など）

《定職を持っていない方》

18. 専業主婦

19. 無職

20. その他（具体的に）_____

あなたご自身（_____）

配偶者（ご主人）（_____）

② お住まいの場所から勤め先までの通勤時間はどれくらいですか。

1. 30分未満

4. 1時間30分～2時間未満

2. 30分～1時間未満

5. 2時間以上

3. 1時間～1時間30分未満

6. わからない

あなたご自身（_____）

配偶者（ご主人）（_____）

ご協力ありがとうございました。

第4部 調査事業のまとめ

第4部 調査事業のまとめ

齊藤 進(日本子ども家庭総合研究所)

最後に全体を通じて若干の特徴を整理し、まとめとする。

本調査事業から、明らかとなったことは、意外と家族は別々な形や内容の朝食であること、配偶者の朝食や友人関係などを把握していないという実態であった。朝食や生活行動などを通じてこれらの家族のあり方を考える必要性があることが示唆されている。

本調査事業の特徴は、インターネット調査を用いた点である。しかし、インターネット調査の特質を十分把握し、適切な利用がなければ、調査の信頼性は著しく低いものとなってしまう。今回のインターネット調査の計画については第5部に詳細に報告されているが、出来る範囲で有効なものとなるように努力してきた。パネルの性格が異なる2つから、該当するサンプルを選び、日記形式という従来にない方式で調査を実施している。そのため、パネル間の調査画面のアルゴリズムなど、関係者に多大のご努力をいただいた。その結果、計画標本と回収標本の関係やパネル間の回答比率なども詳細な情報が明らかになっている。この点で、従来に報告されていない調査データとしての意味は大きいと考えられる。

次に、親と子という単位で調査計画を考えてすすめた点である。32の親子のパターンを設定している点である。このことは、子どもの年齢（小中といった就学先と学年、性別）と親の就業状況（共働き、非共働き）を踏まえ、比較したいという意図があったからである。このため、該当サンプルが集まるのかといった心配もあったが、何とか収集できたと思われるが、残念なことに詳細な分析には、予算と時間が十分でなかった。

また、日記形式という形で、ある一週間の朝食を回答していただいたことである。あまり例のないデータであると共に、留め置き方式以上に正確なデータになった点である。詳細な分析が出来ず残念であるが、次年度に詳細分析を計画したいと考えている。

インターネット調査と聞き取り調査の両者を通じて、応諾率や回答率の高さから、この領域に対するこの世代の关心の高さが窺われた。聞き取り調査では、積極的に回答してくれた方や調査結果をぜひ知りたいという要望もあった。これらから、積極的な情報提供の必要性が示唆されている。

食生活に対する考え方や子育てで大事にしていることなど自由回答についての解析は、時間や予算の関係で出来なかつたが、次年度以降、ワードマイナーなどのテキストマイニングツールを使用して、詳細な解析をすすめ、有効な情報提供のあり方やその内容についても研究を企画したいと考えている。

謝辞：最後に調査の企画にご尽力いただいた調査企画委員、調査研究小委員の先生方、インターネット調査実施機関の方々、調査に回答してくださった皆様に深謝いたします。また、インターネット調査の実施に全面的に担当してくださった調査企画委員の大隅先生には特に感謝申しあげます。

(調査企画委員長 齊藤 進)

第5部 インターネット調査による調査計画の概要

第5部 インターネット調査による調査計画の概要

大隅 昇(統計数理研究所)

1. まえがき

調査環境の急速な変化が指摘されるようになって久しい。とくにインターネット調査 (Internet survey) あるいはオンライン調査 (online survey) は、その迅速性と廉価性から急速に普及した。市場調査分野などでは、これの利用度が急増している。しかし調査法としての課題は依然として多々あるのが実状である。社会調査（意識調査、世論調査）や統計調査での利用には十分な注意が必要であるが、本報告の主題から逸れた議論であり筆者は別の場で繰り返し述べてきたのでそれらに譲る ([11]、[12]、[13]、[14]、[15])。明らかなことはインターネット調査に限らずどのような調査法を用いても、それぞれに一長一短があり、すべてにわたり完全な調査法はないということである。換言すれば、客観的基準を設けずに調査法の優劣を議論することは非生産的であり、よってそれぞれの調査法の長所・短所を勘案し、調査目的に応じた適切な利用方法を工夫することが肝要ということに他ならない。

本調査の課題である「親と子の生活行動と健康に関する調査」(以下、「親子調査」と略記)では、当初の計画でインターネット調査を用いることが要件の一つとされている。また、ある特定な条件を満たす調査対象者から意見を集めることを目的としている（具体的には「母親で子供があり、第一子が小中学生、共働きを含む給与所得者」、詳細後述）。このような制約付きの対象者へのインターネット調査の利用は既に市場調査分野では一般化しているが、社会調査への適用には注意が必要である。主な理由は、得られた調査内容の「代表性」である。今回調査であれば、対象者の条件を設定し絞り込んでも、得られた調査結果が国内に在住の同じ条件を満たす人たちを的確に代表する意見であるとは限らないことがある。

しかし一方、上にあるような条件を設定した場合、統計的な意味での科学性を保証した調査対象を抽出したくとも実際には不可能に近い。その理由の一つは、統計的な標本抽出を設定できるような標本抽出枠（サンプリング・フレーム）の入手が困難ということにある。無尽蔵に調査経費を充てることが可能なら、何らかの方法で理想的な枠母集団を構成し標本抽出枠を設けることも可能だろうが、現実にはほとんど不可能である。つまり所与の調査経費と調査目的とを秤にかけてどの程度の「調査の品質」(quality of survey) を確保できるかを検討すること、そのトレードオフを念頭に調査設計を図ることが求められる。

2. 今回調査でインターネット調査を用いる利点 ー複数パネルを用いる理由ー

様々な課題を抱えるインターネット調査だが、調査目的によっては、その特性を理解したうえで利用することは大いに意味がある。統計的な意味で母集団や標本を想定し、標本抽出手順を厳密に守る調査とはならないものの別の利用場面もある。とくに今回調査のように「ある特定な集団と限定した調査対象」について「限定した話題、質問」への意見を求めるような場合は、得られる結果の代表性（誰をあるいはどの集団を代表する意見か）を犠牲にしても一つのケーススタディとしての知見は得られる。今回調査もこうしたカテゴリーに入る調査と考えればよい。今回の調査目的の概要については後ろに述べるが、ここではインターネット調査の特性を活かして、およそ以下のことを念頭に調査設計を行っている。

- 1) 公募型、非公募型^(†) の代表的な2パネルを用いること
 - 2) このことでパネル間の類似・差違を反映させた相対的な評価が可能となること
 - 3) 2パネルの調査実施の時点をそろえる、つまりほぼ同時的に行うことが可能である
 - 4) 2パネルで同じ質問文を用い、またほぼ同じ調査票を用いること
 - 5) この他、なるべく調査内容の等質化を図る、例えば回答制御機能をなるべく揃えるなどして測定誤差の低減を図ること
 - 6) 調査経費の節約（限られた調査経費の中での実施）
 - 7) 条件付の調査対象者の絞り込みを行う、いわゆる捕捉の難しい回答者を対象とすること
- (†) 公募型、非公募型については後ろに注釈を付けた。

なお調査票の質問文形式、回答の制御方式などについて、今回調査では、2パネルでまったく同じ条件に設定ができなかった部分がある。調査経費の関係もあり、用いた2パネルそれぞれの調査機関が用いる日常的な調査環境の設定条件があるので、これから逸れるような条件設定とはできず整合性保持ができなかった部分もある。しかし一方、この差異を勘案して、2パネルの調査結果の相対的な比較が可能となるという特徴もある。いずれにしても、インターネット調査は用いる登録者集団^(‡)（リソース、パネル）によって結果が異なるのが一般的であり、よって複数の調査機関を用いて相対的に比較することが重要な鍵となる。

（‡）登録者集団とは何かについては後ろに注釈を付けた。

3. 調査の概要

インターネット調査の利点の一つは、調査対象者を限定した、つまりある条件を満たす対象群について何かの意見を取得したいような場合に利用価値が高い。実際に市場調査などではインターネット調査の大半がこうした限定した条件で選出した対象者にアンケートを行うことが日常化している。

様々な特徴（長所・短所）を備えたインターネット調査はあるが、その特性を良く知つたうえで有効に活用できる（[6]、[7]、[11]）。これはインターネット調査に限ったことではないが、調査方法論の観点から考えて、すべてに満足のできる調査方式などは存在しないことも自明である。要は調査目的に応じた使い方の問題である。

今回の「親子調査」の調査設計は、あとで詳述するように、調査主体者の意向により、ある特定な調査対象者について意見を集めることが目的である。つまり意見の代表性よりも特定な集団の意見の集約を行うある種のケーススタディと位置づけたアプローチと考えるべきである。こうした目的のためには、インターネット調査を利用する利点がある。

ここではまず、この調査の主要な事項を要約し、続いてインターネット調査の具体的な利用方法や調査手順について述べる。

3. 1 調査の基本事項

まず、今回調査の基本的な事項について順に要約する。

（1）調査の目的（概要）

「親子調査」においては、調査方式としてインターネット調査を用いて以下を考察することが目的である。インターネット調査の特性を活かし、ある条件を満たす世帯を抽出して得られる調査対象者に対して調査を行う。このため、いわゆる非確率的アプローチとなり統計的な意味で回答者（回収標本）が誰を代表するかという代表性は満たされることはない。つまりここに集めた回答は、特定の人たちに尋ねたある意見分布と考えて考察することとなる。

（2）調査内容（概要）

これについては本調査報告書の別の報告（斎藤他）にあるので、ここでは簡単に主要項目をあげる。今回調査の方法は以下の2つからなる。まず、これについて述べる。

- | |
|-------------------------|
| (I) スクリーニング調査（あるいは事前調査） |
| (II) 本調査（日記形式調査と事後調査） |

（I）スクリーニング調査（事前調査）による調査対象者の抽出

まず「親子調査」の調査対象条件を満たす調査協力者を探す方法を検討せねばならない。事前に何か特定のリストや名簿があればそれを用いることがある。また、一般の世論調査のように、住民や国民を代表するような意見を求めるならば、住民基本台帳や選挙人名簿などを標本抽出枠（サンプリング・フレーム）として用いることも考えられる^(†)。

しかし今回調査のように特定な条件を満たす対象者に限定した調査では、こうした標本抽出枠の利用が難しい。そこでインターネット調査の登録者集団^(‡)（リソースやパネル）を保

有する調査機関を通じて、調査条件を満たす調査対象者を選ぶことから始めねばならない。ここでは、これに關した一連の操作を「スクリーニング調査（事前調査）」と呼ぶ。スクリーニング調査の調査対象者と具体的な手順については後述する。

(†) 住民基本台帳については、特定な目的以外には閲覧が禁止となるので、今後はこうした調査はほぼ不可能である。

(‡) 登録者集団：インターネットを介した調査では、目標母集団とすべきインターネット・ユーザの総数を知ることが難しいし、また適切な標本抽出枠を得ることも困難である。しかし実査にあたって、標本抽出枠に相当する調査対象者リストを、何らかの方法で作らねばならない。従来の統計的な意味での標本抽出枠とは若干性質が異なる調査対象者を考えるということで、ここでは登録者集団という用語を当てた。なお、登録者集団にはリソース、パネルがある（詳細は [22]、[23]）。

(II) 本調査（日記形式、事後調査）の実施

スクリーニング調査で取得した調査対象者（候補）に対して調査への参加の意向を確認した後、応諾を得た対象者に対して以下の調査を実施する。これをここでは「**本調査**」と呼び、その内容は「**日記形式**」による日替わり調査と、それを完了した後に行う「**事後調査**」とかなる。ここでは以下の内容について調査を行う（詳しくは調査票を参照）。

- 1) 日常の食生活、とくに朝食の摂取行動の調査（「日記形式」で1週間の食事行動を調査）
 - ① 朝食の摂取時間と摂取所要時間（母親、その配偶者と第一子）
 - ② 朝食の取得品数と食事内容
 - ③ 朝食の「主食」は何か
 - ④ 家族（母親、配偶者、第一子）で摂取した同じ食べ物
- 2) 事後調査として以下の事項に關連する質問を設けた。
 - ① 通勤時間
 - ② 子供数、就学学年の関係
 - ③ 住居形態
 - ④ 通勤、通学時間
 - ⑤ 運動習慣
 - ⑥ 地域ネットワーク関連（友人、知人、地域参加活動など）
 - ⑦ 健康に関する意識（回答者、配偶者と子供）
 - ⑧ 食生活（家族との朝食回数、外食の利用の有無）
 - ⑨ 情報源（携帯電話の利用状況、健康に関する情報取得源など）
 - ⑩ 自由回答として
 - ・ 子供、配偶者の「健康」への意見
 - ・ 子供、配偶者の「食生活」への意見
 - ・ 「生活習慣」への意見
 - ・ 「子育て」で重要と思うこと

スクリーニング調査、本調査とも、調査方式としてインターネット調査を用いる。

(3) 調査対象

調査対象者は、後述の2つの調査機関のパネル化された登録者集団の中から、今回調査の対象者としての条件を満たす有資格者を抽出し、このうち調査協力に応諾した者を対象として調査を依頼した。調査対象者の抽出方法などについての詳細は後述する。

(4) 調査方法

調査対象の抽出方法：非確率的サンプリング

調査方式（調査モード）：インターネット調査とくにWeb調査、一部に電子メールを利用

(5) 調査実施機関

株式会社 東京サーベイ・リサーチ
NEC ネクサソリューションズ 株式会社

(6) 用いた調査パネル

Hi-panel (ハイパネル)

企画：株式会社 博報堂
管理運営：株式会社 東京サーベイ・リサーチ内 Hi-panel 事務局
BIGLOBE カフェ（ビッグローブカフェ）
NEC ビッグローブ 株式会社

ここで、インターネット調査の分類区分に従うと、Hi-panel は非公募型^(†)であり、BIGLOBE カフェは公募型^(†)となる。また、Hi-panel は博報堂の専用調査パネルである。非公募型の登録者集団の実装化パネルが少ないこともあり、今回は博報堂の協力を得てこれを用いた。

なお以下の記述では、この 2 つのパネルを、Hi-panel は「パネル A」、BIGLOBE カフェは「パネル B」とそれぞれ呼称する。

(†) 公募型と非公募型

インターネット調査を「調査対象者の集め方」（登録者集団の作り方）を「公募型」「非公募型」に分けて考えることができる。「公募型」とはネット調査（ネットリサーチ）の呼称で市場調査で急速に普及した方式である。バナー広告などでインターネット上で勧誘・公募を行う方式であり登録したい人だけが登録する「自己参加型」（self-selection）である。この方式では統計的推論が難しいわゆる「非確率的アプローチ」（non-probability approach）となる。一方、登録者集団の集め方を一部改善した場合を、ここで「非公募型」と呼ぶ。「非公募型」では従来型の標本抽出法で調査対象者を集め、次に選んだ対象者に調査協力への合意・応諾をとって登録者集団とする。よって登録者の個々が誰をどのように選んだかが明らかであり統計的推論が部分的に可能な「確率的アプローチ」（probability-based approach）となる。これも調査協力に応諾しない人がいるから完全とは言えない。調査協力への応諾率がかなり低いので母集団の代表性には問題が残る。しかし応諾後の調査協力度は高いので回答率が高く計画標本に近い回収標本が得られる。また調査システム構築や維持管理に経費がかかるので安い調査とはならないが、従来型調査、例えば面接調査などに比べ安い経費で済むという利点もある。

(7) 調査実施期間^(‡)

1) スクリーニング調査（事前調査）：2007 年 1 月 12 日（金）～1 月 15 日（月）

調査開始：1 月 12 日、午前 4 時／調査終了：1 月 15 日、10 時

2) 本調査

全体の実施期間：2007 年 1 月 19 日（金）～1 月 29 日（月）

日記形式：2007 年 1 月 19 日（金）～1 月 25 日（木）

調査開始：1 月 19 日、午前 6 時

事後調査：2007 年 1 月 25 日（金）以降、1 月 29 日（月）の期間

調査開始：1 月 25 日、午前 6 時

最終期限：日記形式、事後調査とも 2007 年 1 月 29 日（月）、午前 10 時で打ち切り

(‡) 詳細は別途に表に要約した（表 1）

3. 2 登録者集団の構成

調査設計の始めの手続きとして、登録者集団を用意せねばならない。登録者集団については様々な分類区分があるが、ここでは 2 パネルそれぞれの登録者情報（つまり具体的には実施機関が保有する登録者リスト）を利用するを考える。一般にインターネット調査における登録者集団の詳細情報が開示されることはないが、多くの研究で、その基本属性にはそれぞれかなり差違があることが知られている。また、登録者の集め方による差違も認められている（例えば [13]、[14]）。今回調査で「公募型」「非公募型」それぞれ 1 調査機関を選定し、ここに委託した理由の一つはこれにある。

表2、3に見るように、2つのパネルには以下のような特徴がある。

- ① パネルAは非公募型、パネルBは公募型であること、つまり登録者の「集め方」に差違があること。
- ② 従って属性にも差違がある（例：男女性比率、既婚率）。
- ③ 2つのパネルの登録者の居住地域（登録時の居住地）が異なること。しかし登録者の多くは都市圏に集中している（他の多くのパネルに共通する特性でもある）。
- ④ 具体的には、パネルAは首都圏・阪神圏からエリア・サンプリングにより選んだインターネット利用者のうち登録応諾を得た者の集合であり、またパネルBは自由登録（自由参加型）で得た全国の登録者の集合である（注：しかし登録者の大半は都市圏に集中している）。
- ⑤ 登録者数にかなりの違いがある。つまりパネルBがパネルAよりもかなり登録者数が大きいこと。これは上の登録者の集め方に依存している。

このように、用いた2パネルの登録者特性には基本的には登録者の集め方の点で「公募型」「非公募型」という違いがあり、また属性に違いがある（インターネット調査に共通した一般的な特徴）。このことが回収結果にどう影響するかの吟味が必要となる。またインターネット調査を用いることから生じるパネル間の回答の偏りや変動を相対的に評価することも必要である。つまり2パネルを用いる理由は、性質の異なる2パネルを用いることで調査結果を少しでも客観化するための重要な手当である。

以下、順に実際の調査計画と調査設計について述べる。ただし紙幅の制約もあるので、調査の大要を要約し、またなるべく流れ図、図表などにまとめる形で示す。

表1 調査実施日程の要約

順序	日程 (2007年)	実施内容	利用パネル	
			パネルA (Hi-panel)	パネルB (BIGLOBE カフェ)
1	01月12日(金)	スクリーニング調査開始	開始：1月12日、午前4時 (2パネル同時点発信開始)	
2	01月13日(土)	↓		
3	01月14日(日)	↓		
4	01月15日(月)	スクリーニング調査終了	終了：1月15日、午前10時 (2パネル同時点発信開始)	
5	01月16日(火)	↓		
6	01月17日(水)	↓		
7	01月18日(木)	↓		
8	01月19日(金)	本調査開始	開始：1月19日、午前6時 (2パネル同時点発信開始)	
		↓	日記①	ここで日記形式調査票を発信する ^(注1) 日別に発信を行うのでいわゆる督促は行わない ^(注2)
9	01月20日(土)	↓	日記②	
10	01月21日(日)	↓	日記③	
11	01月22日(月)	↓	日記④	第1回督促実施
12	01月23日(火)	↓	日記⑤	
13	01月24日(水)	↓	日記⑥	
14	01月25日(木)	↓	日記⑦ 事後調査回答開始	第2回督促実施 事後調査の調査票オーブン 事後調査の調査票発信
15	01月26日(金)	↓		
16	01月27日(土)	↓		
17	01月28日(日)	↓		
18	01月29日(月)	本調査終了 (事後調査締切り)	終了：1月29日、午前10時 (2パネル同時点終了)	

(注1) パネルAは、1週間分をまとめて発信、日付を確認しながら回答入力する。

(注2) パネルBは、日々その都度の調査として個別に発信する。よって督促を行わない。

表2 パネルAの登録者集団の構成（単位：人）

性別	未婚	既婚 (子供あり)	既婚 (子供なし)	不明	行和	男女比 構成比率 (%)
男性	2,888	4,033 (25.5%)	623	353	7,897	50.0
女性	2,771	4,075 (25.8%)	727	333	7,906	50.0
列和	5,659	8,108 (51.3%)	1,350	686	15,803	100.0
登録者の集め方	非公募型 下記の東京首都圏、阪神圏からエリア・サンプリング、インターネット利用の有無を確認のうえ、個別に本人応諾を得て登録					
登録者の居住地域	都市圏（首都圏、阪神圏）の登録会員居住地 東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、大阪府、兵庫県、京都府					

(注1) 登録者総数は2007年1月10日時点の計数

(注2) 既婚についての比率は全登録者数に対する割合

表3 パネルBの登録者集団の構成（単位：人）

性別	未婚	既婚 (子供あり)	既婚 (子供なし)	不明	行和	男女比 構成比率 (%)
男性	240,102	297,993 (18.6%)	60,332	475,042	1,073,469	66.9
女性	144,093	114,175 (7.1%)	35,812	237,227	531,307	33.1
列和	384,195	412,168 (25.7%)	96,144	712,269	1,604,776	100.0
登録者の集め方	公募型 勧誘により、希望者が自由に登録、いわゆる自己参加型					
登録者の居住地域	全国の登録会員居住地					

(注1) 登録者総数は2007年1月24日時点の計数

(注2) 既婚についての比率は全登録者数に対する割合

(注3) 登録者の都道府県別情報はあるがここでは省略した

3.3 具体的な調査計画と実査の流れ

3.3.1 調査計画の概要

今回調査の主な事項を要約すると以下のようになる。

- ① 利用パネル（パネルA、パネルB）の登録者集団の確認
- ② スクリーニング調査の実施と調査対象者の抽出
- ③ 調査条件該当者の要約と計画標本の設定、つまり本調査を依頼する発信者数の確定
- ④ 本調査（日記形式、事後調査）の実施と回答の回収、回収標本の確定
- ⑤ 回収データの検収・検証作業、集計作業

これを調査手順として流れ図（図1）に示した。このような手順に従って実査を進めた結果、得られた調査内容と主な統計値が表4である。さらに実際に調査対象条件を満たし、計画標本作成の元とした対象者と実際の調査依頼発信数（つまり計画標本数）、得られた有効回答数（回収数）、回答率（回収率）の抜粋が表5である。

表4、5にみるように、2パネルともに最終的な回収率が高いが、これは後述するように回答協力の応諾を得た絞り込まれた対象者を相手としたからである。また、回答者へのポイント数の設定方法も回収率に影響したものと思われる。

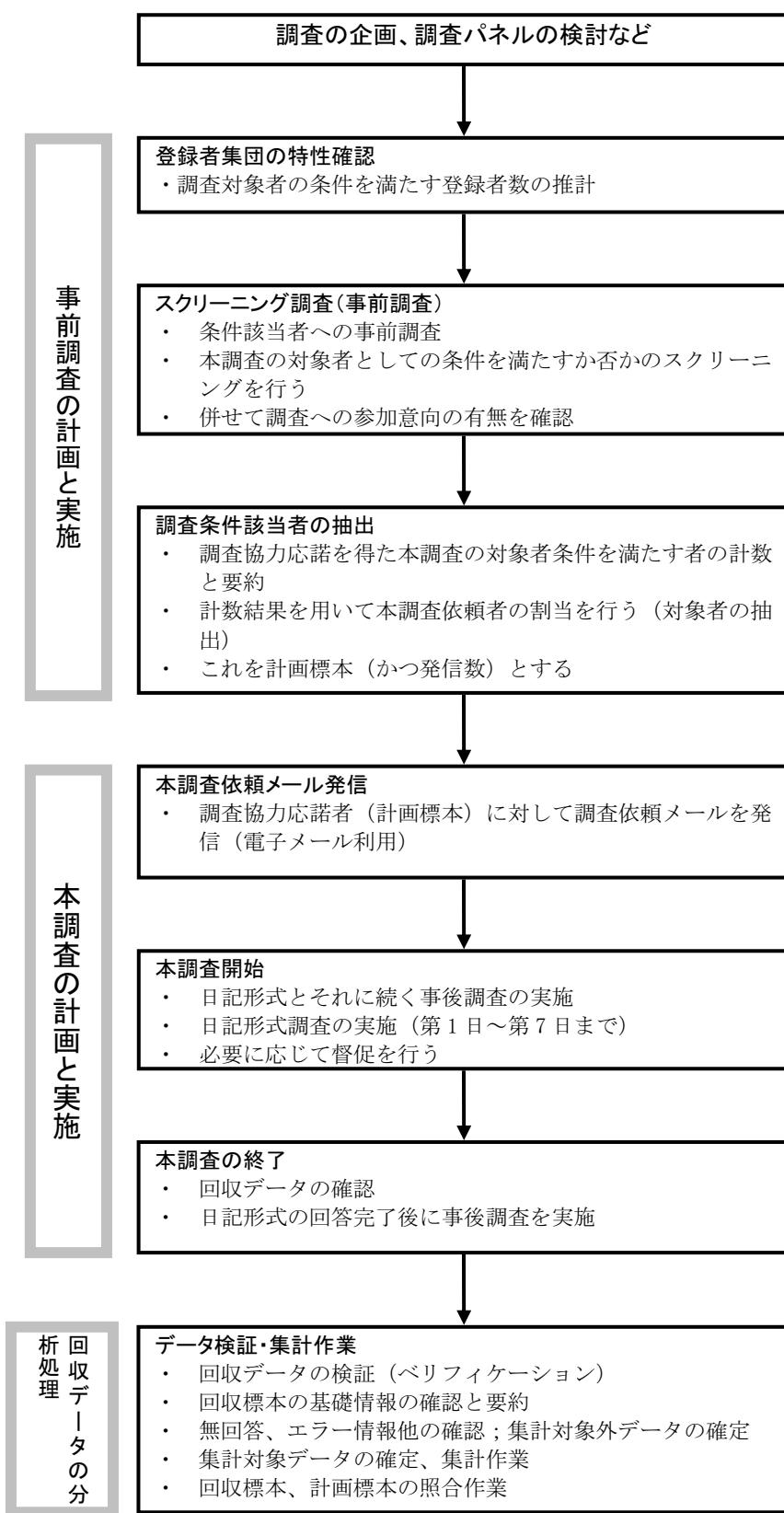


図1 調査の概要

表4 調査内容の要約

調査パネル名と その種類 内容	パネルA (Hi-panel)	パネルB (BIGLOBE カフェ)
	非公募型 ^(注1)	公募型 ^(注1)
登録者総数	15,803 (人) ^(注2)	約 1,604,776 (人) ^(注3)
条件を満たす登録者数	上記全登録者パネルの中から、条件を満たす登録者：2,065 (人) (推計) を事前調査対象者とした	上記全登録者パネルの中から、148,063 (人)、実際には「150,104 人」を事前調査対象者とした
調査対象地域 ^(注4)	都市圏（首都圏、阪神圏）の登録会員居住地 東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県 大阪府、兵庫県、京都府	全国の登録会員居住地
スクリーニング調査発信数 (実際の発信者数)	2,065 (人)	150,104 (人) ^(注3)
アクセスあり	1,144 (人) うち未着=24 (人) ^(注5)	10,005 (人) うち未着=32 (人)
うち条件を満たす者	753 (人)	1,551 (人)
ここで比例抽出による割り当てによるサンプリングで必要標本数を確保、計画標本の確定	計画標本数（発信数）を確定 380 (人) に依頼発信 日記・事後調査を依頼	計画標本数（発信数）を確定 625 (人) に依頼発信 日記・事後調査を依頼
事前調査実施日	2007年1月12日～1月15日 2007年1月15日～1月17日追加実施 ^(注6)	2007年1月12日～1月15日
本調査実施日	日記形式は2007年1月19日～1月25日、事後はその後	日記形式は2007年1月19日～1月25日 事後はその後
調査実施期間	期間：2007年1月19日～1月29日 2007年1月19日の6時（午前）開始 2007年1月29日の10時（午前）終了	期間：2007年1月19日～1月29日 2007年1月19日の6時（午前）開始 2007年1月29日の10時（午前）終了
督促（リマインダー）の有無	2回実施 (2007年1月22日、1月25日)	調査環境の設定条件から、日記形式の依頼発信は毎日行った。よって督促に相当する手当は行っていない。

(注1) 「公募型」「非公募型」の説明は本文中を参照。

(注2) この登録者数は、2007年1月時点の情報。

(注3) この登録者数は2007年1月時点の情報、この調査ではその前に計数した数字を用いで設計を行った。

(注4) 調査対象地域の登録者情報はここでは省略する。

(注5) 「未着」とは、発信した調査案内がその相手に到達しなかったケースをいう。

(注6) 一部に配信漏れがあったためこの期間に追加実施した。

(注7) いわゆる無回答・回収不能に関する情報（理由、発生件数）は省略した（実際は取得している）。

表5 調査対象者数、計画標本数(有効発信数)、回収数(率)他の要約（単位:人）

項目	パネルA	パネルB	2パネルの和
①本調査対象者数（調査協力の意向者）	753	1,551	2,304
②計画標本数（有効発信数）	380	625	1,005
③本調査参加者（アクセスあり）	358	608	966
④うち、「日記形式+事後」調査に完答	323	567	890
⑤うち、「日記形式+事後」調査に回答不適（除外）	35	41	76
⑥本調査非参加者（アクセスなし）	22	17	39
⑦データ検証時に除外処理：クリーニング	1	56	57
⑧回収数	322	511	833
⑨有効回答回収率（%）	84.7	81.8	82.9

(注1) ②=③+⑥、③=④+⑤、⑧=④-⑦

(注2) ここで、⑨有効回答回収率は、②計画標本数（有効発信数）に対する割合

3.3.2 実査の流れ 一スクリーニング調査と本調査の関係ー

ここで、スクリーニング調査（事前調査）と本調査の具体的な方法と実査手順について述べる。図2はこの一連の手順を示したものであり、これに沿って以下に説明する。

まず登録者集団全体から、今回調査で必要となる下記の条件を満たす調査対象者の候補を抽出する。

- ・ 第一子が小中学生の母親
- ・ 核家族（二世代世帯）
- ・ 給与所得世帯

これに加えて、

- ・ 共働き・非共働きが明らかであること（とくに「共働き」が把握できること）
- ・ 子どもの人数（一人っ子か複数の子どもがいるか）
- ・ とくに第一子の属性（性別、就学年次）
- ・ 配偶者情報（あり、なし）

などの条件を設ける。この条件を満たす調査対象者を、スクリーニング調査により前述の2つのパネルから抽出する。

(1) スクリーニング調査の方法

まず、スクリーニング調査の設計と手順は以下の通りである。

① パネルの登録者情報の要約整理と調査対象候補の確定

調査を実施する直近時点での登録者集団の特性、とくに属性情報を整理する。ここで、上の調査対象者条件を満たす者を始めから厳密に抽出することは困難である。そこで実際には、2パネルについて、以下の条件を満たす対象者を登録者集団上に想定した（いわゆる枠母集団に相当する集団と考えればよい）。なお登録者集団全体の構成については既に表2、3に要約した。

パネルA：2世代世帯で第一子が小中学生の既婚女性：2,065（名）
パネルB：20歳～69歳の既婚女性全員：150,104（名）

②スクリーニング調査の調査実施

次にスクリーニング調査用の調査票を用いて、上記の対象者から条件を満たす調査対象者の候補を抽出する。この抽出時の判定の流れを具体的に記すと図3のようになる。この判定に従って条件を満たした者だけをスクリーニングする。スクリーニング調査に参加した回答者が判定のどこかで条件を満たさない場合、その条件判定を行った段階で調査画面が完了し、スクリーニング調査を終了する。実はこうした判定の反復を行ないながら条件に合った対象を抽出するときに、インターネット調査では「回答制御機能」を利用することが可能である（インターネット調査の特徴の一つ）。今回のスクリーニング調査でもこの機能を用いて回答者に違和感を与えることなく、調査目的に合った条件の対象者だけを抽出することができる。調査対象条件を満たし最後まで残った人が条件該当者であるから、次に続く本調査への参加意向を尋ねスクリーニング調査を終える。なお、このスクリーニング調査への参加者にはポイントを発行する。

③スクリーニング調査後の処理と得られた結果

こうして得られた、今回調査の対象者条件を満たし、また次に続く本調査への参加協力を応諾した対象者を整理する。これが今回調査の本調査への参加意向者の総数に相当し、2パ

ネルで、以下のようになった（合わせて2,304人、表5も参照）。

パネルA (Hi-panel) : 753 (人)
パネルB (BIGLOBE カフェ) : 1,551 (人)

④計画標本の設定（割当）

こうして集まった条件を満たす調査対象者の属性情報を整理要約する。ここでは、「性別（2カテゴリー）」「子供の就学年（小学生・中学生の9カテゴリー）」「共働き・非共働き（2カテゴリー）」、以上を合わせた「36パターン（層）」に従ってスクリーニング調査で得られた情報を層化し集計する（表6、9）。これに基づき、実際に本調査を依頼する「計画標本」を設定する。本来はこの対象者全員に対して本調査を行うことが望ましいが調査経費の制約を考慮し、ここで計画標本の「割当」を行った^(†)。すなわち、2パネルの「見込み回収数」を300（サンプル）と想定し、またそれぞれのパネルの調査環境下で日常的に行っている調査経験で得た「見込み回収率」を目安として計画標本を決める。2つのパネルにおける具体的な割当操作はそれぞれ以下のように行った。

なおここで、見込み回収率を2パネルで変えた理由は、それぞれのパネルの登録者数の大きさが異なること（パネルBがパネルAよりずっと大きい）、パネルの日常的な回収見込み数（率）の経験則に照らしたこと、にある。

（†）割当あるいは割付を行う操作をクオータ法（quota method）ということがある（ただし厳密な意味でのクオータ法の定義ではない）。ここで用いた方式もそれの一つの変形バージョンと考えて良い。この操作自体が非確率的アプローチである。

■パネルAの場合

- 1) まず見込み回収数を $y = 300$ (人) と決める。
- 2) 次に見込み回収率を 80%と想定し、見込みの発信数を $x \doteq 300 \div 0.8 = 375$ (人) と推計する。
- 3) 「性別×就学年×（共働き・非共働き）」＝「2×9×2=36（層）」で調査対象資格者となった753(人)を層化する。（表6を参照）
- 4) この753(人)を各層の頻度（人数）の比率（表7）に合わせて割り当てる。端数が出るのでこれを整数として丸めて調整する。これで得られる計画標本数、つまり発信数を $x = 380$ (人) とする。
- 5) この380(人)を、各層内から抽出する。このとき、系統サンプリングを用いる。ここでは、各層内で乱数を使って先頭抽出点を無作為に定め、あとは系統的に等間隔抽出^(†)を行う。もし必要抜き取り数がその層内でとぎれた場合はラウンド・ロビン方式でその層内の先頭に戻って抜き取る。（表8を参照）

（†）全体のリスト内の対象者の並びがランダムであれば等間隔抽出でも無作為抽出となる。

■パネルBの場合

- 1) まず見込み回収数を $y = 300$ (人) と決める。
- 2) 次に見込み回収率を 50%と想定し、見込みの発信数を $x \doteq 300 \div 0.5 = 600$ (人) と推計する。
- 3) 「性別×就学年×（共働き・非共働き）」＝「2×9×2=36層」で調査対象資格者となった1,551(人)を層化する。（表9を参照）
- 4) この1,551(人)を各層の頻度（人数）の比率（表10）に合わせて割り当てる。端数が出るのでこれを整数として切り上げて丸めて調整する。これで得られる計画標本数、つまり発信数を $x = 625$ (人) とする。
- 5) この625(人)を、各層内から抽出する。このとき、無作為抽出を用いる（エクセル関数の乱数を利用）。（表11を参照）

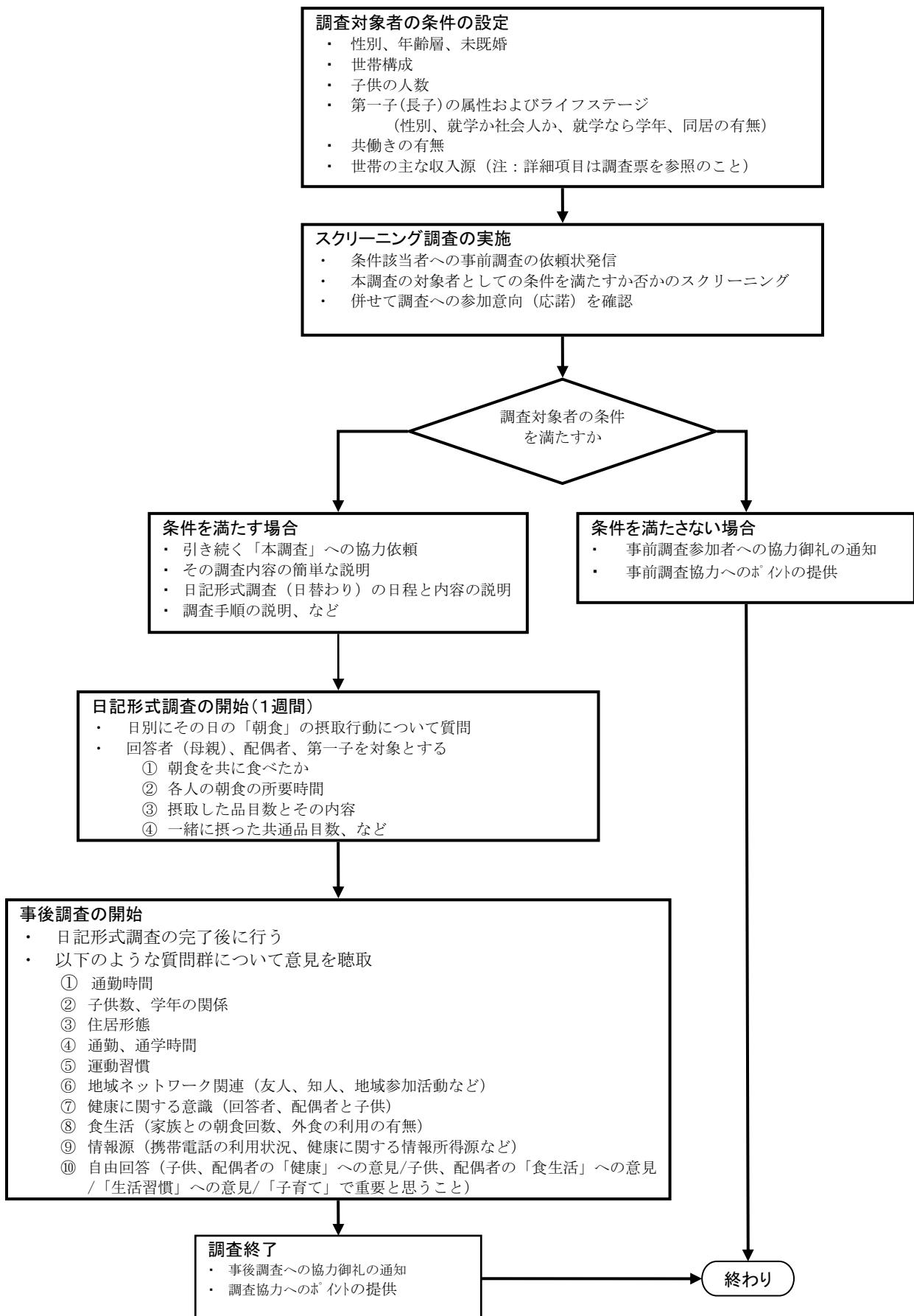


図2 実査の流れ:スクリーニング調査(事前調査)、本調査(日記形式、事後調査)の関係

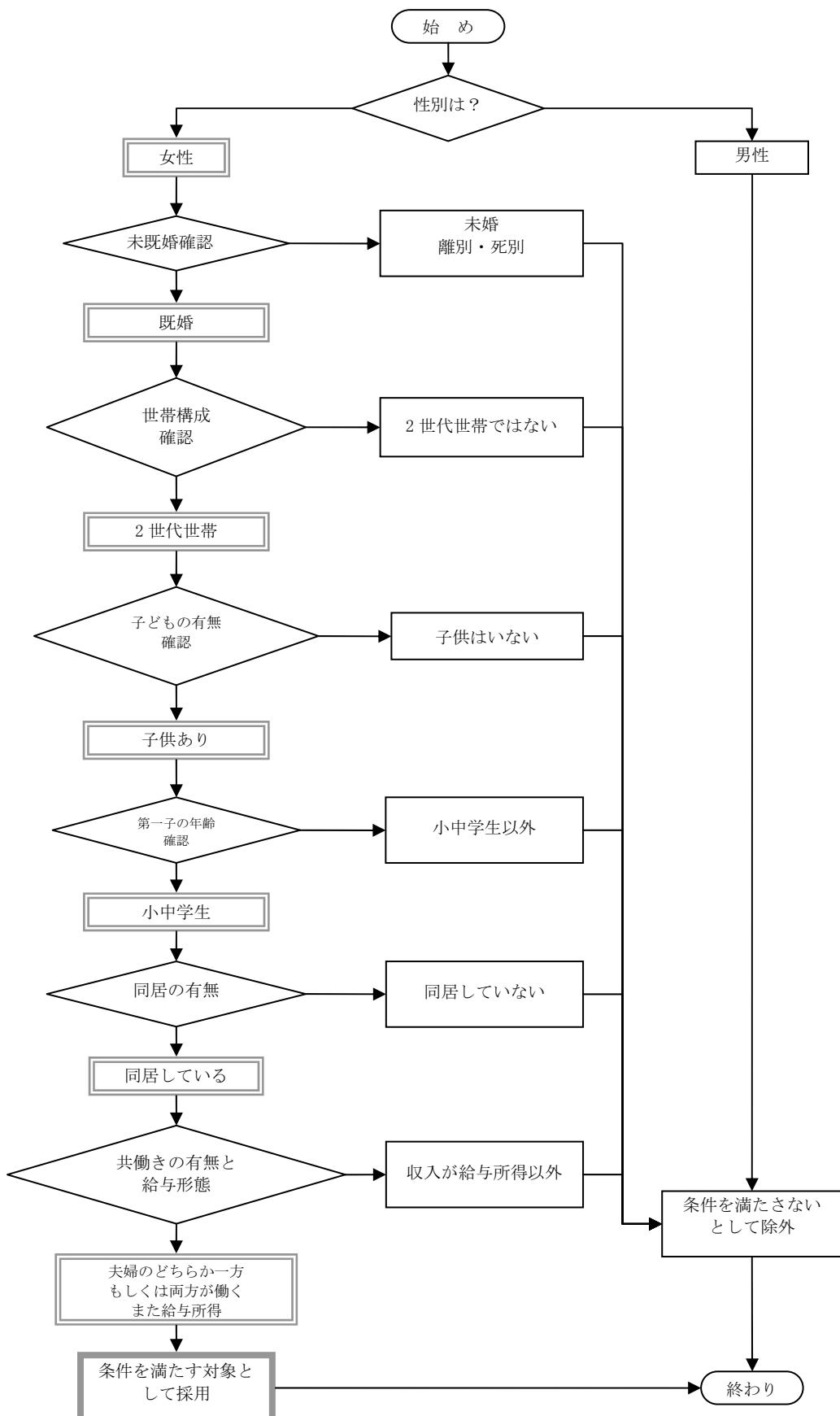


図3 スクリーニング調査による調査対象者の抽出方法

表6 パネルAの本調査協力意向者数(単位:人)

	合計	共働き			非共働き		
		小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学3年生	75	45	23	22	30	17	13
中学2年生	84	47	24	23	37	17	20
中学1年生	79	51	27	24	28	18	10
小学6年生	89	40	17	23	49	24	25
小学5年生	80	32	17	15	48	27	21
小学4年生	93	42	15	27	51	26	25
小学3年生	94	37	20	17	57	22	35
小学2年生	79	23	12	11	56	36	20
小学1年生	80	18	13	5	62	32	30
合計	753	335	168	167	418	219	199

表7 パネルAの本調査協力意向者の構成比:753名に対する構成比(単位:%)

	合計	共働き			非共働き		
		小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学3年生	10.0	6.0	3.1	2.9	4.0	2.3	1.7
中学2年生	11.2	6.2	3.2	3.1	4.9	2.3	2.7
中学1年生	10.5	6.8	3.6	3.2	3.7	2.4	1.3
小学6年生	11.8	5.3	2.3	3.1	6.5	3.2	3.3
小学5年生	10.6	4.2	2.3	2.0	6.4	3.6	2.8
小学4年生	12.4	5.6	2.0	3.6	6.8	3.5	3.3
小学3年生	12.5	4.9	2.7	2.3	7.6	2.9	4.6
小学2年生	10.5	3.1	1.6	1.5	7.4	4.8	2.7
小学1年生	10.6	2.4	1.7	0.7	8.2	4.2	4.0
合計	100.0	44.5	22.3	22.2	55.5	29.1	26.4

表8 パネルAの割当による計画標本の構成(単位:人)

	合計	共働き			非共働き		
		小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学3年生	39	23	12	11	16	9	7
中学2年生	43	24	12	12	19	9	10
中学1年生	40	26	14	12	14	9	5
小学6年生	45	21	9	12	24	12	12
小学5年生	41	17	9	8	24	13	11
小学4年生	47	22	8	14	25	12	13
小学3年生	47	19	10	9	28	11	17
小学2年生	39	12	6	6	27	17	10
小学1年生	39	10	7	3	29	15	14
合計	380	174	87	87	206	107	99

表9 パネルBの本調査協力意向者数(単位:人)

	合計	共働き			ご主人のみ働いている			あなただけが働いている		
		小計	男子	女子	小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学3年生	167	69	40	29	97	49	48	1	0	1
中学2年生	158	72	45	27	86	45	41	0	0	0
中学1年生	150	60	23	37	90	43	47	0	0	0
小学6年生	174	84	41	43	88	43	45	2	0	2
小学5年生	203	77	46	31	124	69	55	2	1	1
小学4年生	202	69	30	39	131	71	60	2	1	1
小学3年生	170	65	34	31	105	42	63	0	0	0
小学2年生	172	53	28	25	119	66	53	0	0	0
小学1年生	155	50	23	27	103	50	53	2	1	1
合計	1551	599	310	289	943	478	465	9	3	6

表 10 パネル B の本調査協力意向者の構成比:1,551 名に対する構成比(単位:%)

合計	共働き			ご主人のみ働いている			あなただけが働いている		
	小計	男子	女子	小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学3年生	10.8	4.4	2.6	1.9	6.3	3.2	3.1	0.1	0.0
中学2年生	10.2	4.6	2.9	1.7	5.5	2.9	2.6	0.0	0.0
中学1年生	9.7	3.9	1.5	2.4	5.8	2.8	3.0	0.0	0.0
小学6年生	11.2	5.4	2.6	2.8	5.7	2.8	2.9	0.1	0.0
小学5年生	13.1	5.0	3.0	2.0	8.0	4.4	3.5	0.1	0.1
小学4年生	13.0	4.4	1.9	2.5	8.4	4.6	3.9	0.1	0.1
小学3年生	11.0	4.2	2.2	2.0	6.8	2.7	4.1	0.0	0.0
小学2年生	11.1	3.4	1.8	1.6	7.7	4.3	3.4	0.0	0.0
小学1年生	10.0	3.2	1.5	1.7	6.6	3.2	3.4	0.1	0.1
合計	100.0	38.6	20.0	18.6	60.8	30.8	30.0	0.6	0.4

表 11 パネル B の割当による計画標本の構成(単位:人)

合計	共働き			ご主人のみ働いている			あなただけが働いている		
	小計	男子	女子	小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学3年生	68	28	16	12	39	20	19	1	0
中学2年生	63	29	18	11	34	18	16	0	0
中学1年生	60	24	9	15	36	17	19	0	0
小学6年生	70	33	16	17	35	17	18	2	0
小学5年生	82	31	18	13	49	27	22	2	1
小学4年生	82	28	12	16	52	28	24	2	1
小学3年生	69	27	14	13	42	17	25	0	0
小学2年生	68	21	11	10	47	26	21	0	0
小学1年生	63	20	9	11	41	20	21	2	1
合計	625	241	123	118	375	190	185	9	3

(注) ここで「あなただけが働いている」は以後の分析では「非共働き」に入れた。

以上で発信対象とする計画標本が定まるので、これに対して「本調査」を行う。以下が具体的な「計画標本数」でありまた実質的な本調査依頼の「発信数」である。

パネル A (Hi-panel) : 380 (人)
パネル B (BIGLOBE カフェ) : 625 (人)

なお後述する分析上で必要となる 32 パターンとこの計画標本の関係は以下のように対応する。ここで 32 パターンとは以下の項目とカテゴリーから作られる類型のことである。

- | |
|---|
| ・ 第一子の性別:「男子」、「女子」の 2 カテゴリー |
| ・ 第一子の学年:「小学 1~2 年生」、「小学 3~4 年生」、「小学 5~6 年生」、「中学生」の 4 カテゴリー |
| ・ 夫婦の就業状況:「共働き」か「非共働き」かの 2 カテゴリー |
| ・ 子どもの数:「一人っ子」か「子どもが複数」かの 2 カテゴリー |

上にみたように計画標本作成時の割当操作では「子どもの数」の項目は用いていない。これを含めると層化の組合せ(層の総数)が多くなり(36 パターン×2=72 パターン)、一方「学年」の項目を上の 4 カテゴリーとすると、のちに学年の細分化ができない恐れもある。いずれにしても調査対象条件を満たす者が多数捕捉できるとは限らないので、事前の割付では「共働き・非共働き」と「学年」項目を優先し「子どもの数」は割付には用いず、スクリーニング調査の後に、改めて学年のカテゴリーを圧縮し「共働き・非共働き」を加えた 32 パターンで分析を行う(注: 割付と分析に用いる 32 パターンとは異なる層化で行ったということ)。

以上のことから「回収後の標本」については、まず上述の表から以下の 16 パターンにブレイクダウンし(表 12、表 13)、これに「子どもの数」を個々に確認し、さらに子どもが「一人っ子」か「複数」かにより 32 パターンと再集計することとした(表 14~表 17)。

表 12 パネル A の 16 パターンの度数表(単位:人)

	合計	共働き			非共働き		
		小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学生	122	73	38	35	49	27	22
小学 5~6 年生	86	38	18	20	48	25	23
小学 3~4 年生	94	41	18	23	53	23	30
小学 1~2 年生	78	22	13	9	56	32	24
合計	380	174	87	87	206	107	99

表 13 パネル B の 16 パターンの度数表(単位:人)

	合計	共働き			非共働き		
		小計	男子	女子	小計	男子	女子
中学生	191	81	43	38	110	55	55
小学 5~6 年生	152	64	34	30	88	45	43
小学 3~4 年生	151	55	26	29	96	46	50
小学 1~2 年生	131	41	20	21	90	47	43
合計	625	241	123	118	384	193	191

表 14 パネル A:本調査(事後調査時、回収標本)(単位:人)

合計	共働き				非共働き				
	一人っ子		子ども複数		一人っ子		子ども複数		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
中学生	107	6	4	22	29	5	5	21	15
小学 5~6 年生	70	3	4	13	7	2	5	21	15
小学 3~4 年生	80	3	4	13	13	1	6	18	22
小学 1~2 年生	65	3	-	3	5	8	6	22	18
合計	322	15	12	51	54	16	22	82	70

表 15 パネル A:本調査(事後調査時、回収標本)(単位:%)

合計	共働き				非共働き				
	一人っ子		子ども複数		一人っ子		子ども複数		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
中学生	33.23	1.86	1.24	6.83	9.01	1.55	1.55	6.52	4.66
小学 5~6 年生	21.74	0.93	1.24	4.04	2.17	0.62	1.55	6.52	4.66
小学 3~4 年生	24.84	0.93	1.24	4.04	4.04	0.31	1.86	5.59	6.83
小学 1~2 年生	20.19	0.93	0.00	0.93	1.55	2.48	1.86	6.83	5.59
合計	100.00	4.66	3.73	15.84	16.77	4.97	6.83	25.47	21.74

表 16 パネル B:本調査(事後調査時、回収標本)(単位:人)

合計	共働き				非共働き				
	一人っ子		子ども複数		一人っ子		子ども複数		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
中学生	153	6	11	27	17	13	8	32	39
小学 5~6 年生	127	12	7	21	18	10	6	26	27
小学 3~4 年生	123	10	6	13	12	12	12	29	29
小学 1~2 年生	108	8	3	7	12	10	13	32	23
合計	511	36	27	68	59	45	39	119	118

表 17 パネル B:本調査(事後調査時、回収標本)(単位:%)

合計	共働き				非共働き				
	一人っ子		子ども複数		一人っ子		子ども複数		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
中学生	29.94	1.17	2.15	5.28	3.33	2.54	1.57	6.26	7.63
小学 5~6 年生	24.85	2.35	1.37	4.11	3.52	1.96	1.17	5.09	5.28
小学 3~4 年生	24.07	1.96	1.17	2.54	2.35	2.35	2.35	5.68	5.68
小学 1~2 年生	21.14	1.57	0.59	1.37	2.35	1.96	2.54	6.26	4.50
合計	100.00	7.05	5.28	13.31	11.55	8.81	7.63	23.29	23.09

(2) 本調査の方法

スクリーニング調査と割当操作で得られた「**計画標本**」に対して本調査を行う。本調査は「**日記形式調査**」と「**事後調査**」とからなる。日記形式の調査とは、土日を挟む1週間にわたり「食生活行動（とくに朝食摂取行動）」を日替わりで尋ねる調査である。なお、平日と週末（土日）との朝食の摂取行動に違いがあると思われる所以、これを考慮した日程設定を行った（表1を参照）。

また事後調査は、日記形式の調査を終えたあとに、健康意識、食生活、健康の情報取得源、地域ネットワークなどの質問についての意見を調べる（これらについては添付の調査票を参照、また後述の調査票の説明の項を参照すること（表19）。

3.3.3. 調査主体と調査客体の関係 一調査実施機関と調査対象者との授受一

ここで、調査主体である実施機関と、調査客体である登録者とそのパネルから抽出された調査対象者とくに回答者との間で、実際に行われる調査進行状況を図4に要約した。

基本的にインターネット調査は「**間接的な自記式の回答方式**」となるので、調査対象者に回答の意思がなければ回収不能票となる。この点で間接的な自記式方式である郵送調査などに類似する。しかし非常に異なる特性として「オンラインを利用することによること」で生じるインターネット調査特有の以下のような特徴がある。とくに、実施機関と回答者側との間に生じる種々の非標本誤差（non-sampling error；調査不能、無回答など）に注意せねばならない（[1]、[2]、[3]、[8]）。

- ・ 調査対象者に回答の意思があっても回答できないことがある。例えば調査に不慣れで回答方法の操作が分からず、回答入力操作をミスしたなど、主にその人のコンピュータ・リテラシーの問題から生じる事象。
- ・ 調査票にアクセスし、始めの依頼文や挨拶文を読んでも調査内容に関心がなく、それ以上は回答を進めない、つまり「アクセスのみ」で終わる人がある。従来調査の回答拒否に類似の行動である。
- ・ 調査依頼発信が「未着」となる場合。いろいろな理由が考えられる。例えば対象者が保有の電子メール・アドレスが調査時点で、別のアドレスに変更されたような場合。実施機関側の登録者情報の管理が十分でなく、また登録情報の変更情報取得の仕組みが十分に整備されない場合に生じる（例えば、登録者情報が陳腐化しパネル疲労している）。登録者が利用しているプロバイダー他のサーバ管理者の不手際で回線に不都合が生じた場合などもある。
- ・ オンラインの回線上の不都合や調査機関側のコンピュータの管理の不備から生じる、回答者には直接は関係しない理由による取得不能（例えば、サーバのダウン）。

つまり、インターネット調査では調査主体、客体のいずれの側にもデータ収集上の様々な事象が起こりうると考えねばならない。実際に今回調査でも、最終的に調査依頼を行った対象者の全員が回答してはいない。またスクリーニング調査時には依頼メールが「未着」となったケースが出ている（表18参照）。

このように、インターネット調査の場合、従来型調査以上に複雑になっており単純に無回答誤差（non-response error；「調査不能」、「回答拒否」など）あるいは非標本誤差として括れないことがある。こうした事象は看過できないことであり今後の検討課題でもある（[11]、[13]）。少なくとも調査結果の報告時にはこれらの関連情報を添付すべきである。なお、スクリーニング調査、本調査ともに配信と回収の関係はおおよそここに示した図4のような手順で進行する。

3.4 調査票の設計と留意事項

次に調査票の構成と設計上の留意事項について述べる。調査票の設計は回答者の回答行動に影響することは多くの研究で知られている（[1]、[2]、[21]、[22]）。とくにインターネット調査の場合は従来型調査以上に調査誤差（survey errors）とくに測定誤差（measurement error）、無回答誤差との関連で慎重な検討が必要である。適当に調査票や質問文を作成すれば済むことではなく、電子的処理・操作が加わるので、調査方法論の知識だけでは対応できない。換言すると、調査票、質問文の作り方によって回答結果が影響を受けることは明らかである。

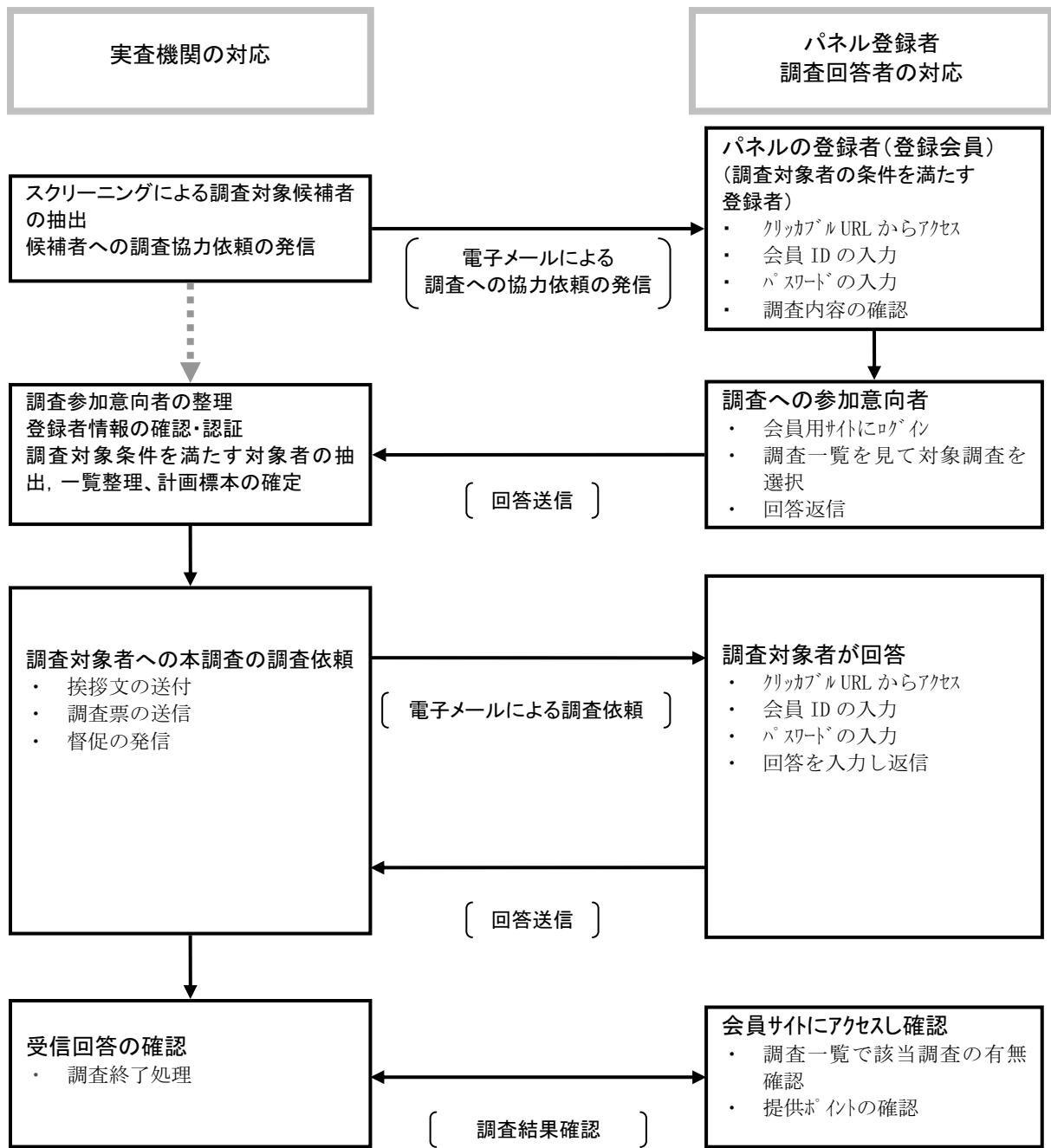


図 4 依頼配信から回収までの流れ(要約)－実施機関と調査回答者の関係－

インターネット調査では、回答者は自身の保有する PC (パーソナル・コンピュータ) 上で、調査機関から送信された電子調査票の質問文に回答を入力する「間接的な自記式」となる。このことから、同じ自記式である P&P 方式 (paper and pencil procedure : 質問紙と筆記具による調査方式) のように調査票を郵送や宅配で送付して回答票を返送してもらう郵送調査方式などに類似するが、その特性は異なるものである (例えば [19])。なお電子調査票を用いることにより生ずる様々な設計上の留意点については、とくに P&P 方式とは異なる設計上の特性については多くの研究があるのでこうした資料を参照されたい ([6]、[7]、[16])。

表 18 2 パネルの調査結果の要約

調査の形態	内容	パネル A	パネル B
スクリーニング調査 (事前調査)	パネル登録者数の確認	15,803 (人) (2007年1月10日時点)	1,604,776 (人) (2007年1月24日時点)
	発信対象	2世代世帯で第一子が小中学生の既婚女性	20歳～69歳の既婚女性全員
	調査条件該当者	2,065 (人)	150,104 (人)
	案内メール発信数 (人) ^(注1)	2,065	150,104
	アクセスあり (うち、回答完了数)	1,144 1,144	55.4% 55.4%
	アクセスなし (うち、メール未着)	921 (24)	44.6% (1.2%)
			140,099 (32)
本調査	調査対象者条件に合致 かつ本調査協力への意向ありの者 (本調査対象者確定数)	753	36.5%
	計画標本数 (有効発信数)	380	50.5%
	本調査参加者 (アクセスあり) (うち「日記形式+事後」調査に完答) (うち「日記形式+事後」調査に完答不適で除外)	358 (323) (35)	(94.2%) (567) (41)
	本調査非参加者 (アクセスなし)	22	(5.8%)
	データ検証時に除外処理	1	17 56
	回収数 (有効回答回収率 : %)	322 (84.7%) (380サンプルに対する比)	511 (81.8%) (625サンプルに対する比)

(注1) 調査計画時点におけるパネルの登録者総数

(注2) 発信数 (計画標本数相当) の算出方法は別記

(注3) 表 8 も参照のこと

今回調査では、こうした事情を勘案して、2つの調査パネル（パネルA、パネルB）を用いることとした。また、調査票と質問文の設計は、以下の方針で進めることとした。

- ① 調査票の形式をなるべく揃えること。具体的には、質問文を始め、質問形式としてラジオ・ボタン、チェックボックス、テキスト・フィールドやテキスト・ボックスなどの配置、大きさなどはなるべく揃える。
- ② 回答制御方式をなるべくそろえること。
- ③ 調査票には改ページ機能を設定し、調査進行の進捗情報を回答者に視覚的に見せる進捗バー（プログレスバー）あるいはそれに相当する進捗確認アイコンを設けた。
- ④ マルチメディア機能（音声、静止画・動画など）、やや特殊な機能は極力用いない（測定誤差の介入の可能性が大きい）。
- ⑤ 調査票や質問文形式を揃えることで、測定誤差の介入をできるだけ避けるように工夫する。

調査票、質問文の形式や内容を揃えることはインターネット調査に限らず重要な操作である。これにより、調査内容の等質化が図られ測定誤差の介入状況が読み取り易くなる。例えば、同じ内容の質問文に異なる質問形式を用いたとき、回答結果の差異が本当に回答の違いであるのか、あるいは質問形式を変えたことの影響なのかが見えなくなる。典型的な例として同じ選択肢型質問を「プルダウン・メニュー」形式により、メニュー内の選択肢数を変え、また選択肢の表示順序を逆にすると、回答比率の出方が異なるといった実験調査報告もある（[20]、[22]）。

このような理由で、調査票と質問文の設計では“2パネル間の差異をなるべく抑えるように努めた”。しかしそれでもなお、それぞれの実施機関が日常的に用いている方式が異なるという制約から“まったく同じ条件に設定はできなかった”。これが調査結果に若干影響したと思われる（後述）。

3.4.1 調査票と質問文

実際に用いた質問文と調査内容、質問文の形式、質問数などを表19に要約した。今回調査で用いた調査票は、2パネルについてそれぞれ本報告書の後ろに添付した。これにみるように、質問文をはじめ質問形式のレイアウトをなるべく揃えたとはいえたが、まったく同じ形式にはなっていない。なお、調査ボリュームは、通常の調査に比べて必ずしも多くはないので回答

者への作業負担はさほど重くはない。具体的には、スクリーニング調査は3~5分程度、日記形式は約10分、事後調査は約20分の回答所要時間を想定した。

なお、今回調査は既述のように、ある特定の条件を満たす人を調査対象としている。このことから「職業」を問う属性項目の選択肢に若干工夫を施した。そもそも職業の選択肢については様々なオプションがあり、調査目的によっても様々である。今回調査ではこうした既存の職業選択肢では十分ではないと判断し、「中区分」を設け、次にそれを細分した「小区分」を用意した（調査票を参照）。

3.4.2 回答制御の方法

前述のようにインターネット調査の特徴の一つに「回答制御」機能がある。回答者には実際に何が行われているか画面上では明示的には見えないが、実際には、回答の誘導に近いこともできなくはない。よってこれを行うことについては、とくにどの程度の回答制御を組み入れるかについては様々な議論がある。明らかなことは、調査員による直接面接法や訪問留置法、あるいは郵送法による自記式方式などの従来型調査方式とは異なる電子的操作が行われることがあるということである。もちろん、回答制御機能をすべて解除して、まったく行わないことも可能ではあるが、現状のインターネット調査ではこうしたことはほとんどなく、ほぼ間違いない回答制御を行っている。換言すると、どのような回答制御を行ったかで、表向きは同じ質問文を用いても回答結果に差異が生じると考えるべきである。現実は、こうした裏事情の情報開示がなされることはほとんどないことが問題であり、しかもあまり疑問を持たれることもなくほぼ日常的に用いられている。

今回調査では、こうした実状を十分に考慮して、“**2パネルについて回答制御方法をなるべく揃える**”ように努めた。しかし前述のように、各実施機関が日常的に用いる操作手順があり、また調査経費の制約も勘案せねばならず、結果としてかなりの部分で回答制御の方法に差違が生じた。そこで、2パネルの実際の回答制御の主な差違を表20に要約した。

回答制御は、調査票の質問文形式にも関連する。こうした違いは、詳しくは2パネルで用いた調査票を比較すると明らかである。例えば、スクリーニング調査の質問文「PQ1（性別、年齢区分、未既婚）」を見るとラジオ・ボタンの配列が異なる。また属性項目「AQ2（職業項目）」も形式が異なる。「AQ4（子どもの学年と性別）」のマトリックス形式も同様である。

こうした質問文形式や回答制御方式の違いが回答（行動）に及ぼす影響があることは多くの研究で知られている。実際に今回調査でもこれらの影響と見られる事象が回収後の誤回答として観察された（後述）。こうした事象は測定誤差に関連する。

この他、回答者が回答を開始してから完了するまでの回答行動の遷移進行を観察し、その追跡（トラッキング）を行うことも重要である（[7]、[16]）。今回もこうした情報、例えば回答所要時間や回答完答までの回答履歴などの情報を取得している。また得られたログ情報の解析も可能であるが、本報告書の範囲をやや外れた議論であるのでここでは省略した。また今回調査の質問文のボリュームはそう多くはないので、回答中途での脱落（回答中断）や回答を拒否するなど、いわゆる無回答・回答拒否といった事象発生数はそう多くはなかったが、調査ボリュームが多い場合には、調査票と質問形式の設計、それに回答所要時間や回答パターンの観察が重要な操作となる（表5、表18に一部関連情報あり）。

3.4.3 データ検証と加工処理誤差

調査データには、様々なゴミが介入する。とくに回収後に、当初の調査設計で意図したとおりにデータが整っているとは限らず、誤回答が発生する。このために検証作業（ベリフィケーション）を行う。この検証過程で、その誤りの理由が判明したデータは訂正の後復帰させ分析に用い、また誤り（誤回答）の理由が不明の場合は集計時にサンプル単位で対象外とする（削除する）などの操作を行う。こうして生じる誤差を「**加工処理誤差**」（processing error）という。一般にこうした情報が開示されることはないが、調査品質を知る重要な指標であるので、ここではデータ検証時における誤り発生の主な事象を要約した（表21）。

表 19 調査内容と質問形式、質問数の要約

内容		質問文 コード ^(注1)	質問形式	質問数 ^(注2)
事前調査	先頭ページ	挨拶文、調査参加の勧誘	—	文字説明 ラジオ・ボタン 0
	事前調査 (スクリーニング調査)	調査対象の条件確認	PQ	ラジオ・ボタン 5
	本調査依頼	調査主旨と依頼挨拶文	—	文字説明 ラジオ・ボタン 1
本調査	先頭ページ 第2ページ	調査の説明（概要、問い合わせ先他） 調査のお願い（挨拶） 回答手順・注意書き、回答曜日選択	—	文字説明 ラジオ・ボタン 1
	日記形式	1日分=16(5)問を1週間繰り返す	Q2～Q6	マトリックス ラジオ・ボタン テキスト・フィールド $5 \times 7 = 35$
	ご家族について	AQ (1～5)	マトリックス ラジオ・ボタン 5	
		BQ (1～2)	ラジオ・ボタン テキスト・フィールド 2	
		CQ (1～4)	マトリックス ラジオ・ボタン 4	
		DQ (1～3)	テキスト・フィールド チェック・ボックス 3	
		EQ (1～2)	マトリックス ラジオ・ボタン チェック・ボックス テキスト・フィールド 2	
	自由回答 ・家族の健康について（5項目列記式、テキスト・フィールド）	EQ (3)	テキスト・フィールド 1 (テキスト・フィールドが3ブロック)	
	食生活について	FQ (1～3)	マトリックス ラジオ・ボタン 3	
	健康の情報源・その他について	GQ (1～2)	マトリックス ラジオ・ボタン チェック・ボックス テキスト・フィールド 2	
	自由回答 ・ 子供の食生活について（5項目列記式、テキスト・フィールド） ・ 子供の生活習慣について（テキスト・ボックス） 子育てで大切思っていること（5項目列記式、テキスト・フィールド）	GQ (3)	テキスト・フィールド テキスト・ボックス 1 (テキスト・フィールドが2ブロック、 テキスト・ボックスが1ブロック)	
	第一子の「悩みや気がかり」	GQ (4)	チェック・ボックス 1	
	年収	GQ (5)	ラジオ・ボタン 1	

(注1) 質問文コードはパネルAの調査票に合わせた（調査票を参照）。

(注2) 質問数の計数方法は実施機関により異なる。ここでは独自に、マトリックスなどを含んでも大きな質問を1問と計数した。

(注3) ラジオ・ボタンは単一選択型、チェック・ボックスは多項選択型、マトリックスはラジオ・ボタンを使った並列型配置に対応。

表 20 主な回答制御とその差違

事項	パネル間の差違の有無	パネル間の主な差違
複数のラジオ・ボタン、並列配置	あり	可能、不可
ラジオ・ボタンの抑制	あり	可能、部分的に不可あり
ラジオ・ボタンの配置	あり	横並びのみ、横縦段組可と不可
日時の質問表示	あり	可能、不可
複数段落のマトリックス形式	あり	可能、一部可能
マトリックス形式の回答選択肢欄からのバッヂ化機能 ^(注1)	あり	可能、不可
テキスト・フィールド文字記入上の制約	あり	可能、部分的に不可
質問文内への条件付き文字列の埋め込み処理 ^(注3)	あり	可能、不可
改ページの方式	あり	プログレスバー可能 プログレスバー不可 (進捗確認アイコンで対応)

(注1) バッヂ化機能：マトリックス形式の回答選択肢内の選択結果により別の質問の選択肢表示や質問文そのものの表示の有無を制御する機能。

(注2) 多くの機能で2パネル間に差違があるが、これはそれぞれのパネルで“日常的な方式”が決まっており、これを大きく変更してまで方式を揃えることを行わなかったからである。

(注3) 例えば、質問文内に「第一子の条件」を自動的に埋め込む（調査票、質問BQ2、CQ1～CQ4など）。

表 21 データ検証時に発生した主な誤回答事象の要約

調査形態	発生事象	手当・措置
日記形式	朝食を食べたが朝食の時間帯が未記入	・母親未記入はサンプル除外 ・父親・第一子未記入は「不明」
	朝食を食べたが朝食の時間帯の表記誤記	サンプル除外
	朝食を食べたが朝食の所要時間が未記入	・母親未記入はサンプル除外 ・父親・第一子未記入は「不明」
	朝食を食べたが朝食の時間帯の表記誤記	サンプル除外
	朝食で食べた各人の品数の最小品数（Q4）<揃って食べた共通品数（Q6）（大小関係の不整合）	サンプル除外
	朝食で食べた各人の品数（Q4）で「分からぬ」があるのに揃って食べた共通品数（Q6）で「分からぬ」以外を選択	「わからぬ」に変更、サンプル採用
事後調査	職業（AQ2）の「母親」で「無職」が3名いる	専業主婦の変更、サンプル採用
	職業（AQ2）の「その他」の内容	アフターコーディング処理
	職業（AQ2）で父母とも「専業主婦」「無職」「その他」に回答	「職業」にその他の他に「不明」をアフターコーディング処理
	職業（AQ2）が選択肢1～17（仕事を持っている）のに通勤時間（AQ3）がブランク	「不明」をアフターコーディング
	父親は同居していない（AQ5=2）にも関わらず、日記部分で父親に関する回答がある	空白は「不明」、日記形式部分は未処理
	第一子の通学時間	空白は「不明」扱い
	友人だと思っている人の数	空白は「不明」扱い
	身近に頼れる人や相談できる人の数	空白は「不明」扱い
	朝食に外食を「利用する」（FQ2）と回答したにも関わらず、支払額（FQ3）の質問で「利用しない」と回答。	サンプル除外
	情報源（GQ2）の「その他」の内容に記入なし	「不明」扱い

4. 調査結果の基本分析

ここでは各質問の具体的な内容分析、解釈には言及しない。これは各委員の報告に委ね、主に調査の実施に関わる基本要素について要約する。とくに用いた2パネル間の関係を中心に、以下の各事項について検討した。これを検証する理由は、公募型、非公募型とタイプの異なる2パネルを用いて得られた回収結果の比較を行う際に、両者を総合した回収データによる各質問の吟味、解釈に支障が生じないかどうかの検証でもある。

- ① 2パネルの調査対象者の基本属性の比較
- ② 32パターンの構成について（計画標本と回収標本の関係）
- ③ 事後調査の全質問項目の回答比率の傾向
- ④ 日記形式調査の比較（「平日」「週末」単位の集計から）
- ⑤ 以上について2つのパネル間の比較（類似、差違の検討）を検証
- ⑥ 総合的に2パネルの回収データを用いた分析に保証を与えること

ここで結論を先に示すと、2パネルの回収標本間には属性、質問によっては、若干の差違が認められるものの総合的な吟味を行う際に大きな支障を生じるほどではなさそうということである。最近の傾向として、インターネット調査による調査結果は、パネル構築や登録者集団の構成に差違があるものの、得られた回収回答の内容にはあまり違いがみられないという特徴が見られるようである。理由は様々であるが、以下のような現象が観察されている。

- ・ インターネット調査への回答者が絞られてきていること。とくに、調査への回答頻度の高い人とそうでない人の回答行動の違い、あるいはプロの回答者（professional respondents）の存在も否定できないが、これについてはさらに検証が必要なこと。
- ・ 質問によって回答傾向に差違が見られること。実態を計数するような質問、例えば携帯電話の所有有無とか耐久消費財の所有有無を問うなどは比較的類似の結果となるが、世論調査型質問では、パネルによる回答の揺らぎが大きいといった傾向があるとされること。

このようなことで、今回調査については、実態を問う質問、意識調査的な質問が混在するので、回答分析に際しては注意する必要がある。つまり上に述べたように2パネル間の相対的な関係を吟味しておくことが必要となる。ここでは紙数の都合で、上の①～⑥の一部について述べる。その他については、改めて別の場で報告する。

4. 1 調査対象者の基本属性、2パネル間の比較

まず、スクリーニング調査で得た調査対象者、計画標本（つまり調査依頼を行った発信対象者）、そして本調査で得た回収標本、それぞれの基本属性についての相互の関係を調べる。これは最終的に得られた回収回答の内容を吟味・検証する際の重要な基礎情報となる。

- ・ スクリーニング調査、計画標本、回収標本それぞれの出現比率の相互比較
- ・ とくに計画標本がスクリーニング調査の結果を代表しているか
- ・ 計画標本と回収標本の関係、つまり回収標本が計画標本を代表しているか

(1) 同一パネル内の比較

ここで以下の基本属性について吟味した。2パネルそれぞれについて、スクリーニング調査、計画標本、回収標本に共通するこれらの項目の構成比率を比較する。

- | |
|-----------------------|
| 1) 年齢（回答者、つまり母親） |
| 2) 子どもの人数 |
| 3) 第一子の性別 |
| 4) 第一子の学年 |
| 5) 夫婦の就業状況（共働きか非共働きか） |

多変量連関図で総合的に観察する。図5、6に見るように、2パネルとも、それぞれの属性比率の間にはそう大きな差異は見られない。つまり、パネル内では調査設計時の標本と回収標本との間にはそう大きな差違がなかったとみてよい。

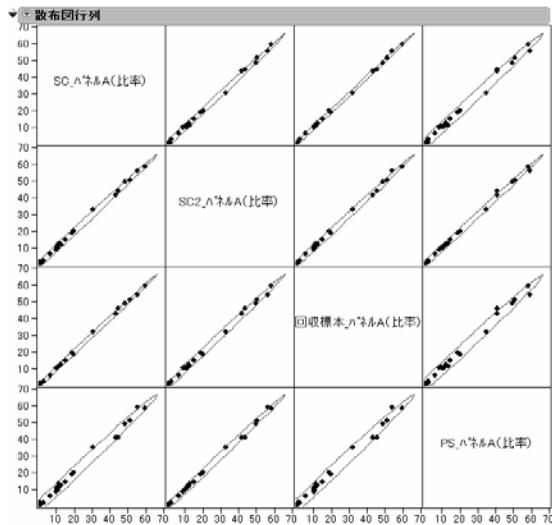


図5 パネルAの比較

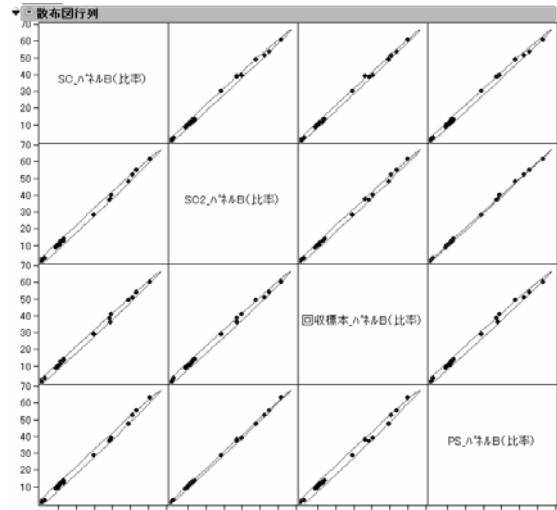


図6 パネルBの比較

	(SC) × (SC2)	(SC) × (回収標本)	(SC) × (PS)
		(SC2) × (回収標本)	(SC2) × (PS)
			(回収標本) × (PS)

注: 多変量連関図の見方

①上の図の各マス内の散布図は左のように対応している。左下半分のブロックは右上半分を縦横軸を入れかえて折り返したものになっている。ここでは、第1行目が「スクリーニング調査と計画標本」「スクリーニング調査と回収標本」「スクリーニング調査と事後調査」、第二列目が「計画標本と回収標本」「計画標本と事後調査」…となっている。

②ここで図中の記号は以下のように対応している。
SC : スクリーニング調査時
パネルA=753（人）、パネルB=1,551（人）

SC2 : 計画標本相当
パネルA=380（人）、パネルB=625（人）

回収標本のスクリーニング調査時点属性
パネルA=322（人）、パネルB=511（人）

PS : 事後調査で得た回収標本属性
パネルA=322（人）、パネルB=511（人）

③以下に現れる多変量連関図も同様の見方をする。

④これを含め統計解析はすべて JMP (SAS社) を用いた。

(2) 2パネル間の回収標本の比較

次に、2パネル間の差異の検証を行う。これは2パネルの回収結果を併合して総合的に分析評価するために必要な事前操作である。調査内容の解釈、吟味には回収データを用いることであるから、とりあえずこれらに必要な2パネルの回収結果の併合利用の可能性を見ればよいので、ここでは「回収標本」についての相互比較を試みる。

ここで図7にみるように、とりあげた属性からみる限りは、2パネルの間には若干の揺らぎ、変動があるが大きな差異があるといえない（図中の網掛けは95%信頼限界）。以上の観察から、ここでは2パネルの回収データを併合して総合的に用いることにはあまり問題はないといえるだろう。

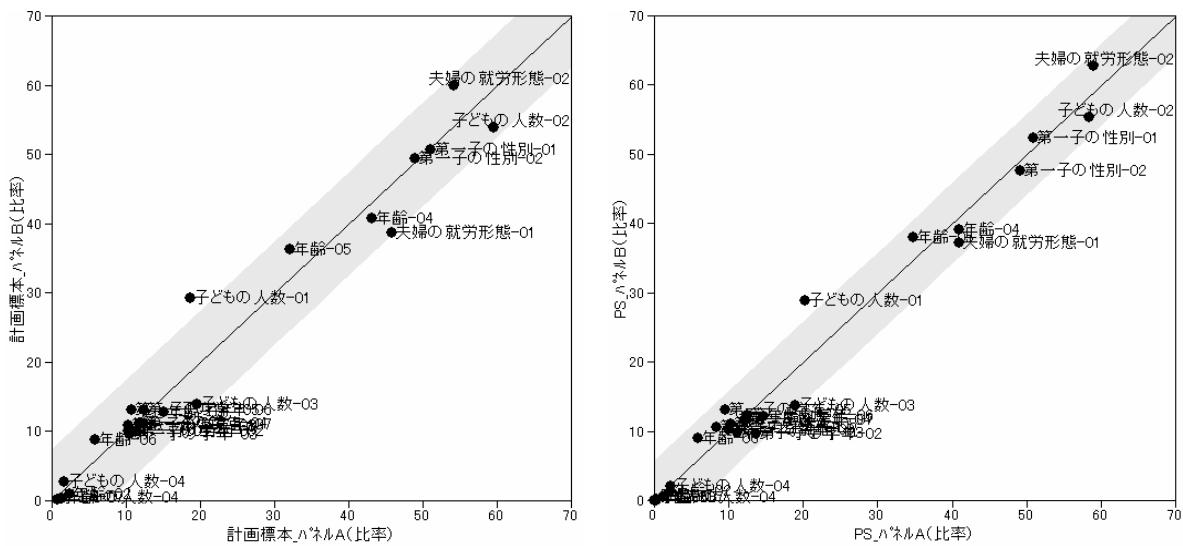


図7 2パネルの計画標本間の比較(左)と回収標本間の比較(右)

4.2 32パターンの構成について ーとくに計画標本と回収標本の関係ー

計画標本作成時には、登録者集団（2パネル）の基礎情報を勘案して、36層に層化して計画標本数の割当（割付）を行った。しかし分析上の要請から、回収後の標本については、32パターンにブレイクダウンした集計が必要とされた。つまり割当時の層化と分析上で利用したいとする層化情報が異なる。そこで集計時にこの新たな32パターンによる区分化情報を加えて集計を行っている。

のことから、割付時情報つまり計画標本の情報をこの32パターンで読み替えた情報と、回収標本の間の関係について、2パネル間の比較を行っておく必要が生じた。既に示したこれらの16パターン、32パターンの層化情報については説明した通りである。いまこの32パターンについて、32パターンのそれぞれの頻度（つまり32層それぞれの中の標本数）の構成比率について多変量連関図を作つて観察する。図8をみると、細かい説明は必要もなく、以下の特徴が観察される。図の点線で囲った左上のブロックがパネルA、右下のブロックがパネルBに対応する（パネル内）。また点線の囲みのない非対角のブロックがパネルAとパネルBとの関係（つまりパネル間）を示している。以下、特徴を要約する。

(1) パネル内の比較 ー計画標本と回収標本の比較

図8の左上、右上の点線で囲ったブロックがそれぞれパネル内に対応する。これを見ると以下の特徴がある。

- ① パネル内の差違はあまりない
- ② 「スクリーニング調査」と「計画標本、回収標本」では若干差違あり
- ③ 「計画標本」と「回収標本」ではあまり差違がない、再現されているようだ

(2) パネル間の比較 ー計画標本間、回収標本間の比較

図8の点線囲み以外の非対角ブロックを観察すると以下の特徴がある。

- ① パネル間の差違が見られる
- ② すべてではないが32パターンのうちのいくつかのパターンに偏りがある
(例) 13: 共働き・子ども複数・女子・中学生、29: 非共働き・子ども複数・女子・中学生、19: 非共働き・一人っ子・男子・小学3~4年生、9: 共働き・子ども複数・男子・中学生など、で変動が大きい。
- ③ それぞれの標本数を勘案し信頼限界でみると上を除きほぼ許容範囲内に入っている

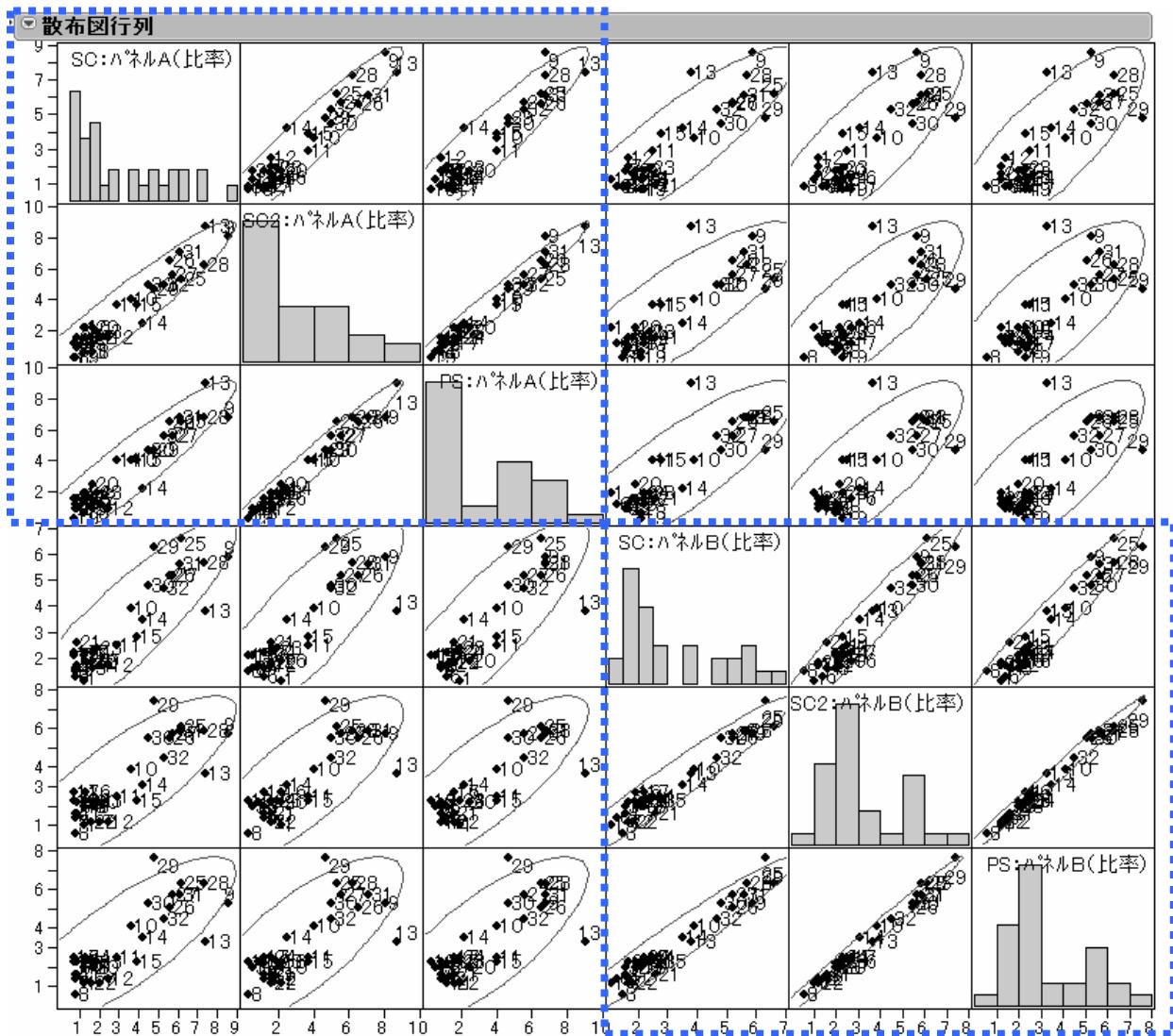


図 8 2 パネルのパネル内、パネル間比較

4.3 各質問の回答比率の分析

ここでは回収標本、つまりパネル A の 322 (人)、パネル B の 511 (人) について、各質問の選択肢別回答比率の比較を行う。これは、前述の属性に加えて 2 パネル間の回答比率で見た回答の傾向（類似や差違）を調べるためにある。まず、ほぼすべての質問の全選択肢についての回答比率を 2 パネルについて散布図を作る（図 9）。ここで横軸はパネル A、縦軸はパネル B に対応する。また、信頼限界（信頼度 95%）で網掛けを付けた。

ここで仮に、質問に対する回答比率の 2 パネル間の出方が同じであれば、対角線上に各比率は分布するはずである。しかしここでは以下のような特徴が観察される。

- 1) 予想されることだが 2 パネル間には若干の差違がある、つまり比率に揺らぎが生じる。
- 2) しかしすべての質問項目というわけではなく、対角から外れる傾向を示す質問がある。
- 3) 図中に統計的な意味での信頼区間を網掛けで示したが、この範囲内に大半の選択肢は入っている。これからわずかに外れる傾向にある質問がある（下記）。
- 4) また、ある幅で（範囲で）変動があるが、多くの質問は類似した傾向にもある。
- 5) とくに偏りが大きい質問項目を拾ってみる。
 - EQ1：家族の健康（「健康である、どちらかというと健康」が外れ）
 - GQ2：健康の情報源（多项選択型質問）（「インターネット」が外れ）

- CQ2 : サークル、クラブに入会しているか（「入会していない、入会している」が外れ）
- AQ3 : 通勤時間（「30分未満」が外れ）
- FQ3 : 朝食、外食の支払額（「501円以上」が外れ）
- DQ1 : 友人と思う人数^(†)（「1~5人」が外れ）

(†) これは事後にカテゴリー化変数として「いない、1~5人、6~10人、11~15人、16~20人、21~25人、26~30人、31人以上」の8区分

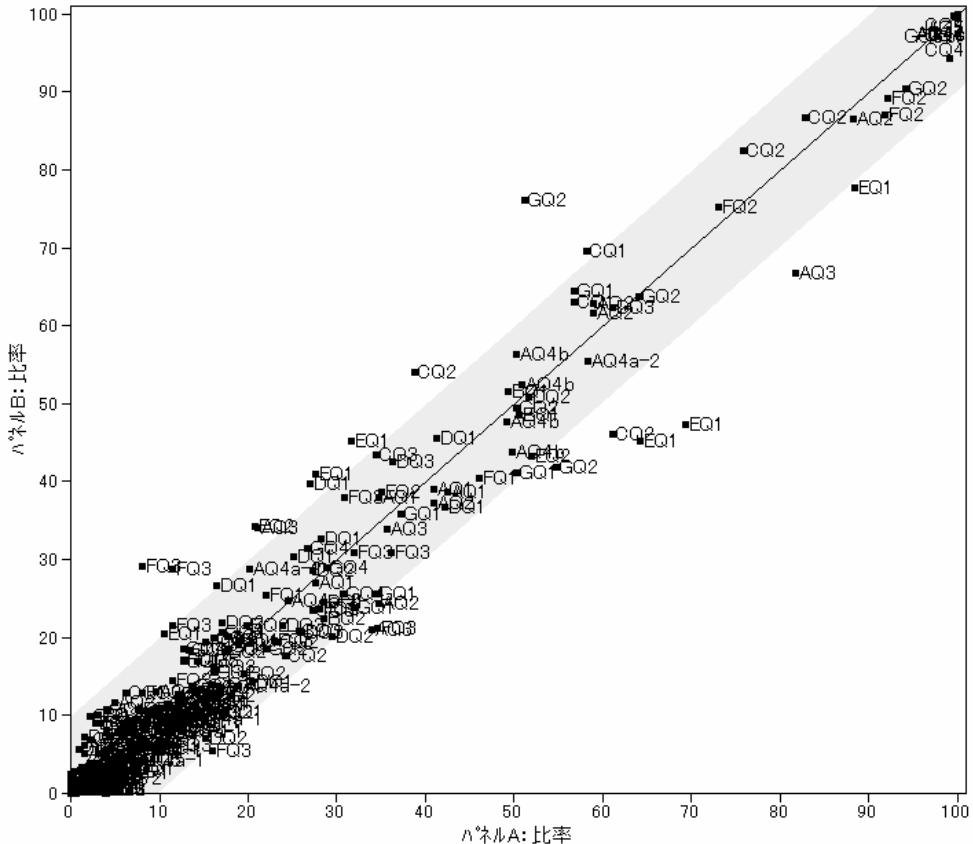


図9 すべての質問の全選択肢についての回答比率の比較

ここで各質問の個々の選択肢のどれで外れたか、また「回答者本人（母親）」「配偶者」「第一子」のどのグループの比率で外れたかの確認も必要だが、とりあえずこのような傾向にあることが見える。さらに吟味が必要だが、全体の回収標本の大きさを考慮すると（2パネルとも大きいとはいえない）、2サイト間の比率をプールした全体の比率で議論することにはそう支障は生じないであろう。ここには記述しないが、全ての質問の回答比率の標本誤差の信頼限界を算出しておらず、この情報も勘案すると2パネル間の比率の出方にはそう大きな差違はないと考えてよさそうである。もちろん質問個々の分析も必要ではあるが全質問の回答比率がこうした類似傾向を示すことにより各質問の分析解釈を2パネルの併合データで進めてもよさそうである。

4.4 日記形式の調査の傾向

日記形式の回収結果を、「平日」（金、月～木の5日間）と「休日」（土日）に集約したデータについて、用いた質問群の回答比率を比べてみる。

ここで用いた質問は調査票にある通りだが、これを実施期間中、1週間について日替わりで尋ねる。これらの回答で注意すべきことは、「回答者である母親」が、「第一子」「父親（つまり配偶者）」についての朝食摂取行動を回答する、つまり自分自身以外は間接的な回答とな

っていることである。よって「第一子」「父親」については、選択肢として「わからない」を用意した。ここでは「平日」「休日」に2分して集計した結果について2パネル間の「回答比率の出方」を調べる。個々の質問についての分析、解釈についてはここでは触れない。まず、平日、週末について「母親」の回答を2パネルについて比較する。図10、図11がその散布図である。それぞれ回答比率が小さい箇所があるので図の左下を拡大した図も付けた。

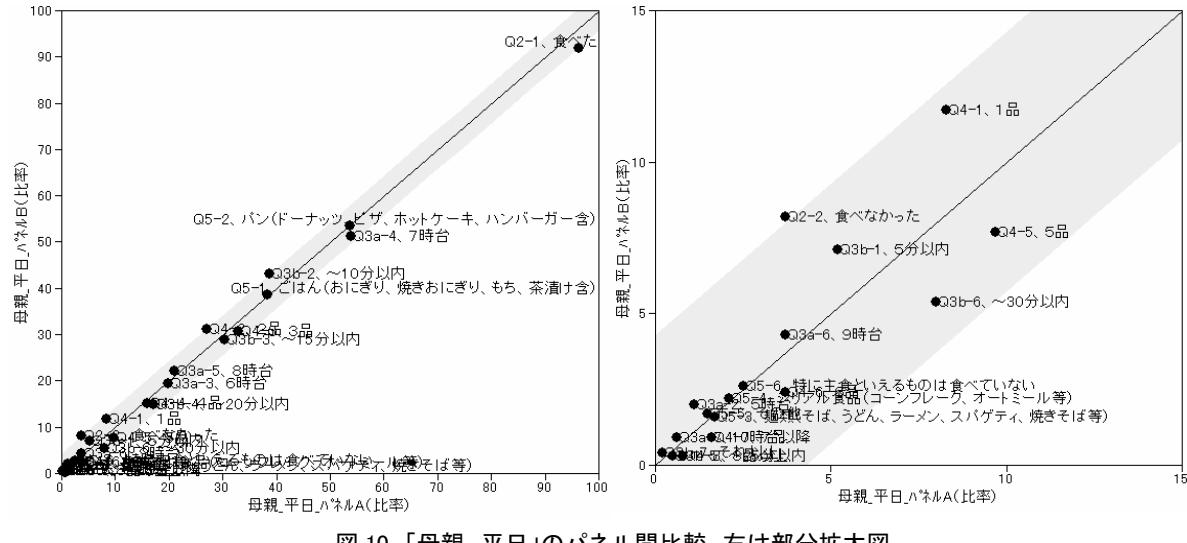


図10 「母親、平日」のパネル間比較、右は部分拡大図

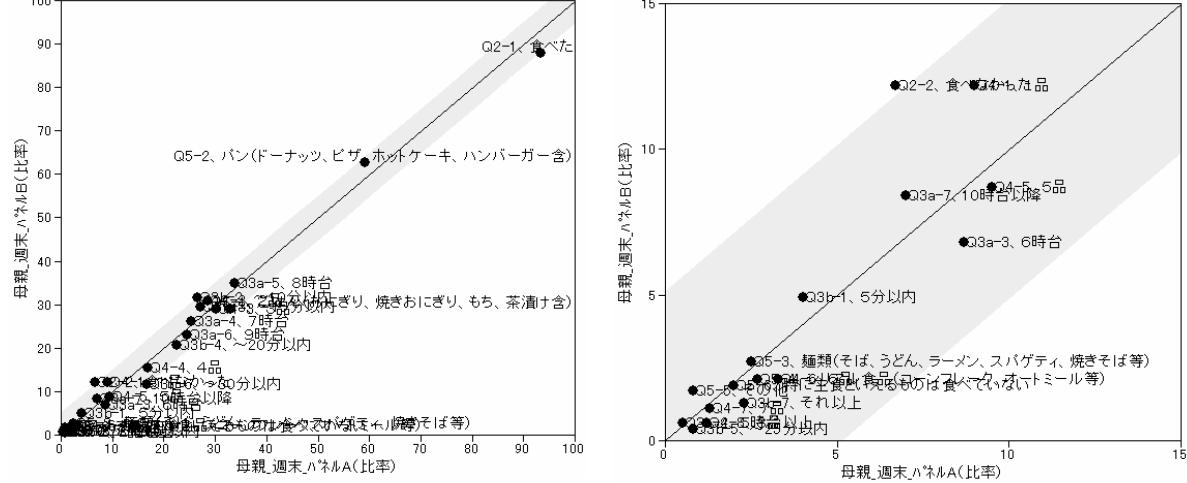


図11 「母親、週末」のパネル間比較、右は部分拡大図

2つの図にみるように、2パネル間の差違はほとんどない。「配偶者」「第一子」についてもほとんど同様で、同じ回答者の間接回答となっていることが影響していると思われる。

ここで全体を俯瞰するために「平日」について、「母親」「配偶者（父親）」「第一子」について多変量連関図を描いてみる。これが図12である。図にみるように「パネル間の差よりも「母親」 \leftrightarrow 「父親」 \leftrightarrow 「第一子」間の差が顕著」である。次に「週末」についても同様の図を描くと、図13となる。こちらは、「平日」に比べ、「差違が全体に少ない」ようである。またパネル間の差違が、「「母親」対「第一子、父親」間」にみられる。回答が「母親からみた配偶者、第一子」の間接的であることと、前にみた32パターンの構成のパネル間の若干の差違がこうした結果に影響しているかもしれない。

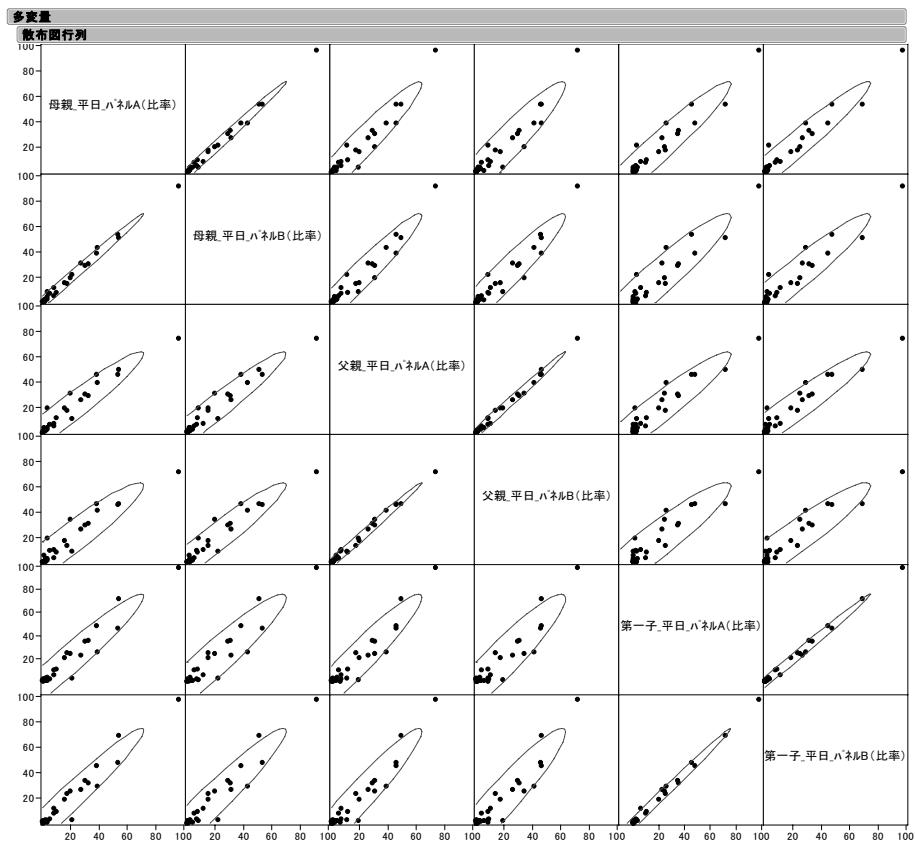


図 12 「平日」についての比率の比較

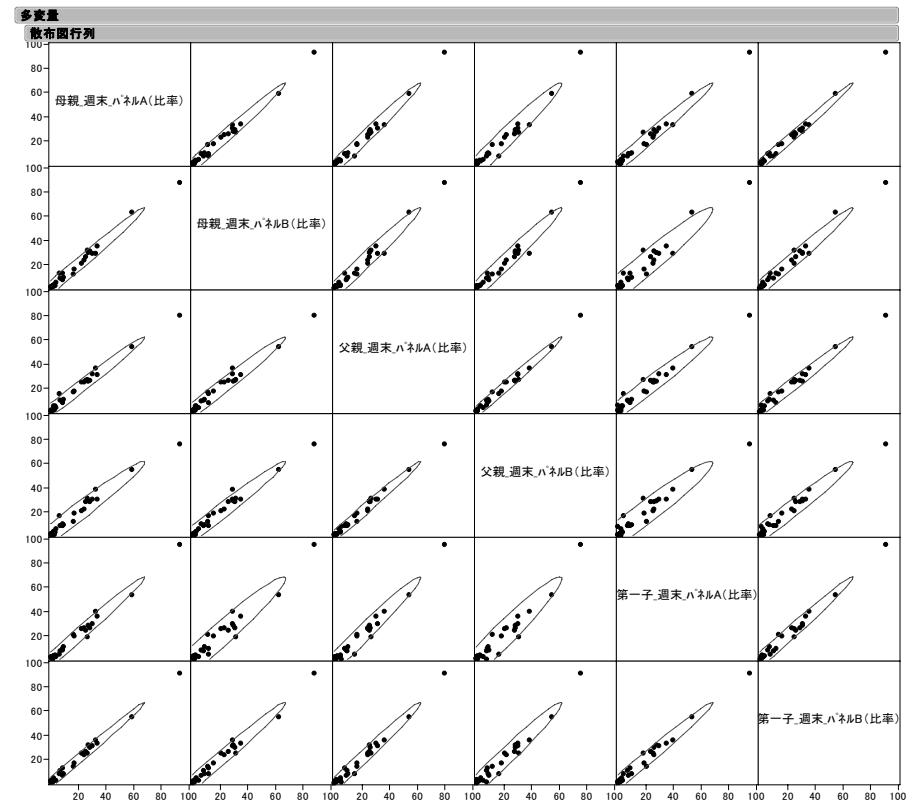


図 13 「週末」についての比率の比較

5. おわりに

今回調査でインターネット調査を用いた理由は、調査対象者に条件設定を行ない、その特定化された集団の意見収集を効率的に行いたい、という要請があつたことがある。つまり従来型の調査方式の適用には難があつた。今回調査で取得の調査データはそれで何かを代表するという性格のものではないし、それが目標ではない。一方、インターネット調査の特性を活かして、この調査方式でなければ出来ない調査内容とすることもできた。とくに調査対象者の条件をかなり限定した、一般には集めにくく対象者について見込みを上回るサンプル数を確保したこと、ある特定層の意識動向を調べるために成功したといえるだろう。しかし単にインターネット調査を用いても、得られた回収データの分析解釈の客観性に疑問がなくはない。また経費面の制約も考慮し、公募型、非公募型の典型的な2調査機関の登録者パネルを用いて相対的な評価が可能な調査設計を工夫した。さらに実査の全過程をなるべく透明にモニタリングすることを必須要件として実査を進めた。結果として、それぞれの質問がほぼ当初意図したように機能し興味ある知見が得られたと考える。

【参考文献】

- [1] Couper, M. Tourangeau, R. and Conrad, F. (2003), *What They See Is What We Get: Response Options for Web Surveys*, as personal communication from author.
- [2] Couper, M.P., Traugott, M.W. and Lamias, M.J. (2001), Web Survey Design and Administration, *Public Opinion Quarterly*, **65**, 230 – 253.
- [3] Couper, M.P. (2001), The Promises and Perils of Web Surveys, A. Westlake and others. (eds), in *The Challenge of the Internet*. London: Association for Survey Computing, 35-56.
- [4] Couper, M.P. (2000), Web Surveys: A Review of Issues and Approaches. *Public Opinion Quarterly*, **64** (4), 464-494.
- [5] De Leeuw, E.D. (2005), To Mix or to Mix Data Collection Modes in Surveys, *Journal of Official Statistics*, vol. 21, No. 2, 233-255.
- [6] Dillman, D.A. (2007), *Mail and Internet Surveys -The Tailored Design Method* -, second edition, 2007 Update, John Wiley.
- [7] Grossnickle, J. and Raskin, O. (2001), *The Handbook of Online Marketing Research*, McGraw-Hill.
- [8] Groves, R. M. (1989), *Survey Errors and Survey Costs*, John Wiley.
- [9] Groves, R.M., Fowler, F.J. Couper, M.P. and others (2004), *Survey Methodology*, John-Wiley.
- [10] Ohsumi, N. and Yoshimura, O. (1999). The Online Survey in Japan: An Evaluation of Emerging Methodologies, Invited Paper in *Bulletin of the International Statistical Institute 52nd Session* (ISI 99 in Helsinki), Book 2, 171-174.
- [11] 大隅昇(2006), インターネット調査の抱える課題と今後の展開, エストレーラ, No. 143, 2-11.
- [12] 大隅昇(2005), 電子的調査情報取得法の統計調査への適用性, 統計局報告書「統計調査の申告方法の多様化策に関する基礎検討のための調査研究」, 95-113.
- [13] 大隅昇(2005), インターネット調査の何が問題か—現状の問題と解決すべきこと— (つづき), 新情報, Vol. 92, 1-20.
- [14] 大隅昇(2004), インターネット調査の何が問題か—現状の問題と解決すべきこと—, 新情報, Vol. 91, 1-24.
- [15] 大隅昇(2004), 「調査環境の変化に対応した新たな調査法の研究」報告, (CD-ROMのみ).
- [16] 大隅昇(2002), インターネット調査, 「社会調査ハンドブック」, p200-240, 朝倉書店.
- [17] 大隅昇(2000), 『「調査環境の変化に対応した新たな調査法の研究」報告書』, 文部省科学研究費, 特定領域研究「統計情報活用のフロンティアの拡大」(課題番号 : 09206117).
- [18] 林知己夫編 (2002), 「社会調査ハンドブック」, 朝倉書店.
- [19] 前田忠彦(2006), 自記式調査における実査方式間の比較研究—ウェブ調査の特徴を調べるための実験的検討—, エストレーラ, No. 143, 12-19.
- [20] 松田浩幸, 大隅昇 (2003), インターネット調査における調査票設問設計の評価-設問形式が回答に及ぼす影響を測る-, ISMシンポジウム「インターネット調査の現状を検証する-調査法としての評価方法と標準化をどう考えるか-, 予稿集, 33 – 54.

- [21] ISM シンポジウム「インターネット調査の現状を検証する—調査法としての評価方法と標準化をどう考えるか—」, 2003 年 3 月 25 日—26 日, 統計数理研究所 (東京).
- [22] 第 33 回 JMRA トピックスセミナー「インターネット調査とそれを巡る諸調査法の可能性」, Mick P. Couper (招待講演者), 2003 年 10 月 23 日 (東京). オーガナイザー : 大隅昇 (統計数理研究所), 吉村宰 (大学入試センター).
- [23] 第 32 回 JMRA 特別研修セミナー「インターネット調査を検証する—質の評価と標準化に向けて—」; コーディネータ : 大隅昇 (統計数理研究所), 吉村宰 (大学入試センター), 2003 年 6 月 10 日—12 日 (東京).

【その他の参考文献】

- [1] 岩村暢子 (2005), <現代家族>の誕生 —幻想系家族論の死, 効果書房.
- [2] 岩村暢子 (2003), 変わる家族 変わる食卓, 効果書房.
- [3] 原田正文 (2006), 子育ての変貌と次世代育成支援, 名古屋大学出版会.
「子育て夫婦」全国 2 万人の実態調査—お金と幸せ大研究—, プレジデントファミリー, 2007 年 1 月号, 特集記事.

【キーワード】

親子調査、インターネット調査、Web 調査、郵送調査、確率的アプローチと非確率的アプローチ、登録者集団、パネル、公募型・非公募型、枠母集団、標本抽出枠 (サンプリング・フレーム)、スクリーニング調査 (事前調査)、本調査 (日記形式、事後調査)、割当 (クオータ法)、非確率的サンプリング、計画標本、回収標本、無作為抽出、系統サンプリング、比例確率抽出、回答制御、未着、調査誤差、測定誤差、無回答誤差、調査不能・無回答、非標本誤差、標本の大きさ (サンプル・サイズ)、自記式、P&P 方式